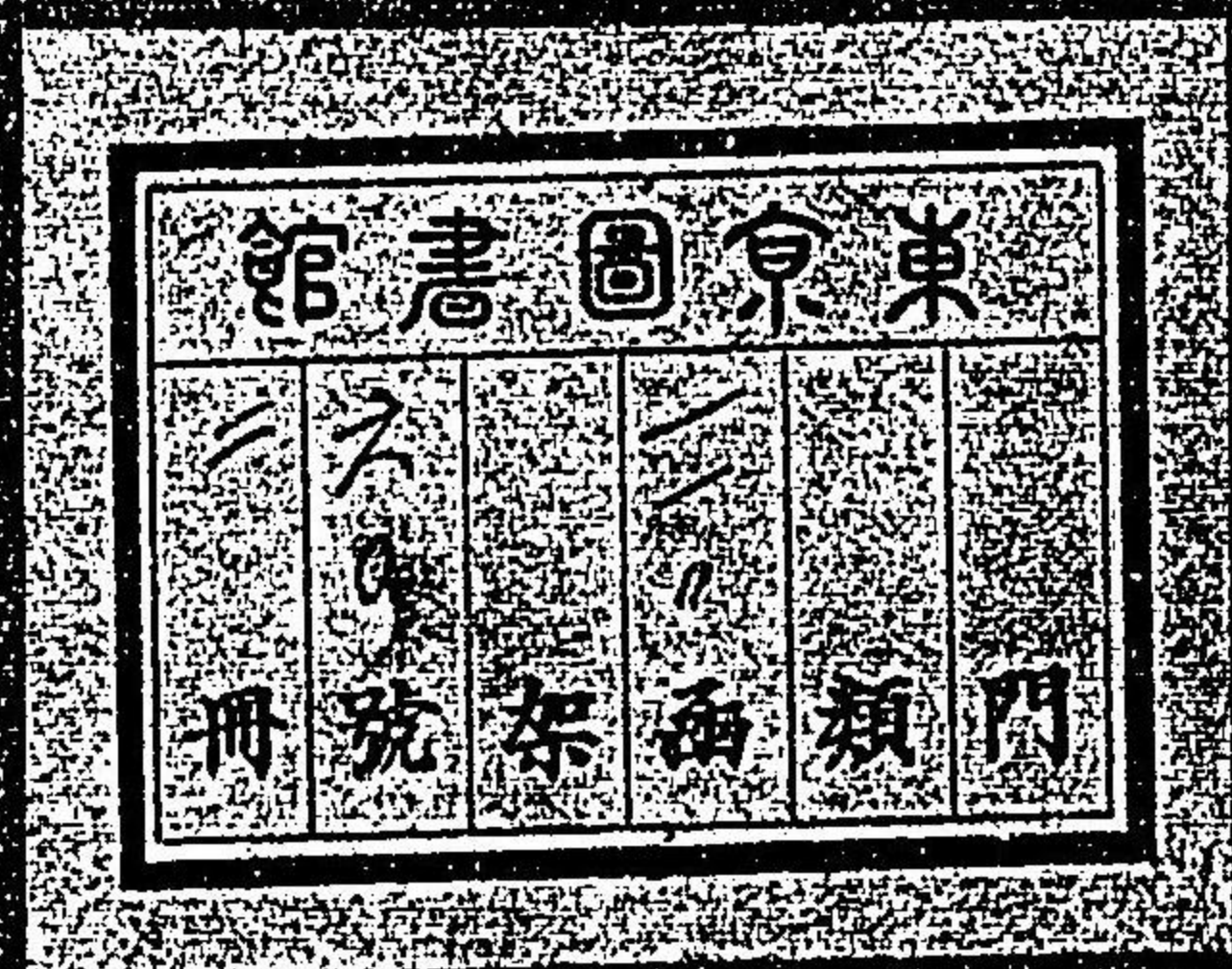


110  
20  
60



平安通志

十七

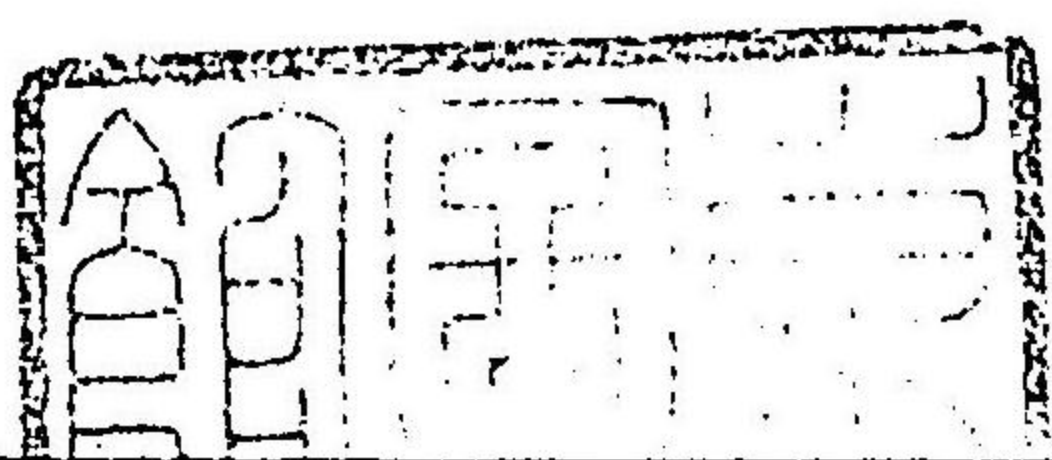


平安通志卷之五十一

第三編

承久ノ亂

湯本文彦等編



源賴朝既ニ兵馬ノ柄ヲ握リ、諸國ニ守護ヲ置キ、家人ヲ以テ之ニ補シ、又總追捕使ヲ置キ、以テ之ヲ統フ、是ニ於テ、政權全ク武門ニ歸シ、朝廷益衰フ、後鳥羽帝英志アリ、常ニ王室ノ陵替ヲ憤リ、恢張ノ志アリ、管テ和歌ヲ作りテ曰ク、おくやまのおとろかしたをふみわけて道ある世をと人にしらすむ、然レトモ施爲意ノ如クナラス、竟ニ脱屣ノ志アリ、大納言源通親之ヲ贊ス、建久九年正月遂ニ位ヲ土御門帝ニ讓リ、上皇ト稱ス、時ニ年僅ニ十九、是ヨリ多ク武士ヲ院中ニ置キ、以テ武事ヲ習フ、承久元年實朝弑セラル、源氏嗣絶ユ、上皇朝權ヲ回復スルノ志益切ナリ、時ニ賴朝ノ子孫亡フト雖トモ、北條義時陪臣ヲ以テ天下ノ大權ヲ執リ、鎌倉ノ勢前日ニ異ナラス、上皇益平ナルコト能ハス、是ヨリ先キ、土御門帝位ヲ皇太弟ニ讓ル、之ヲ順德帝トス、上皇深ク帝ノ英敏ナルヲ愛シ、密謀ニ便セント欲シ、三年三月遂ニ位ヲ仲恭帝ニ傳ヘシム、會、上皇熊野ニ幸ス、信濃ノ人仁科盛遠兒ヲ携ヘテ道傍ニ謁ス、上皇其兒ヲ愛シ、擢テ西面ト爲ス、盛遠感喜ス、竟ニ京

師ニ留ル、義時盛遠ノ幕府ノ家人ヲ以テ恣ニ京師ニ仕フルヲ怒リ、其采邑ヲ沒ス、上皇勅シテ之ヲ還サシム、又攝津長江倉橋ノ二莊ヲ白拍子龜菊ニ賜フ、地頭龜菊ヲ侮ル、龜菊之ヲ訴フ、勅シテ地頭ヲ停メシム、義時皆命ヲ奉セス、上皇怒ヲ蓄ヘ、意ヲ決シテ北條氏ヲ討タントス、五月十四日城南寺流鏑馬ニ託シ、山城大和等十四國ノ兵ヲ集ム、集マルモノ千七百人、十五日院宣ヲ下シ北條氏ノ罪ヲ聲ラシ、五畿七道ニ令シテ義時ヲ追討セシム、是ニ於テ上皇公卿ヲ召シ軍事ヲ議ス、右近衛大將藤原公經ノ鎌倉ニ好アルヲ惡ミ、先ツ之ヲ殺サント欲ス、内大臣藤原公繼之ヲ諫ム、乃チ之ヲ馬場殿ニ禁錮ス、是ヨリ先キ上皇檢非違使三浦胤義ヲ招キ以テ將ト爲ス、是ニ至リ胤義及ヒ佐々木高重ヲ遣リ、義時ノ置ク所京都守護藤原光季ノ邸高江戶ニ在リ、高江戶ヲ襲フ、光季苦戰シテ死ス、上皇大ニ喜フ、既ニシテ事鎌倉ニ聞ユ、鎌倉ノ諸將軍議未タ決セス、或ハ逆ニ京都ヲ擊タント曰ヒ、或ハ函根足柄ノ險ニ據リ、京軍ヲ待タント曰フ、遂ニ大江廣元ノ議ヲ用井、義時ノ弟時房子泰時ヲ以テ兵ニ將トシ、大舉シテ京師ニ入ラシム、泰時急ニ東海道ヨリ西上ス、從兵僅ニ十八騎、東國ノ兵士相踵テ至ル、數日ニシテ十餘萬ニ及フ、武田信光、小笠原長清等、五萬餘騎ヲ以テ東山道ヨリシ、北條朝時、結城朝廣、佐々木信實等、四萬餘騎ヲ以テ北陸道ヨリシ、三道並ヒ進ミテ京師ヲ犯ス、是ヨリ先

キ、上皇藤原秀康ノ冢僮狎松ヲシテ院宣ヲ齎シテ關東ノ諸將ニ諭サシム、義時狎松ヲ捕ヘ、院宣ヲ奪ヒテ之ヲ燒ク、是ニ至リ狎松ヲ放還シ、大兵已ニ發スルヲ報セシム、六月一日狎松京ニ還リテ事ヲ奏ス、朝廷震駭ス、二日上皇公卿ヲ會シテ軍議ヲ定メ、諸將ヲ部署シ、兵一萬七千五百餘ヲ發シ、美濃、尾張、越中ノ間ニ出テ、東軍ヲ拒カシム、藤原秀康、三浦胤義、佐々木高重等ハ一萬餘騎ヲ以テ大豆途ニ、富來某、關某等ハ一萬餘騎ヲ以テ氣瀨ニ、海泉太郎等ハ一萬餘騎ヲ以テ板橋ニ、神戶某等ハ一萬餘騎ヲ以テ鵜沼ニ、糟屋某、筑後某等ハ二萬餘騎ヲ以テ大炊ニ、阿波某、山田某等ハ五百餘騎ヲ以テ食渡ニ、矢某、長瀨某等ハ五百餘騎ヲ以テ葺島ニ、藤原秀澄、山田重忠等ハ一萬餘騎ヲ以テ墨俣ニ、加藤光定等ハ五百餘騎ヲ以テ市河前ニ向フ、既ニシテ官軍皆敗北ス、報京師ニ至ル、中外色ヲ失フ、八日秀康京ニ還リテ狀ヲ奏ス、上皇乃チ戎衣シテ土御門、順德、二上皇ト俱ニ馬ニ御シテ延曆寺ニ幸ス、天皇婦人ノ輿ニ駕シ、神器ヲ奉シテ宮ヲ出ツ、三上皇ト俱ニ西坂本梶井御所ニ留マル、九日上皇延曆寺ヲシテ東軍ニ當ラシメント欲ス、座主辭スルニ東兵猛銳、僧徒ノ禦ク所ニアラサルヲ以テス、十日、上皇、土御門、順德、二上皇及ヒ天皇ト俱ニ還リテ賀陽院ニ居ル、十二日、公卿建議シ諸將ヲ分テ遣リテ、要害ヲ控扼セシム、勢多ニハ山田重忠、伊藤某等三千餘騎、供御瀨ニハ藤

原秀康、三浦胤義等一萬餘騎、宇治ニハ前中納言源有雅、佐々木廣綱等一萬餘騎、  
 牧島ニハ長瀬某、足立某等五百餘騎、芋洗ニハ權大納言藤原信能、二位法印尊長  
 等一千餘騎、淀ニハ權大納言藤原忠信等一千餘騎、廣瀬ニハ河野通信等五百餘  
 騎ヲ以テ之ニ向ハシム、十四日、東軍進ミテ宇治川ニ至ル、時ニ溽暑雨霽レ水潦  
 方ニ漲ル、官軍橋ヲ撤シテ守ル、泰時ノ兵戰ヒテ利アラズ、溺死スル者衆シ、泰時  
 ノ子時氏奮進シテ水ヲ濟ル、官軍當ルコト能ハス、守ヲ棄テ、遁ル、十五日、官軍  
 ノ將秀康、胤義、重忠等敗レテ還ル、上皇門ヲ閉テ内レヌ、泰時遂ニ京師ニ入り、  
 樋口河原ニ至ル、上皇憂迫計ノ出ツル所ヲ知ラス、使ヲ遣リ諭シテ曰ク、此舉宸  
 衷ニ由ラス、謀臣ノ誤ル所トナル、事此ニ及フ、一ニ其請フ所ニ從フヘシ、宜シク  
 部下ヲ戒飾シテ京師ヲ鹵掠スルコト勿レト、又義時ノ本官ヲ復シ、追討ノ院宣  
 ナ停ム、十九日、上皇賀陽院ヨリ四辻殿ニ移ル、是ヨリ先キ土御門、順德、二上皇賀  
 茂貴船ニ遷ル、是ニ至リテ京師ニ還ル、二十日、天皇閑院ニ還ル、時ニ泰時六波羅  
 ニ館シ、廷臣ノ首謀者ヲ求ム、上皇乃チ前權中納言藤原光親、源有雅、藤原宗行、參  
 議藤原範茂ヲ收メテ六波羅ニ送ル、二十五日、又權大納言藤原忠信、參議藤原信  
 能ヲ收メテ六波羅ニ送ル、泰時諸將ニ命シテ各一人ヲ拘セシム、七月、忠信、光親  
 有雅、宗行、範茂、信能等六人ヲ關東ニ押送シ、之ヲ途中ニ殺ス、忠信獨リ釋サル、六

日、北條時氏兵ヲ以テ四辻殿ヲ圍ミ、後鳥羽上皇ヲ鳥羽殿ニ幽ス、八日、泰時上皇  
 ニ逼リテ薙髮ス、乃チ仁和寺ノ道助法親王ヲ召シテ受戒ス、九日、天皇位ヲ九條  
 院攝政藤原  
道隆ノ弟ニ遜レ、神器ヲ閑院ニ委棄ス、十三日、泰時後鳥羽上皇ヲ隱岐ニ遷ス、  
 時ニ年四十一、上皇發スルニ蒞ミ書ヲ九條院ニ贈ル、和歌アリ曰ク、すみそめの  
 袖になさげをわけよかしなみたばかりもくちもこそすれ、二十日、順德上皇ヲ  
 佐渡ニ遷ス、閏十月十日、土御門上皇ヲ土佐ニ遷ス、初メ上皇ノ北條氏ヲ討ツヤ、  
 土御門上皇屢之ヲ諫ム、上皇聽カス、事敗ルニ及ヒ、二上皇海島ニ遷ル、上皇獨リ  
 京師ニ留ルニ忍ヒス、旨ヲ義時ニ諭ス、是ニ至リテ、義時土佐ニ遷シ、尋テ阿波ニ  
 移ス、後チ三上皇皆海島ニ崩御ス、殊ニ後鳥羽上皇ノ如キハ、茅茨松椽、纒ニ風雨  
 ナ凌クノミ、嘗テ和歌ヲ詠シテ曰ク、われこそはにひしまもりよおきのうみの  
 あらき波風こゝろしてふけ、聞ク者涙ヲ垂ル、世ニ之ヲ承久ノ亂ト曰フ、東鑑、承  
久記、增

六波羅探題

承久ノ役、鎌倉執權北條義時、其子泰時弟時房ヲ遣シ大ニ王師ヲ破リ京師ヲ陷  
 レ、天皇ヲ廢シ、三上皇ヲ海島ニ遷シ、親王公卿ヲ流斬シ、官軍ノ將士ヲ處置シ、泰  
 時時房ヲ六波羅ニ留メテ京師ヲ鎮壓シ、兼テ關西軍國ノ政ヲ總管セシム、泰時

東鑑、承久記、增

北方ニ居リ、時房南方ニ居ル、之ヲ兩六波羅探題ト稱ス、時ニ承久三年七月ナリ、  
東條將軍是ヨリ先キ、源賴朝北條時政ヲ遣シテ京師ヲ守護セシメ、其後妹夫藤  
執權次第原能保ヲ以テ洛中ノ守護トス、能保薨スルニ及ヒ、中原親能之ニ代ル、建仁元年  
平賀朝雅ヲ京師警固トナシテ軍政ヲ知ラシメ、親能ニ賦稅ノ事ヲ知ラシム、朝  
雅罪ヲ獲ルニ及ヒ、親能ノ子季時ヲ以テ之ニ代フ、承久元年伊賀光季毛利親廣  
二人ヲ以テ中原父子ノ後ニ補ス、後鳥羽上皇事ヲ舉クルニ及ヒ、先ツ親廣ヲ降  
シ、光季ヲ誅セリ、是ニ至テ泰時更ニ府ヲ六波羅ニ開ケリ、東條蓋シ大事既ニ定マ  
ルト雖モ京師及ヒ關西ノ形勢、鎌倉ヨリ遙ニ措置スヘカラサルヲ以テ、更ニ鎮  
府ヲ六波羅ニ設ケタリ、六波羅ハ元ト平氏ノ宅趾ナリ、賀茂河ノ東ニ在リ、其境  
域蓋シ五條ヨリ七條ニ亘レリ、平氏滅亡ノ後、將軍賴朝上洛シテ、平賴盛ノ池殿  
ノ邸趾ニ就テ新ニ邸宅ヲ造リ、暫ク之ニ居ル、其後妻政子子賴家上洛シテ亦之  
ニ居レリ、泰時京師ヲ陷ルニ及ヒ、遂ニ此邸ニ據テ府ヲ糊メ、上ヲ北方トシ、下ヲ  
南方トス、東條、山城名勝志、府中公署ヲ設置スル、一ニ鎌倉ノ本府ニ倣フ、探題ハ即  
志、山州名勝志、チ執權ニ擬シテ、北條氏ノ宗族ニアラサレハ之ニ補スルヲ得ス、此他評定衆、引  
付頭、奉行人、問注所、侍所、越訴奉行、大番、箒屋、守護人、在京人アリ、問注所ニハ執事  
寄人、侍所ニハ所司、檢斷、大番ニハ大番頭、番頭ノ職員アリ、評定衆ハ概ネ後藤、龜

谷ノ二氏之ヲ世襲シ、引付頭ハ後藤、小田、伊賀ノ族之ヲ世襲シ、奉行人ハ齋藤、杉  
原二氏之ヲ世襲ス、東條、北條記、太貞永元年、式目五十條ヲ六波羅ニ下シ、尋テ六  
波羅法制十六條ヲ定ム、曆仁元年、箒屋ヲ京師ノ街坊ニ設ケテ、盜賊ニ備ヘ、兵士  
ニ命シテ、其役ニ充テシム、是即チ箒屋守護人ナリ、仁治元年、箒屋費ヲ諸國ノ地  
頭ニ課ス、建長六年、西國ノ地訟鎌倉ニ直隸スルモノヲ除クノ外、皆六波羅ニ委  
ネテ處決ス、建長六年、是ヨリ先キ朝廷六波羅ニ問フニ侍所檢斷ノ事務ヲ以テ  
ス、是ニ至リ令シテ廷臣罪アリテ幕府ノ處斷ニ承服セサルモノハ、武士ヲ遣シ  
テ之ヲ捕獲シ、其罪跡未ダ著レヌシテ、應ニ武士ヲ遣スヘキモノハ、准稟シテ施  
行ス、東條建治元年、鎮西ノ大番士ヲ遣歸シテ元寇ニ備ヘ、在京人ニ命シテ之ニ代  
ラシム、北條永仁五年、賊淺原爲賴禁中ニ入りテ亂ヲ作ス、箒屋守護人等擊テ之  
ヲ斬ル、東條元應元年六波羅管スル所ノ三河伊勢等ノ六國ヲ直ニ鎌倉ニ隸ス、將  
次第執權元弘ノ初メ、後醍醐帝密ニ鎌倉ヲ圖リ事漏ル、探題時益仲時兵ヲ遣シテ廷  
臣藤原爲明等ヲ捕ヘ、侍所ニ下シ檢斷ヲシテ之ヲ拷訊セシメ、又諸國ノ兵ヲ發  
シテ笠置ノ行在ヲ攻メシメ、檢斷糟谷宗秋、隅田某ニ命シテ兵員ヲ檢閲セシム、  
笠置陷ルニ及ヒ、帝ヲ六波羅南方ニ徙シ、遂ニ之ヲ隱岐ニ遷シ、隅田高橋等ヲシ  
テ四十八所ノ箒卒及ヒ在京ノ兵士ヲ遣シテ楠正成ヲ攻メシム、帝隱岐ヲ脱シ

テ船上山ニ御スルニ及ヒ、勤王ノ軍四方ニ起ル、時益仲時乃々新主光嚴院及ヒ後伏見花園二上皇ヲ六波羅北方ニ奉徙ス、元弘三年、官軍千種忠顯、赤松則村等勢ヲ合セテ六波羅ヲ圍ム、奉行頭人等騎乘ニ慣レヌ、皆敗ル、時益仲時新主二上皇ヲ奉シテ東走シ、時益矢ニ中テ死シ、仲時近江番馬驛ニ至テ自殺シ、從者皆自刃シテ之ニ殉シ、六波羅滅亡セリ太平記、泰時府ヲ開キシヨリ此ニ至テ凡一百三十年ナリ。

按ニ、太平記六波羅攻ノ條ニ、四方ノ寄手五萬餘騎皆一所ニ寄セテ、五條ノ橋詰ヨリ七條河原マテ六波羅ヲ圍ミヌルコト、幾千萬トイフ數ヲ知ラストアリ、其廣袤ヲ推測スヘシ、境城ノコト平氏軍權ノ條下ヲ參考スヘシ、又同書ニ主上上皇御没落ノ條ニ、南方左近衛將監時益ハ行幸ノ御前ヲ仕リテ打ケケルカ、馬ニ乘リナカラ北方越後守ノ中門ノ際マテ打ケ寄セテ、主上ハヤ寮ノ御馬ニ召サレテ候フニ、ナトヤ長々シク打立タセ給ハヌソト云ヒ捨テ、打出テケレハ、仲時無力鎧ノ袖ニ取り着キタル北ノ方少キ人ヲ引キ放シテ、椽ヨリ馬ニ打乘リ、北ノ門ヲ東ヘ打出テ給ヘハ、捨テ置カル、人々泣々左右ヘ別レテ東ノ門ヨリ迷ヒ出テ給フ、中略、十四五町打ケ延ヒテ跡ヲ顧レハ、早兩六波羅ノ館ニ火カケテ、一片ノ烟ト燒キ揚ケタリ、五月闇ノ比ナレハ、前後モ見エス暗キニ、苦集滅

道ノ邊ニ野伏トモミナクテ、十方ヨリ射ケル矢ニ、左近將監時益ハ、頸ノ骨ヲ射ラレテ、馬ヨリ倒ニ落ナヌ、中略、龍駕遙ニ四宮河原ヲ過サセ給フ處ニ、落人ノ通ルソ、打留メテ物具剝ケト、呼ハル聲前後ニ聞エテ、矢ヲ射ルコト雨ノ如シ云々トアリ、苦集滅道ハ、下學集ニ洛陽東山清水寺南清閑寺之麓也、三井開山教待和尚、欲往城南山崎別業、及經此地、其木履之響、鳴作苦集滅道之音、中略、故呼此道云苦集滅道トアリ、盛衰記ニハ、山門ノ大衆、擲手ハ大關小關四ノ宮川原モ打過テ、苦集滅道ヤ清閑寺、歌中山マテ責寄タリトアリ、伊勢守記ニハ、東山滑リ谷ヲ經テ、歌ノ中山ヘ出玉フトアリ、即今ノ遊谷越ナリ、此時ハ探題等ハ、六波羅北門ヨリ東走シテ、滑リ谷ヲ越エ山科ヲ過キテ、近江ヘ出テシナリ、六波羅北門ハ、五條通ニ在リシヲ知ルヘシ、

- 六波羅北方探題
- |      |        |   |      |         |
|------|--------|---|------|---------|
| 北條泰時 | 承久二年初任 | 同 | 時氏   | 元仁元年交替  |
| 同 重時 | 寛喜二年交替 | 同 | 同 長時 | 寶治元年交替  |
| 同 時茂 | 康元元年交替 | 同 | 同 義宗 | 文永八年交替  |
| 同 時村 | 弘安元年交替 | 同 | 同 兼時 | 正應元年自南遷 |
| 同 久時 | 永仁元年交替 | 同 | 同 宗方 | 永仁五年交替  |

同 基時 正安三年交替  
同 貞房 延慶元年交替  
此間二年缺職

同 時敦 正和元年任命  
同 仲時 元德二年交替  
元弘三年滅亡

同 範貞 元亨元年交替

六波羅南方探題  
北條時房 承久二年初任

同 時盛 元仁元年交替  
仁治三年出家

此間廿二年缺職

同 時輔 文永元年任命  
同 九年被誅

此間四年缺職

同 時國 建治三年任命

同 兼時 弘安七年交替

同 盛房 正應元年交替

同 宗宣 永仁五年交替

同 貞顯 乾元元年交替

同 維貞 正和四年交替

同 貞時 正中元年交替

同 時益 元德二年交替  
元弘三年滅亡

五攝家

初メ清和帝ノ時、太政大臣藤原良房政ヲ攝シ、宇多帝ノ時、其子基經萬機ヲ關白  
シテヨリ、子孫代々攝政關白職ヲ襲キ、九世ノ孫忠通攝政關白ニ至リ、二子基實、  
兼實、互ニ攝政關白氏長者トナル、基實六條又梅津中殿ト號シ、其子基通攝政關白、  
兼實、互ニ攝政關白ト號ス、兼實攝政關白月輪殿又後法性寺ト號ス、其子良通攝政關白、  
九條ト號シ、早ク薨シ、弟良經攝政關白之ニ嗣ク、基通ノ孫兼經攝政關白ノ弟兼  
平攝政關白、鷹司殿ト號ス、良經ノ孫教實ノ弟良實攝政關白、二條ト號シ、實經攝政關白、  
一條ト號ス、近衛、九條、鷹司、二條、一條五家遞ニ攝政關白ヲ世襲ス、之ヲ五攝家  
ト云フ、尊卑分脈、諸家知譜拙記、初メ基通宗嫡ヲ以テ、甚ダ後白河法皇ニ寵セラル、叔父兼實

源賴朝ニ知ラレ、其薦ヲ以テ内覽トナリ、尋テ基通ニ代リ攝政トナリ、遂ニ賴朝  
ノ奏請ヲ以テ、基通ノ莊園ヲ分テ、高陽院ノ地ヲ割キ兼實ニ與ヘ、京極殿ノ地ヲ  
以テ基通ニ付ス、法皇如何トモスル能ハス、玉海、東鑑、是レ實ニ兩家ニ分カル、原因  
ナリ、

近衛家ハ、兼經ノ玄孫經忠右大臣ニ至リ、建武ノ中興ニ際シ、二條道平左大臣ト政事  
ヲ參輔セリ、此時關白南北兩朝ニ分カル、ニ及ヒ、經忠南朝ニ仕ヘテ左大臣ト  
ナル、後村上帝其第二踐阼セリ、子經家亦南朝ニ仕ヘ、繼嗣傳ハラス、經忠ノ叔父

經平北朝ニ仕ヘテ、其後連續セリ、經平五世ノ孫房嗣、永享嘉吉ノ際、二條持基ニ代テ關白トナル、足利家譜、諸家傳、子政家明應六年三宮ニ准シ、年官年爵食邑封戸ヲ賜フ、忠仁公ノ故事ノ如シ、攝關、曾孫前久白、永祿三年、上杉輝虎ノ請ニ因テ越後ニ往ク、當職京師ヲ去テ他ニ之クコト、未ダアラサル所、同十二年幕府ニ逆ヒ出奔シ、爲ニ職ヲ削ラル、後、京師ニ還ル、天正三年、織田信長ト協ハス、薩摩ニ奔ル、後、復タ京師ニ還ル、八年、信長本願寺光佐ト和睦ス、前久之レカ先容トナリテ安土ニ如ク、十年、信長ニ甲州ノ役ニ從フ、信長弑ニ遇フニ及ヒ、前久薙髮シテ龍山ト號ス、十一年、羽柴秀吉ト相惡ミ、濱松ニ奔ル、德川家康善クコレヲ待テリ、公卿、諸家傳、織田家譜、武恩發語、逸史、永祿天正ノ際、天下大亂、皇室式微ヲ極ム、前久廓清ノ志アリ、越後ニ之キ、輝虎ト結托スレトモ果サス、信長京ニ入ルニ及ヒ、之ト相結フ、然レトモ意見合ハス、薩摩ニ下テ島津氏ニ謀ル、亦意ヲ得ス、還テ信長ト本願寺トヲ和セシメテ、暫ク京師ノ靜謐ニ保ツ、幾ナラス、信長弑ニ遇ヒ、其業遂ケス、秀吉ニ依テ事ヲ遂ケントス、亦協ハスシテ、東奔家康ニ依リ、流離困頓スレトモ屈セス、遂ニ京師ノ靜平ヲ見ルヲ得タリ、子信尹三藐院ト號ス、能書ノ稱アリ、文祿二年、征明ノ役ニ從ヒ、異域ヲ遊觀センコトヲ請フ、後陽成帝許サス、公卿補任、續王代、一覽、豐臣家譜、子ナシ、帝ノ弟四子信尋ヲ養テ子トナス、信尋ノ曾孫家淵、豫樂院ト號ス、學ヲ好ミ

書ヲ善シ、世ニ豫樂藤公ト稱ス、續皇胤紀、子孫世々攝關ニ補シ、明治ニ至リ公爵ヲ授ケラル、

九條家ハ、良經ノ子道家、四條帝ノ時、長子教實ト共ニ鈞衡ヲ秉リ、三子賴經ハ將軍外舅、西園寺公經ハ後院別當トナリ、一門烜赫、勢朝野ヲ傾ク、巨利ヲ東山ニ創メ、東福寺ト名ク、五代帝王物、教實十一世ノ孫植通ノ時ニ至リ、兵革騷亂、采邑賦稅ヲ供セス、因テ亂ヲ所々ニ避ク、織田信長入京ニ當リ、上下畏懼、公卿大臣阿諛シテ、皆下風ニ拜ス、獨植通信長ヲ見、揖シテ曰ク、上總殿入浴ト、慶賀シテ直ニ去ル、信長懼ハス、植通謂フ、縱ヒ死ストモ禮ヲ濫シテ恥辱ヲ遺サスト、羽柴秀吉已ニ志ヲ得ルニ及ヒ、其姓ナキヲ辱ナ、藤原氏ヲ稱セント欲ス、近衛龍山之ヲ諾ス、植通曰ク、我家現ニ氏長者タリ、近衛殿ト雖モ、之ヲ專ニスル能ハスト、議論決セス、秀吉乃チ菊亭晴季ト謀リ、姓氏錄ヨリ參撰シテ、豐臣氏トナス、秀吉關白タルニ及ヒ、植通之ヲ快トセス、曰ク、他族此職ニ任ス、未ダ舊例アルヲ聞カス、恐クハ春日神罰ヲ蒙ラント、植通文武ヲ好ミ、源氏物語ヲ注シ、孟津抄ト云フ、織田、植通九世ノ孫尙實關白タルヤ、後桃園帝崩シ嗣ナシ、頗ル異說アリ、尙實策ヲ定メ、光格帝ヲ迎立ス、王政復古ノ基此ニ兆ス、光格帝ノ立ツヤ、職ニ在テ輔翊ノ功多シ、日本、子孫世々攝關ニ補シ、明治ニ至リ公爵ヲ授ケラル、

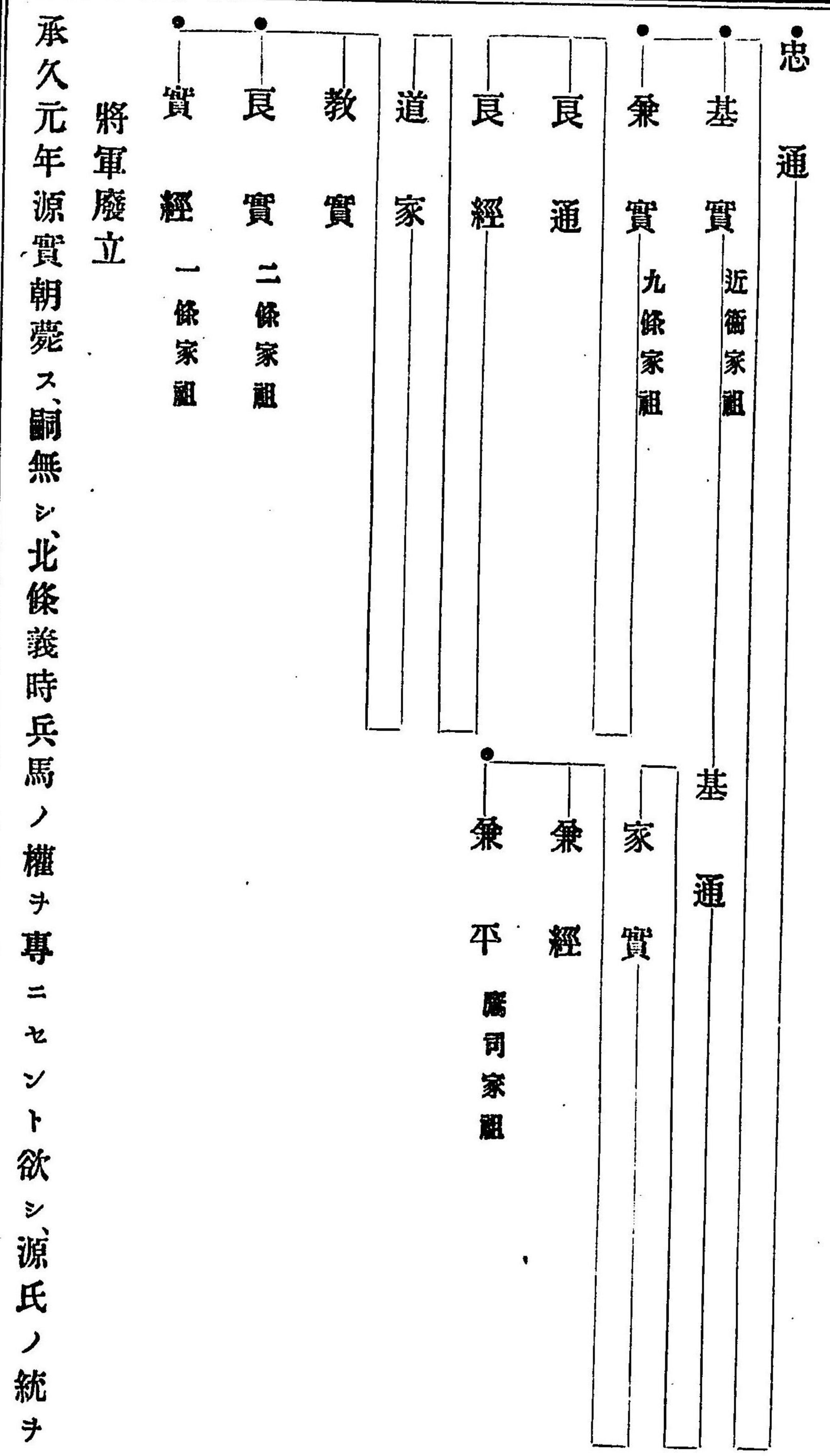


鷹司家ハ、兼平七世ノ孫房平、文明中亂ヲ南都ニ避ケテ薨ス、曾孫忠冬薨シテ嗣  
ナシ、織田信長二條晴良ノ子信房ヲシテ忠冬ノ嗣トナシ、奏請シテ封邑五百石  
ヲ賜ヒ、鷹司家ヲ繼カシム、諸家傳、信房大將軍德川家光ノ外舅トナリ、封邑五百  
石ヲ加ヘ、其後綱吉又采邑ヲ加フ、外舅ノ故ヲ以テナリ、長子信尙嗣ク、女家光ノ  
夫人トナル、傳、信尙ノ孫房輔、威儀名譽アリ、女綱吉ノ夫人トナル、傳、世々  
攝關ニ補シ、明治ニ至リ、公爵ヲ授ケラル、

二條家ハ、良實ノ曾孫道平、建武中興ノ時、近衛經忠ト政事ヲ參輔ス、子良基北朝  
五主ニ歴仕シ、攝政關白太政大臣トナリ、三宮ニ准ス、博覽文才アリ、和歌ヲ好ム、  
家舊記多シ、又諸家ノ祕書ヲ借寫シ、悉ク文庫ニ藏ム、故ニ朝廷儀式、武家禮法、人  
皆其家ニ就テ之ヲ質ス、且祖先師輔以來、累世攝政タリシヲ以テ、家ノ日記モ亦  
悉ク收テ庫ニ在リ、世ニ謂ユルニ二條殿日次記是ナリ、其他奇書舊籍甚々多シ、著  
ニ御禊記、百寮訓要鈔等十餘種アリ、公卿補任、本朝書、五世ノ孫尹房、天文五年致  
仕シテ、次子良豐、左近衛、ト周防ニ如キ、大内義隆ニ依ル、同二十年、陶晴賢ノ亂害  
ニ遇フ、大内義隆、曾孫康通例ニヨリ、大將軍德川家康ヨリ諱字ヲ授カル、康通稱職  
ノ譽アリ、公卿補任、子孫攝關ヲ世襲シ、明治ニ至リ、公爵ヲ授カル、  
一條家ハ、後光明峯寺關白道家ノ子實經ヨリ出ツ、實經五世ノ孫内經ニ至リ、正

平中後村上帝ニ南朝ニ從ヒ、北主後光嚴院ヨリ官爵ヲ削ラル、南朝公卿補任、弟房經嗣  
キ、薨シテ嗣ナシ、二條良基ノ子經嗣嗣ク、經嗣和漢ノ學ニ富ミ、世ノ仰ク所トナ  
ル、子兼良、近衛房嗣ニ代リ、關白トナリ、三宮ニ准シ、食邑三千戸、兵仗隨身、年官年  
爵ヲ賜フ、一ニ忠仁公ノ故事ノ如クス、應仁ノ亂、一條桃華坊ノ邸亂兵ノ掠ムル  
所トナリ、累代ノ和漢群書盡ク烏有トナレリ、兼良之ヲ惜テ痛哭ス、遂ニ去テ南  
都ニ至リ、僧房ニ寓ス、子孫離散シ、潛居幽獨時ノ清ムヲ待ツ、公卿補任、兼良博識  
多聞、最モ朝儀ニ熟シ、和歌ヲ善クシ、神道ニ達シ、兼テ佛書ニ涉ル、當時推シテ才  
學無倫トナス、著書最モ多シ、大將軍義尙ノ請ニ應シテ、文明一統記及樵談治要  
ヲ著ハス、其他公事根元、東齋隨筆、桃華藥葉、花鳥餘情、歌林良材十餘種アリ、足利、  
東齋隨筆、子教房亂ヲ土佐ニ避ケ、文明十二年畑ニ薨ス、子政房、大納言、文明元年亂  
ヲ攝津兵庫ニ避ケ、遂ニ亂兵ノ爲ニ害セラル、兼良南都ニ在リ、訃ヲ聞テ慟哭ス、  
國史實錄、次子房家父ニ從テ土佐ニ徙ル、是時ニ當テ守護細川氏衰ヘ、國郡靖カ  
ラス、國人房家ヲ推シテ中村城ニ居ラシメ、之ヲ御所ト稱ス、房家大將軍義政ニ  
憑テ、國司ニ補ス、四國、相傳フル數十年、曾孫兼定、權中、ニ至リ、天正中老臣長曾我  
部元親ノ爲ニ滅サル、平記、京都ニ於テハ、教房ノ弟冬良家ヲ嗣ク、冬良文才アリ、  
著ハス、所新菟玖波集、世諺問答アリ、嗣ナシ、姪房家ノ子房通ヲ養テ後トス、補任、

子孫相續テ攝關トナリ、明治ニ至リ公爵ヲ授ケラル、  
五攝家略系



立ツルヲ欲セス、東鑑、恩管抄政子ノ意ヲ以テ諸將ト議シ、朝廷ニ奏シテ皇子ヲ擇ヒ  
將軍ト爲サンコトヲ請フ、後鳥羽上皇聽サス、乃チ藤原賴經ヲ迎ヘテ之ヲ立ツ、  
東鑑賴經ハ攝政藤原道家ノ第三子ナリ、公卿補任太政大臣藤原公經ノ妻ハ賴朝ノ妹  
夫中納言能保ノ女ナリ、道家公經ノ女ヲ納レテ賴經ヲ生ム、東鑑、源平抄義時其賴朝ト  
葭葦ノ親アルヲ以テ、迎テ鎌倉ノ主ト爲ス、時ニ年甫テ二歳ナリ、府中ノ事大小  
トナク義時ニ決ス、恩管抄承久以後北條氏ノ威權益熾ナリ、其朝廷幕府ヲ視ルコ  
ト猶ホ辨鬚ノ如シ、寛元二年四月賴經征夷大將軍ヲ其子賴嗣ニ傳フ、賴嗣時ニ  
年六歳ナリ、後賴經北條朝時ノ子越後守光時ト謀ル所アリ、事覺レテ京師ニ歸  
サル、東鑑、保曆、曆間記建長三年賴經又僧了行ヲ遣リ、窃ニ將士ヲ誂シテ北條氏ヲ滅サン  
コトヲ謀ル、是ニ於テ賴嗣モ亦罷メラレテ京師ニ歸ル、北條時賴乃チ宗尊親王  
ヲ迎テ鎌倉ノ主帥ト爲ス、親王ハ後嵯峨天皇ノ第一子ナリ、母賤シキヲ以テ儲  
貳ト爲ルコトヲ得ス、天皇意ニ之ヲ矜ム、賴嗣廢セララル、ニ及ヒテ、時賴請フテ  
之ヲ立ツ、建長四年四月、鎌倉ニ至リ征夷大將軍ト爲ル、東鑑、曆間記文永三年六月、僧正  
良基、法印嚴惠等宗尊ニ親近ス、窃ニ其黨ト北條氏ヲ滅サンコトヲ謀ル、宗尊之  
ヲ知ラス、既ニシテ事漏ル、良基高野山ニ奔リ、食ヲ絶テ死シ、嚴惠ハ亡命ス、北條  
時宗乃チ宗尊ヲ京師ニ送還シ、東鑑、保曆、曆間記之ヲ六波羅北方ニ處ラシム、其子惟康ヲ

立テ、主ト爲ス、宗尊ノ京師ニ還ルヤ、上皇北條氏ヲ憚リ見ユルコトヲ許サス、  
 左少辨藤原經任ヲ鎌倉ニ遣リ其意ヲ伺ハシム、他故ナキヲ知り乃チ安ソス、是  
 ニ於テ宗尊承明門院土御門ノ故宮ニ徙リ、始テ上皇及母准三宮ト相見ルコト  
 ナ得タリ、宗尊右近馬場ニ於テ雪ヲ觀ル歌ヲ咏シテ曰ク、なほたのむきたのよ  
 雪のあさほらけあとなきことにはうつゝもるゝみは惟康親王正應二年十月、北條貞時  
 以テ征夷大將軍ト爲ル、時ニ年甫テ三歳ナリ、正應二年十月、北條貞時  
 惟康ヲ廢シテ京師ニ還ス、其出ツルヤ網代興ニ倒昇ス、時人之ヲ異トス、相謂テ  
 曰ク將軍京師ニ流サルト、惟康已ニ廢セラレテ、久明親王ヲ迎ヘテ鎌倉ノ主帥  
 ト爲ス、久明親王ハ後深草天皇ノ第六子ナリ、正應二年十月、親王ト爲リ、尋テ  
 征夷大將軍ト爲ル、帝王編延慶元年、北條貞時久明ヲ廢シ、其子守邦王ヲ以テ主  
 帥ト爲ス、久明ハ佐介谷ニ徙サレ、尋テ京師ニ歸ル、守邦王七歳ニシテ立テ、征夷  
 大將軍ト爲ル、元弘三年、新田義貞鎌倉ヲ陷レ、北條氏滅フルニ及ヒ、守邦薙髮ス、  
 尋テ薨ス、將軍執鎌倉將軍賴經ヨリ守邦ニ至ル六世、政權皆北條氏ニ在リ、概ネ  
 幼ニシテ立テ長スレハ廢セララル、終始ヲ全クスル者ナシ、

元寇ノ難

龜山帝文永四年、蒙古主忽必烈書ヲ高麗ニ托シテ、好テ通センコトヲ求ム、太宰

府之ヲ鎌倉ニ報ス、執權北條時宗之ヲ京師ニ奏ス、朝廷大ニ駭キ、二十二社ニ奉  
 幣シテ蒙古ノ難ヲ告ク、四月使ヲ發シテ太神宮及ヒ山陵ニ告ケ、諸寺諸社ヲシ  
 テ厭禳ノ法ヲ行ハシム、文永六年九月、高麗ノ使蒙古ノ牒ヲ持シテ至ル、朝議蒙  
 古ニ與フル答書ヲ鎌倉ニ下ス、幕議抑ヘテ遣ラヌ、使者西海ノ地形ヲ探視シテ  
 去ル、八年蒙古使趙良弼至リ、國書ヲ京都ニ奉ラントス、太宰府聽サヌ、良弼竟ニ  
 副本ヲ進ム、府之ヲ鎌倉ニ呈ス、幕府之ヲ京師ニ奉ル、廷議答書セントス、又竟ニ  
 遣ラヌ、十年十一月宣命ヲ箱崎八幡祠ニ奉シテ海内寧靖ヲ祈ル、十一年十月、五  
 日蒙古對馬ニ寇ス、地頭右馬允宗助國之ニ死ス、十四日壹岐ニ寇ス、守護代平内  
 左衛門經高之ニ死ス、十九日、賊筑前今津ニ至ル、水陸並ヒ進ム、二十日、博多ニ逼  
 ル、此夜大風雨賊艦盡ク碎ケ、溺死スル者一萬三千五百餘人、龜山上皇御書ヲ八  
 陵ニ獻シ外寇ヲ禳フヲ祈ル、十一月六日、鎮西ノ捷聞京師ニ至ル、後宇多帝建治  
 元年正月二十二日、龜山上皇石清水八幡祠ニ詣シ、宿禰七日、元寇ヲ禳フ、四月元  
 使杜世忠等長門室津ニ至ル、使ヲ伊勢太神宮ニ發シ、外寇ヲ厭禳ス、太宰府元使  
 杜世忠等ヲ鎌倉ニ護送ス、北條時宗之ヲ籠口ニ斬リ、其首ヲ梟ス、建治二年正月  
 龜山上皇石清水八幡祠ニ宿禰ス、弘安二年正月、使ヲ太神宮ニ發ス、六月元使周  
 福、樂忠、陳光等ヲ博多ニ斬ル、六月五日、元ノ大軍志賀島能古島ニ至ル、我軍防戰

屈レス、閏七月一日夜、颶風大ニ起リ、賊船覆没ス、餘衆降ヲ乞フ、悉ク之ヲ斬ル、賊兵十萬、生テ還ルモ、僅ニ三人ナリト云フ、

伏見天皇正應元年正月、後深草上皇願文ヲ石清水八幡宮ニ獻シテ、寇ノ平クテ、祈ル、四月又願文ヲ春日社ニ獻ス、永仁元年七月、使テ大神宮ニ遣シ、宸筆宣命ヲ奉シテ、外寇ヲ禳フ、是ヲ元寇ノ難ト曰フ、此時龜山上皇最モ國難ヲ憂ヒ、其宸筆ノ願文ヲ神宮ニ奉シ、身ヲ以テ、國難ニ代ラント祈ルト云フ、帝誠ヲ致ス所、上下一致能ク、此全捷ヲ奏シ、以テ外虜ノ窺竊ヲ千載ノ後ニ絶ツ、豈盛ナラスヤ、龜山上皇ノ宸翰今存セス、後深草上皇願文ヲ左ニ掲ク、

後深草上皇願文

天皇我詔旨度、掛畏故、伊勢乃度會乃五十鈴河上乃下都石根爾、大宮柱廣敷立臣、高天原爾、千木高知臣、稱辭定奉留、天照坐須、皇太神乃廣前爾、恐美、恐美、申賜者、久申、朕忝毛、苗胤乎、稟臣、謬臣、神器乎、守留、爰去年乃冬比與、異國忽爾、牒書手、送臣、強和好乎、求半、若逆命者、可用兵之由乎、告久、緯既爾、文永利、起天、今爾、及度、倍利云、止毛、我朝未容其言須、誠爾、安危乃間多、難決久、理亂乃本毛、匠辨志、邊將毛、堅久、防禦乎、儲臣、鎮爾、警衛乎、致勢、邦家能、煩比、無爾、非須、旁太、衆庶之患信、有利、加之須、頃者天變屢呈、地妖頻示、須、又災旱涉旬臣、稼穡不節須、阿臣、云彼云是比

一歎一慎乎、是則朕加、薄德乃令然留、上爾、日本久具其柄乎、失臣、國策朝典毛、衰

微志、州縣鄉邑毛、凋弊臣、賢人聖人毛、不佐須、宗廟社稷毛、不與留、故利、然而毛、自

今以後爾、廢乎、興志、絕毛、繼臣、風乎、移志、俗乎、易臣、祖宗乃道乎、道止、帝王乃德乎

德止、政令乎、守可行義、心乎、擔比、叡念乎、凝志、祈申者、皇太神定臣、靈隱、乎、垂

禮止、立古、冥助乎、施給志、祈念行乎、故是以吉日良辰乎、擇定臣、從二位行權

中納言藤原朝臣爲兼、王從五位上行正親正兼重王、中臣從四位下行神祇權少

副大中臣朝臣師世、差使止、忌部正五位下行神祇權少副齋部宿禰尙孝加、弱

肩仁、太羅取懸臣、內外乃宮仁禮代乃大御幣爾、金銀乃御幣乎、相副臣、持齋利、令

捧持臣、奉出給布、中爾、內宮者、御弓御箭御飾劍御梓御錦蓋御鏡御裝束御玉佩

御麻桶御線柱唐錦一段唐綾一段火取珠一顆作花三枝金鳳一羽雕馬一匹爾

左右乃御馬各一匹乎、牽副臣、進給布、外宮者、仁御弓御箭御飾劍御梓御錦蓋御鏡

御玉佩御麻桶御線柱唐錦一段唐綾一段火取珠一顆作花三枝銀鳳一羽雕馬

一匹爾、右乃御馬一匹乎、牽副臣、進給布、又荒祭宮爾、金銀獅子形各一頭進給布

此外加、內外乃宮仁銀劍各一柄乎、副臣、進給布、掛畏故、皇太神此狀乎、平久安久

聞食臣、形兆未見爾、災孽乎、攘比、兵戈未起爾、逆亂乎、撥免、給臣、天皇朝廷乎、寶位

無動久、常磐堅磐仁、夜守日守仁、護幸信、奉給臣、天下淳樸仁、海內清平爾、護恤給

倍恐美止恐美毛申賜者久申辭別臣申賜久者殊爾思食事在臣内外二宮乃正權福宜  
 以下爾各賜一階布此旨乎令照察給臣所祈乃勅願者幽谷乃如應響久明鏡乃  
 如寫象臣寶祚久長爾玉體安穩仁護恤給止恐美毛申賜者久申正應六年  
 七月八日八幡島靈訓、東國通鑑、神皇正統記、伏見編、  
 兩統交立

後嵯峨帝寬元四年位ヲ皇太子ニ傳フ、是ヲ後深草帝トナス、正嘉二年皇弟恒仁  
 親王ヲ立テ、皇太弟トナス、太弟最モ後嵯峨法皇ノ爲ニ鍾愛セラル、故ニ立ッ  
 コトヲ得タリ、正元元年帝位ヲ皇太弟ニ傳フ、是ヲ龜山帝トナス、文永五年皇子  
 世仁親王ヲ立テ、皇太子トナス、同九年後嵯峨法皇崩ス、百鍊抄、神皇正統記、五代帝王物語、法皇  
 素ヨリ意ヲ帝ニ屬ス、崩スルニ臨ミ、密ニ勅シテ曰ク、大統ハ必ス之ヲ當主龜山  
 ノ子孫ニ傳ヘヨ、新院後深草ノ子孫ハ覬倖スルヲ得ス、但シ長講堂領百八十所ハ  
 永ク之ヲ新院ノ子孫ニ給ヘヨト、梅松論朝廷モト坂上田村麻呂ノ劔ヲ藏シ、傳ヘ  
 テ寶鎮トナス、法皇之ヲ大宮院藤原嬉子、四圍寺實氏女、後嵯峨ニ屬シテ竊ニ帝ニ  
 授ク、之ニ依テ後深草上皇帝ト相好カラス、梅松論  
 按ニ長講堂ハ宣胤卿記ニ、當堂御願之開基者、後白河院御祈願として、嚴重無  
 雙之靈場トアリ、山城名勝志ニハ、長講堂舊在六條殿、其後所々造替、今移六條

北萬里小路東、按當堂後白河院於六條殿内御草創、元律院也、近世爲淨土宗、後  
 白河院御宸翰御畫像在于今勅封トアリテ、本ト六條殿ノ内ニアリシカ、後世  
 遷轉シテ、今ハ京都市下京下寺町ニ在リ、長講堂領トハ、此堂ニ附セラレシ領  
 地ナリ、

同十一年帝位ヲ皇太子ニ傳フ、是ヲ後宇多帝トナス、建治元年後深草上皇ノ皇  
 子熙仁親王ヲ立テ、皇太子トナス、歷代皇記、一代要記、是ヨリ先キ、鎌倉執權北條時宗謂  
 フ、本院後深草身正嫡ニ居テ失德アルニアラス、宜シク其胤ヲシテ天位ヲ踐マシ  
 ムヘシト、遂ニ議シテ熙仁親王ヲ立ツ、梅松論鎌倉始メテ後嵯峨帝ノ遺勅ニ違ヘリ、  
 龜山上皇之ヲ憤ル、梅松論弘安十年帝位ヲ皇太子ニ傳フ、是ヲ伏見帝トナス、歷代  
 正應三年賊數人禁中ニ亂入シテ寢殿ヲ犯ス、帝之ヲ別殿ニ避ク、賊衛兵ト闘テ  
 自殺ス、其發スル所ノ箭ニ書シテ太政大臣源爲賴ト曰フ、而シテ其佩刀ハ乃チ  
 前參議藤原實盛ノ寶器ナリ、因テ實盛ヲ捕フ、時人流言ス、武人遺勅ニ違テ帝ヲ  
 立テタリ、故ニ龜山上皇密ニ之ニ命セシナリト、上皇乃チ告文ヲ鎌倉ニ賜テ、事  
 漸ク解ケタリ、是ニ因テ上皇益鎌倉ヲ惡ム、梅松論永仁六年帝位ヲ皇太子ニ傳  
 フ、是ヲ後伏見帝トナス、梅松論是ヨリ先キ、伏見帝使ヲ鎌倉ニ遣シテ、曰ク、龜山帝後  
 鳥羽帝ノ播遷ヲ憤リ、誓テ將ニ鎌倉ヲ攘滅セントス、願フニ時未タ至ラサルノ

ミ、若シ其子孫ヲシテ位ヲ襲カシメハ必ス其志ヲ繼ク者アラシク、若シ朝令一タ  
 ヒ下ラハ、安ソ諸國武人響ノ如ク應セサルヲ知ランヤ、果シテ然ラハ、鎌倉夫レ  
 危キ無キヲ得ンヤ、朕カ子孫ノ如キハ、唯卿カ家ニ是レ頼ル、必ス當ニ鎌倉ト相  
 終始スヘキノミト、執權北條貞時之ヲ信シ、龜山上皇ノ皇胤ヲシテ位ヲ嗣カシ  
 ムルヲ欲セス、遂ニ帝ヲ立ツ、後宇多上皇悦ハス、左中辨吉田定房ヲ鎌倉ニ遣シ  
 テ其遺詔ニ違フヲ讓ム、貞時遂ニ後深草龜山兩宗迭立ノ策ヲ立テ、限ルニ十年  
 ナ以テス、梅松論乃チ後宇多帝ノ皇子邦治親王ヲ立テ、皇太子トナス、正安三年  
 帝位ヲ皇太子ニ傳フ、是ヲ後二條帝トナス、伏見上皇ノ皇子富仁親王ヲ立テ皇  
 太子トナス、德治三年帝崩シ、皇太子立ツ、是ヲ花園帝トナス、延慶元年後宇多上  
 皇ノ皇子尊治親王ヲ立テ皇太子トナス、文保二年帝位ヲ皇太子ニ傳フ、是ヲ後  
 醍醐帝トナス、後二條帝ノ皇子邦良親王ヲ立テ皇太子トナス、梅松嘉曆元年皇太  
 子薨ス、初メ後宇多法皇皇太子脚疾アルヲ以テ詔シテ曰ク、若シ邦良病甚シケ  
 レハ、宜シク位ヲ當主ノ皇子ニ傳フヘシト、是ニ至テ帝諸皇子ヲ擇テ之ヲ立テ  
 ント欲ス、北條高時固ク兩宗迭立ノ議ヲ執テ可カス、歷代皇紀、神皇正統記、增補帝權中納言  
 定房ヲ鎌倉ニ遣シテ之ヲ諭ス、後伏見上皇モ亦權大納言日野俊光ヲ遣シテ其  
 事ヲ對辯ス、定房曰ク、今後深草帝ノ子孫世長講堂領ヲ襲ク、是レ後嵯峨帝ノ遺

詔ニ遵フナリ、今上ニ至テ子孫位ヲ襲ク、獨リ遺詔ニ遵フヘカラサルカト、高時  
 旨ヲ奉セス、帝怒テ曰ク、神武以降、豈人臣ニシテ皇統ヲ議スルモノアラシヤ、遺  
 詔ノ重キ、人臣ノ當ニ遵奉スヘキノ所、彼乃チ敢テ之ヲ廢格シ、妄リニ兩宗迭立ノ  
 議ヲ執ル、暴慢極マレリ、後深草ノ子孫、既ニ長講堂領ヲ襲キ、又天位ヲ繼ク、固ニ  
 豐厚タリ、而シテ朕カ子孫ハ則一旦位ヲ去ラハ、尺地ヲ獲ス、何ヲ以テ自ラ給セ  
 ン、宜シク長講堂領ヲ以テ朕カ子孫ニ屬スヘシト、乃チ復タ使ヲ遣シテ高時ニ  
 諭ス、高時遂ニ詔ヲ奉セス、帝益憤怨ス、梅松論高時使ヲ遣シ奏請シテ、後伏見上皇  
 ノ皇子量仁親王ヲ立テ、皇太子トナス、車馬上皇ノ宮ニ輻湊ス、兩宗迭立ヨリ、  
 冊立禪代アル毎ニ人心冷熱頓ニ變シ、天子ノ位傳舍ノ如シ、增補元弘元年帝遂ニ  
 怒ヲ發シテ、鎌倉ヲ滅サンコトヲ謀ル、後伏見上皇使ヲ鎌倉ニ遣ハシ、帝ノ謀ヲ  
 告テ曰ク、卿早ク決セサレハ天下必ス亂レント、高時即チ兵ヲ發シテ帝ヲ執ヘ、  
 承久ノ例ニ倣テ之ヲ隱岐ニ遷シ、皇太子ヲ奉シテ、帝ヲ京師ニ稱ス、是ヲ光嚴院  
 トナス、同三年勤王ノ軍四方ニ起ル、六波羅探題北條仲時益新主及ヒ後伏見  
 花園二上皇ヲ奉シテ、鎌倉ニ走ラントシテ、途ニ敗死ス、而シテ鎌倉モ亦新田義  
 貞ノ爲ニ滅ホサル、帝京師ニ還リ、光嚴院ヲ廢ス、延元元年足利尊氏ノ敗レテ西  
 奔スルヤ、赤松則村ノ勸ヲ以テ、光嚴廢主ノ院宣ヲ請ヒ、錦旗ヲ得テ官軍ニ抗セ

ント欲シ、權大納言日野資名ニ依テ之ヲ得、進テ京師ニ入ル、帝延曆寺ニ幸ス、廢  
 主既ニ尊氏ト内約アルヲ以テ、脱シテ長講堂ニ入ル、尊氏之ヲ奉迎シ、其弟豐仁  
 親王ヲ擁立シテ帝ヲ稱ス、是ヲ光明院トナス、帝吉野ニ潜幸スルニ及ヒ、始テ南  
 北兩朝ニ分ル、是實ニ兩統交立ノ結果ナリ、梅松論、辨  
鏡、太平記、  
 兩統交立略表。ナ附スルハ北朝ナリ、  
 後嵯峨帝

一 後深草帝 在位十四年

四 伏見帝 在位十二年

五 後伏見帝 在位四年

七 花園帝 在位十二年

⊕ 光嚴院 初爲後醍醐帝皇太子

光明院

三 龜山帝 在位十五年

- 三 後宇多帝 在位十四年
- 六 後二條帝 在位七年
- ⊕ 邦良太子 後醍醐帝皇太子、早世、
- 八 後醍醐帝 在位二十二年、但在京師十七年、

西園寺氏

西園寺氏ハ閑院ノ流ニシテ、太政大臣藤原公季仁義ノ曾孫、權大納言公實ノ四  
 子、權中納言通季ノ後ナリ、通季ノ曾孫公經内大臣實、承元ノ初正二位、權大納言  
 トナル、公卿諸公經ノ妻ハ、征夷大將軍源賴朝ノ妹夫、中納言藤原能保ノ女ナリ、  
 故ヲ以テ公經勢ヲ恃ミテ驕恣ナリ、後鳥羽上皇嘗テ公經ニ近衛大將ヲ許ス、建  
 保五年大將闕ク、太政大臣藤原賴實子師經ヲ舉ク、上皇已ムヲ得ス、使ヲ遣シテ  
 意ヲ公經ニ諭ス、公經怨望シテ曰ク、吾復タ朝ニ立ツニ意ナシ、將ニ披鬚シテ世  
 ナ避ケ、往テ臣カ姻戚源實朝ニ依ルヘシト、中使還リ報ス、上皇怒リテ朝參ヲ停  
 ム、實朝之ヲ救ヒテ解クヲ獲タリ、西管抄承久元年將軍實朝薨シテ嗣絶ツ、執權北  
 條義時公經ト謀リ、左大臣藤原道家ノ子賴經公經外孫ヲ以テ主帥トナス、東尋テ

右近衛大將ヲ兼ヌ、傳家三年上皇義時ヲ討ント欲ス、然ルニ公經鎌倉ト姻アル  
 ナ以テ之ヲ忌ミ、先ツ公經ヲ殺サンコトヲ議ス、群臣皆箝黙ス、内大臣藤原公繼  
德大寺流ニテ、通季ノ弟實能ノ曾孫ナリ、苦諫ス、承久上皇乃チ公經及ヒ其子實氏ヲ召シ、之ヲ校書  
 殿ニ幽ス、東公經召ニ就キ、自ラ難ニ及フヲ知り、密ニ之ヲ京師守護伊賀光季  
所ニ報ス、光季乃チ第二據リテ戰死ス、承久既ニシテ官軍敗ル、上皇延曆寺ニ幸  
 ス、公經父子モ亦將テ去ラル、東尊長屢、公經ヲ害セント欲ス、實氏營護シテ免ル  
 ヲコトヲ得タリ、承久是ヨリ先キ光季公經ノ告ヲ得テ鎌倉ニ報ス、北條泰時京  
 師ヲ陷ルニ及ヒ、公經潛ニ人ヲ遣シテコレヲ迎ヘ、深草河原ニ逢フ、泰時喜ヒ、乃  
 チ兵ヲ遣シテ其家ヲ護衛ス、東後深草帝立ツニ及ヒ、内大臣ニ任シ、明年太政大  
 臣ニ拜シ、後チ從一位ニ進ミ三宮ニ准ス、傳家公經既ニ關東ト姻ヲ連ネ、其女關  
 白藤原道家ニ適キ將軍賴經ヲ生ム、孫女一ハ後嵯峨帝ノ中宮トナリ、一ハ後深  
 草帝ノ中宮トナリ、權勢薰灼一時比ナシ、嘗テ佛堂ヲ北山ノ別莊ニ構ヘ西園寺  
 ト名ク、園地堂宇壯麗宏敞ニシテ、天下ノ壯觀タリ、增鏡、相國寺御塔供養記、因テ家號ヲ西園  
 寺ト稱ス、傳家爾後天皇皇后屢、コレニ行幸ス、續千載集、風雅集、其他近地ノ名區ニ、多ク  
 別莊ヲ營メリ、五代帝王物語  
 增鏡ニいま後の御父は、さきにも聞ゆつる右大臣實のおとよ、その父殿公の

太政大臣おほきおとよ、その當かみ夢見給へることありて、源氏の中將わらはやみまし  
 なひ給ひし、北山のほとりに、世にしらすゆゑしき御堂をたて、名をば西園寺  
 といふめり、この所は、伯三位すけなかの領なりしを、をばりの國松杖たとい  
 ふ庄にかへ給ひてけり、もとは田はたけなとおほくて、ひたふるにあな田舎かめ  
 きたりしを、さら夏にうちかへしくつして、園むなるそのにつくりなし、山のた  
 ぶすまゐる木ふかく、池の心ゆたかに、わたつ海をたよへ、峯よりおつるたきの  
 ひよきも、げに涙もよほしぬへく、心はせふかき所のさまなり、本堂は西園寺  
 ほん本そむの如來、まことに妙なる御すかた、生身もかくやといつくしうあら  
 はされ給へり、又せんみやく院は藥師、功德藏院は地藏菩薩ほさつにておはす、池  
 のほとりににめうおん妙音たう、瀧のもとには不動尊、中尊石はしのうへには五大  
 堂、成就院といふは、愛染王のさまさぬひほうとかおこなはせらる、供僧も紅  
 梅の衣袈裟けさすず數珠のいとまておなし色にそ侍るめる、又ほす院化水けす院無量光  
 院とかやとて、來迎のけしき彌陀如來廿五のほさつこくうにけん現し給へる  
 御すかたも侍るめり、北のしん禪てんにそおととはすみ給ふ、めくれる山のと  
 きは木ともい葎とふりたるに、なつかしきほと葎のわか木のさくら櫻なと櫻うゑわ  
 たすとて、おとよ葎さふき給ひける、山さくらみねにもさ櫻にもうゑおかむ見



ぬ世の春を人やしのふと、かの法成寺をのみこそ、いみしきためしに、世繼も  
いひためれと、これはなほ山のけしきさへおもしるく、都はなれて眺望をひ  
たれば、いはんかたなくめてたしトアリ是に因テ見レハ、北山ノ莊ハ初メ神  
祇伯仲資王本書すけなカトアレト、今ノ所領タリシヲ、公經尾張ノ所領ト交  
易セシナリ、日本紀略ニ奉葬花山法皇於紙屋川上法音寺北トアリ、資仲王五  
世ノ祖清仁親王ハ法皇ノ愛子ナリ、サレハ此邊ハモト法皇ノ御領ナリシヲ、  
清仁ニ讓リテ、其子孫ニ傳ヘシモノカ、拾芥抄ニ西園寺衣笠岡良、太政大臣公  
經家、號北山殿トアリ、山城名勝志ニハ土人云、西園寺地今鹿苑寺也、寺今遷京  
極小山口、本尊彌陀并地藏像等在于今、西園寺殿第、大北山村北鹿苑寺東、築地  
跡在于今トアリ、以テ別莊ノ境域宏大ヲ想像スヘシ、

初メ公季ノ後ヲ閑院ト號ス、通季乗ル所ノ車輶繪ヲ畫ク、子孫之ヲ傳ヘ閑院ノ  
嫡宗ニアラサレハ用井ルヲ得ス、閑院ノ嫡宗ハ、三條氏ニシテ通季ノ兄實行ノ流ナリ、○尊卑分脈 公經承ケテ之  
ニ乗ル、抄、時人呼テ輶繪大將トイフ、承久 公經義時ト東西相應シテ唇齒ヲ爲  
ス、義時常ニ曰ク、我カ子孫慎テ西園寺家ニ背クナカレト、是ニ因テ公經ノ子孫、  
鎌倉ノ世ヲ終ルマテ貴盛ヲ極メタリ、太平 子實氏土御門順德後堀河四條後嵯  
峨後深草ノ六朝ニ仕ヘ、累ニ清要ヲ歷テ、從一位太政大臣ニ至リ、諸家 兩朝ノ帝

戚ニシテ世ニ尊重セラレ、其子公基公相並ヒテ左右近衛大將トナル、平重盛以  
後未タ有ラサル所ナリ、五代帝 實氏嘗テ伊豫宇和郡ヲ獲ント欲シテ、之ヲ執權  
泰時ニ請フ、橋公業哀訴シテ曰ク、我カ先祖遠保勅ヲ奉シ藤原純友ヲ討テ、始メ  
テ宇和ニ居ル、子孫罪ナシ、其邑ヲ奪フヘカラスト、泰時コレヲ患フ、實氏重ネテ  
書ヲ遺リテ曰ク、吾老タリ、求ムル所獲ス、甚タ之ヲ羞ツ、今將ニ鎌倉ニ往テ面言  
セントスト、泰時曰ムヲ得スコレヲ許ス、東 後薙髮シテ京極常盤井ノ第二居ル、  
世ニ常盤井入道ト稱ス、尊卑 子公相ハ從一位太政大臣、諸家 女嬉子ハ後嵯峨  
帝ノ中宮トナリ、後深草龜山二帝ヲ生ミ、大宮院ト號シ、公子ハ後深草帝ノ中宮  
トナリ、東二條院ト號ス、女院小傳、實 公相ノ子實兼從一位太政大臣トナリ、後西  
園寺太政大臣ト號ス、諸家 子公衡權大納言トナル、諸家 正應三年淺原爲賴禁闕  
ヲ犯ス、事龜山上皇ニ連ル、公衡後深草上皇ニ奏シテ、龜山上皇ヲ六波羅ニ遷サ  
ント請フ、聽カス、因テ伏見帝ノ詔ヲ矯メテ、答テ上皇ニ歸ス、是ニ於テ上皇誓書  
ヲ執權時宗ニ賜ヒ、事解クヲ得タリ、諸家 公衡後々左大臣ニ進ミ、竹中左大臣マダ  
竹林院ト號ス、子實衡正二位内大臣トナリ、嘉曆元年薨ス、今出川内大臣ト號ス、  
諸家 實衡ノ子公宗正二位權大納言トナル、元弘元年後醍醐帝鎌倉ヲ滅サント  
シテ事露ハレ、潜ニ笠置寺ニ幸ス、賊後伏見上皇及ヒ皇太子ヲ六波羅ニ奉徙ス、

公宗等コレニ從フ、太平記高時使ヲ遣シテ公宗ト議シ、皇太子ヲ奉シテ帝ヲ京師ニ稱ス、之ヲ光嚴院ト爲ス、高時高時誅ニ伏ス、公宗内自ヲ安セス、常ニ北條氏ヲ復セントシ、高時ノ弟泰家ヲ舍匿シ、日夜共ニ亂ヲ作サムコトヲ圖ル、建武二年竊ニ弑逆ヲ圖リ、浴室ヲ北山ノ第二作り、牀下ニ多ク刃ヲ植エ、機ヲ設ケテ陷ラシム、既ニ成リ、臨幸ヲ請フ、帝之ヲ許シ、車駕已ニ發シ、神泉苑ヲ過ク、公宗ノ弟公重馳セテ變ヲ上ル、駕即チ返ル、當時ノ皇居ハ冷泉宮小路殿ニテ、今ノ寺町、夷川下ル順路ニア左近衛中將源定平及ヒ結城親光名和長年ニ勅シテ、急ニ公宗ヲ收メ、定平ノ第二幽シ、家臣三善文衡ヲ拷問シテ、其實ヲ得タリ、帝朝紳ヲ戮スルヲ欲セス、公宗ヲ出雲ニ流ス、發スルニ臨ミ、長年等遂ニ之ヲ誅ス、太平記遺子實俊北朝ニ仕ヘテ右大臣トナリ、子孫相續テ世々清華ニ列ス、諸家傳、知初メ關白忠通ノ流、代々攝關ヲ世襲シテ、皇家ノ外戚タリシカ、保平以後源平互ニ政權ヲ執リテ、朝制紊亂シ、攝關ノ家五家ニ分レ、而シテ閑院ノ流大ニ興リ、殊ニ西園寺氏顯要ヲ占メ、后妃概チ其門ニ出テ勢權赫灼、攝關權ヲ奪ハル、初メ藤原氏ノ太政ヲ執ル、其外戚タルニ因リシカ、西園寺ニ至リテハ、初メ源氏ニ通シ、後ハ北條氏ニ依リ、霸府ノ權力ヲ藉リテ、以テ朝廷ヲ鉗制セリ、亦以テ世變ヲ見ルヘシ、西園寺氏ノ盛衰ハ一ニ北條氏ノ存亡ニヨルヲ以テ、唯北條氏アルヲ知リテ、朝廷アルヲ

知ラス、建武中興ノ隆運ニ際シ、反テ國賊ノ遺孽ト相結ヒ、以テ大逆ヲ行ハントスルニ至ル甚シト謂フヘシ、其謀首誅ニ止マリテ、其宗仍ホ華胄ニ列スルハ、特恩ト謂フヘキナリ、史ヲ讀ムモノ、關東ノ朝廷ヲ制スルヲ知リテ、而シテ朝廷ノ中其黨援アリテ、隱ニ其事ヲ爲スヲ知ラス、因テ特ニ錄シテ之ヲ論ス、

西園寺氏略系

通季 中納言

公通 大納言

實宗 内大臣

公經 太政大臣

實氏 太政大臣  
母中納言能保女

實雄 左大臣

綸子 攝政道家妻、即將軍賴經母

成子 後深草帝宮女

公守 太政大臣

信子 龜山帝皇后、後宇多帝生母  
號京極院

禊子 龜山帝宮女

季子 伏見帝宮女、生花園帝、  
號顯親門院

公基 右大臣

公相 太政大臣

嬉子 後嵯峨帝中宮、後深草龜山二帝生母、  
號大宮院

公子 後深草帝中宮、  
號東二條院

實兼 太政大臣

相子 後深草帝宮女、准三宮

瑄子 龜山帝中宮、  
號今出川院

公衡 左大臣

瑛子 龜山帝宮女、准三宮、  
號昭訓門院

鍾子 伏見帝中宮、  
號永福門院

禧子 後醍醐帝中宮、  
號後京極院

實衡 內大臣

寧子 後伏見帝女御、光嚴光明二帝生母、  
准三宮號廣義門院

公宗 權大納言、  
建武二年被誅

公重 內大臣

實俊 仕北朝、右大臣、  
公永 權大納言

實永 右大臣

元弘ノ亂

北條氏世々意ヲ民政ニ用井、且ツ朝臣西園寺氏ト結托シテ朝廷ヲ制シ、承久以  
來陪臣ヲ以テ國命ヲ執ルコト凡ソ一百年、九世高時ニ至リ、後醍醐天皇九五ノ  
位ニ在リ、高時昏闇事ヲ視ス、權臣恣ニ威福ヲ作シテ忌憚スル所ナク、益々朝廷ヲ  
抑制ス、辨辨、太平記天皇即位ノ初、除目ヲ行ヒ、關白藤原道平ヲ罷メ、一條内經ヲ以テ  
之ニ代フ、高時之ヲ欲セス、朝臣多ク北條氏ヲ畏レ、關白拜賀ノ禮ニ赴カス、爲メ

ニ其儀ヲ修ムルコト能ハス、鹿王院所 兼御宸翰 天皇英邁ニシテ北條氏ノ跋扈ヲ怒リ之ヲ討セシメコトヲ圖リ、記録所ヲ置キ、親ヲ訴訟ヲ聽斷シ、夙夜孜々トシテ治ヲ圖ル、太平記、神皇正統記 正中元年中納言藤原資朝、藏人頭藤原俊基ヲ延キテ謀主ト爲ス、二人密ニ輕裝シテ修驗者ト爲リ、大和河内及ヒ東國西國ニ遊歴シ、風俗地理ヲ觀察シ、武士ニ結フ、增鏡、異本 太平記 美濃人士岐賴員、多治見國長等徵ニ應ス、事露ハレ、九月賴員國長共ニ京師ニ殺サル、高時乃々資朝俊基ヲ鎌倉ニ遣シ、將ニ議シテ天皇ヲ廢セントス、增鏡、異本 太平記 天皇之ヲ聞キ、中納言藤原宣房ヲ鎌倉ニ遣シ、誓詰ヲ賜ヒ、事釋クルヲ得タリ、太平記 高時尋テ俊基ヲ釋シ、資朝ヲ佐渡ニ流ス、任、增鏡、補 此時鎌倉ノ政益、亂レ、人心離畔ス、天皇之ニ乘シテ事ヲ興サント欲シ、其志益切ナリ、太平記 嘉曆元年三月皇太子邦良薨ス、增鏡 七月高時奏シテ後伏見天皇ノ皇子量仁親王ヲ立テ、太子ト爲サシム、皇胤 紹運 錄 天皇諸皇子ヲ擇ヒテ之ヲ立テント欲ス、高時固ク兩宗迭立ノ議ヲ執リ、遂ニ量仁ヲ以テ皇太子ト爲ス、天皇乃々使ヲ鎌倉ニ遣ハシ、諭シテ曰ク、後深草ノ子孫世々長講堂ノ領ヲ襲キ、又大統ヲ繼ク、朕禪位ノ後、封邑ノ供給ニ充ツル者ナシ、宜シク長講堂ノ領ヲ以テ朕ニ屬スヘシト、高時竟ニ詔ヲ奉セス、天皇益憤恚ス、梅松 論 二年三月中宮安産ノ祈ト稱シテ、僧圓觀文觀等ヲ召シ、高時ヲ咒詛セシム、增鏡、異本 太平記 三年十二月大塔宮尊雲法親王

ヲ天台座主ト爲シ、天台座主 主記 僧徒ノ力ヲ藉ラント欲ス、元德二年春、延曆寺及南都ニ幸シテ益、衆徒ノ心ヲ收攬ス、尊雲密謀ヲ贊ケ、專ラ武技ヲ講ス、四月大判事中原章房ヲ召シ事ヲ議ス、章房固ク之ヲ諫ム、天皇謀ノ泄レシコトヲ恐レ、瀬尾某ヲシテ暗殺セシム、五月僧圓觀文觀等ヲ禁内ニ召シテ、高時ヲ咒詛セシム、東伐ノ議益急ナリ、事稍漏ル、北條氏文觀圓觀及ヒ二條爲明等ヲ鎌倉ニ拘送シ、元弘元年、俊基資朝ヲ殺シ、文觀等ヲ流ス、適、後伏見上皇使ヲ鎌倉ニ遣シ、朝廷ノ謀ヲ告ク、高時乃々意ヲ決シ、七月二階堂貞藤等ヲシテ、兵ヲ率井京師ニ入ラシム、太平記、異本 八月尊雲法親王急ヲ奏シテ曰ク、東兵ノ京師ニ入ル者、將ニ主上ヲ遠島ニ徙シ、臣等ヲ執ヘテ殺サントス、宜シク速ニ南都ニ幸スヘシト、天皇大ニ驚キ、急ニ侍臣大納言藤原師賢、中納言藤原藤房ヲ召シテ謀ヲ諮フ、藤房等天皇ヲ奉シ、夜ニ乘シテ宮中ヲ遁レ、奈良ニ走り、遂ニ笠置ノ僧房ニ入ル、增鏡、太平記 師賢御衣ヲ著ケ御輿ニ乘リ、天皇ト稱シテ叡山ニ登ル、增鏡、光明寺 嚴書 殘篇 六波羅探題時益等之ヲ聞キ、兵ヲ率井テ叡山ニ向フ、尊雲法親王妙法院尊澄法親王、後宗 氏 曰 山徒ヲ督シ、六波羅ノ兵ヲ唐崎ニ破リ、勢大ニ振フ、既ニシテ僧徒師賢ヲ見テ、其欺カレシヲ恚リ、相率井テ離散ス、尊雲法親王、十津川ニ走り、尊澄法親王師賢笠置ニ入ル、太平記、增鏡 天皇笠置ニ在リ、四方勤王ノ師ヲ召ス、近畿ノ豪族等多ク徵ニ應ス、中

納言藤原藤房ヲ遣ハシ、河内人楠木正成ヲ召見シ、委スルニ興復ヲ以テス、正成乃チ赤坂ニ城キ應援ヲ爲ス、平記、太九月時益等兵ヲ率井テ、平等院ニ次ス、東軍相踵テ至ル、兵凡ソ十萬、四面笠置ヲ攻ム、城兵險ニ據リ死守ス、東軍拔クコト能ハス、相持スル三旬ニ及フ、是月晦日大風雨、備中人陶山義高、小見山某、部兵五十餘人ヲ以テ險ヲ攀テ躡エ、城ニ入りテ火ヲ舉ク、東軍之ニ乗シ急ニ攻ム、城遂ニ陥リ、天皇徒步暗ニ乘シテ遁ル、藤原藤房源具行等僅ニ從フ、晝伏シ夜行キ、有玉山ニ至ル、有玉山ハ、級喜郡井手村ノ東ニアリ、有玉谷又ハ有玉芝、幽僻ナル山中ニテ、笠置ヨリ三里餘アリ、艱苦萬狀、困憊行ク能ハス、帝歌ヲ作りテ曰ク、さして行笠置の山をいてしよりあめか下にはかくれかもしなし藤房流涕之ニ和ス、賊將大佛貞直兵ヲ率井テ追搜ス、遂ニ天皇及藤房等ヲ以テ、南都ニ置ク、十月時益等之ヲ平等院ニ遷シ、尋テ六波羅南方ニ幽ス、藤房具行等僅ニ左右ニ待スルヲ得タリ、時ニ御製アリ、曰ク、またなれぬ板屋の軒のむら時雨音をきくたにぬるる袖かな、皇子尊良尊澄以下捕ヘラル、二年三月高時、天皇ヲ隱岐ニ遷ス、七日天皇六波羅ヲ發ス、綱代車ニ乘リ、左近衛中將藤原行房、左近衛少將源忠顯等數人僅ニ之ニ扈從ス、賊將千葉貞胤等兵ヲ以テ衛護ス、七條ヲ西ヘ東洞院ヲ下リ、鳥羽ヲ經テ難波ニ抵リ、播作二州ヲ越エ、出雲國ヨリ舟ニ御シ、遂ニ隱岐ニ至リ、國分寺ヲ以テ行宮ト爲ス、之ヲ元弘ノ亂ト

云フ、太平記

建武中興

笠置既ニ陥リ、天皇後醍醐西狩シ、官軍大ニ潰エ、天下復タ勤王ノ師無シ、平記、太平元弘二年六月護良親王吉野ニ起リ、檄ヲ諸道ニ傳フ、此ニ於テ勤王ノ師相尋テ起ル、三年二月北條高時二階堂貞藤等ヲ遣ハシ、赤坂吉野二城ヲ陥レ、更ニ兵ヲ合シ千破劔ヲ攻ム、楠木正成嶮ニ憑リ善ク拒ク、賊拔クコト能ハス、赤松則村荅編繩ヲ發シ、進テ攝津ニ入ル、閏二月廿四日帝潛ニ隱岐ヲ出テ伯耆ニ幸ス、名和長年族ヲ擧ケ、奉迎シテ船上山ニ據ル、賊軍來リ攻ム、撃テ之ヲ破ル、詔ヲ諸國ニ下シ高時ヲ討セシム、勤王ノ兵大ニ起ル、則村東兵ヲ破リ、勢ニ乘シテ久我繩手西七條ヨリ京師ニ入り、火ヲ大宮猪隈堀川油小路ニ放ツ、北條氏ノ族大ニ驚キ、新帝上皇ヲ六波羅北方ニ遷シ、諸將ヲ遣シ撃テ之ヲ敗ル、則村退テ山崎ニ陣シ、中院定平僧良忠等ト七千騎ヲ二隊ニ分テ、鳥羽竹田及ヒ河島桂里ヨリ、進テ六波羅ヲ攻ム、又タ利アラヌ、三月詔シテ千種忠顯ヲシテ則村ヲ援ケシム、進ミテ峯堂ニ屯ス、軍三十萬ト號ス、峯堂ハ當時ノ巨利ニシテ、業室ニ在リ、今遺址存ス、四月八日忠顯火ヲ京師ニ放テ、六波羅兵ト大ニ内野内野ハ大内裏ノ舊址ニテ、當時廣漠タル地ナリ、且峰堂ヨナリ、ニ戦ヒ、敗レテ八幡ニ走ル、時ニ名越高家足利高氏鎌倉ヨリ至リ、六波羅ヲ

援ク、則村戰テ高家ヲ久我噉ニ斬ル、官軍復々振フ、太平記五月三日軍制ヲ忠顯ニ降シ、規律ヲ嚴ニシ暴掠ヲ禁シ、輯睦ヲ勗メ、私怨ヲ戒シメ、降伏ヲ赦シ、賞格ヲ定ム、且ツ曰ク、止、叛亂ヲ伐テ、平民ヲ擾ラス、庶幾ハ天地神祇ノ祐ヲ得、祖宗社稷ノ靈ニ頼リテ、以テ克捷ノ功ヲ得ント、光明寺足利高氏密ニ歸順シ、則村等ニ俱ニ軍一萬餘騎ヲ合シ、五條橋七條河原ヨリ六波羅ヲ攻メ、獨リ東面ノ走路ヲ開ク、六波羅支ヘス、七日北條時益北條仲時遂ニ新主光嚴院及二上皇伏見花園ヲ奉シテ東走ス、時益ハ矢ニ中リテ死シ、仲時ハ番場ニ自殺ス、是時新田義貞護良親王ノ令旨ヲ奉シ、兵ヲ上野ニ擧ケ、鎌倉ヲ攻メテ之ヲ陷ル、北條高時以下悉ク誅ニ伏ス、五月車駕船上山ヲ發シ、兵庫ニ至ル、會、鎌倉ノ捷報至リ、衆咸ヲ驩呼ス、千破劍ノ攻兵敗レ走ル、楠木正成親ヲ兵ヲ率井兵庫ニ迎謁ス、乃チ詔シテ前驅シテ京師ニ入ラシム、車駕兵庫ヲ發シ、六月四日京師ニ入り、東寺ニ次シ、五日二條富小路殿ニ還幸シ、行幸返關ノ禮ヲ用井、正慶ノ號ヲ去リ、悉ク新主署スル所ノ官爵ヲ削リ、廷臣ノ流竄ニ遇ヘル者ヲ召還シ、左大臣藤原道平右大臣藤原經忠ニ詔シテ、庶政ヲ參輔ス、太平記、公卿補任、增補錄帝已ニ北條氏ヲ滅シ、大ニ其志ヲ行ハント欲ス、親カラ政ヲ聽キ、釐革スル所多シ、勅ス今ノ例ハ古ノ新義ナリ、朕ノ新義ハ以テ未來ノ例トナスヘシト、梅松論特ニ關白ヲ廢シ、大事ハ記錄所ニ諮議シ、更ニ雜

訴決斷所ヲ置キ庶政ヲ裁決シ、諸道ノ事務ヲ總ヘシメ、武者所ヲ置キ武士ヲ管ス、奥州ニ義良親王ヲ遣シ、北畠顯家ヲシテ之ヲ補佐セシメ、鎌倉ニ成良親王ヲ遣シ、足利直義ヲシテ之ヲ補佐セシム、神皇正統記、太平記、梅松論是時ニ當リ政權朝廷ニ歸スト雖モ、武臣ノ功最モ大ナルヲ以テ、記錄所以下武臣ノ政務ニ關與スルモノ多ク、諸國ノ如キハ北條氏ノ舊ニ仍テ守護地頭ヲ置キ、廷臣ヲ任スル者ヲ國司ト稱ス、太平記、建武年間記武士等朝廷ヲ輕シ、功ヲ論シ賞ヲ爭フ、神皇正統記藤原實世ヲシテ、將士ノ賞ヲ議セシム、將士爭テ功狀ヲ奉リ、集ル者數萬人、詐冒多クシテ甄別スヘカラス、更ニ藤原藤房ニ勅シテ其事ヲ掌ラシム、藤房眞偽ヲ甄別シ、擬授略備ル而シテ、内旨賞ヲ行ヒ、尤モ猥濫ナリ、藤房病ト稱シテ事ヲ視ス、有功ノ將士手ヲ虐クシ、主者依違スルノミ、或ハ一邑ヲ以テ數人ニ授ケ、相爭フニ至ル、太平記記錄所決斷所ノ設アリト雖モ、内奏ヲ用井、屢朝旨ヲ變改シ、功臣赤松則村ノ如キ、故ナク其舊領ヲ沒收セラレ、賞罰常ナク、衆怨交起ル、太平記、梅松論四年正月建武ト改元ス、建武ハ後漢光武ノ年號ナリ、蓋シ帝中興ノ功業ヲ以テ、光武ノ撥亂反正ニ比スルナリ、細々要記正月大内ヲ營セントシ、安藝周防ノ租賦ヲ以テ其經費ニ充テ、諸國地頭ノ收入二十分一ヲ徵ス、治承以後大内久ク廢シ、皇居狹少ナルヲ以テ、是ニ及ヒ宮室ヲ造營セントス、用度足ラス、初メテ楮幣ヲ用井、尋テ乾坤

通寶ノ新錢ヲ鑄ル、楮幣ヲ用井ル此ヲ始メトス、時ニ兵革漸ク治リ、創夷未タ癒  
 エス、帝民苦ヲ察セス、此大工事ヲ興ス、識者皆天下ノ再ヒ亂レシコトヲ恐ル、平  
記、建武年同記、巳ニシテ怨讒四ニ起リ、匿名ノ書ヲ作りテ、時政ヲ誹議スル者アルニ至  
梅松ル、藤原藤房數、帝ヲ諫メ、遂ニ官ヲ棄テ、隱遁ス、太平帝深ク足利高氏ノ功  
 ヲ賞シ、偏諱ヲ賜ヒ、官位衆ニ超エ恩賞甚タ盛ンナリ、尊氏族望素ヨリ高ク、弟直  
 義鎌倉ヲ守リ、勢威朝野ニ振フ、太平護良親王素ヨリ尊氏ノ奸ヲ察シ、之ヲ除  
 カント圖リ、旆ヲ南都ニ駐メテ入朝セス、帝慰諭シテ之ヲ召ス、而シテ軋轢益甚  
 シ、帝亦稍、尊氏ヲ忌ム、尊氏因テ帝ノ寵妃藤原廉子ニ結ヒ、親王ヲ讒ス、帝察セス、  
 建武元年十一月十五日囚ヘテ之ヲ鎌倉ニ幽ス、太平要記、梅松、時ニ喪亂新ニ平キ、  
 人心未タ定マラス、北條氏ノ餘黨所在ニ蜂起ス、二年七月北條高時ノ子時行兵  
 ナ信濃ニ起シ、東國大ニ亂ル、足利直義之ヲ伐テ克タス、報京師ニ達ス、太平要記、細  
 尊氏曾テ叛志アリ、此ニ於テ自ラ之ヲ討セント請フ、之ヲ許ス、又征夷將軍ヲ以  
 テ東國ヲ管領セント請フ、允サス、尊氏怒リ辭セスシテ京師ヲ發シ、鎌倉ニ赴キ  
 時行ノ亂ヲ平ク、是時ニ當リ天下ノ武人朝廷ヲ怨望シ、亂ヲ思フ者多シ、皆爭ヒ  
 テ尊氏ニ從フ、神皇正統記、太平朝廷乃テ使ヲ遣ハシテ尊氏ヲ召還ス、尊氏詔ヲ奉セス、  
梅松遂ニ叛シテ府ヲ鎌倉ノ舊址ニ開キ、自ラ征夷大將軍ト稱ス、詔シテ之  
層之

ヲ討ス、官軍敗績、尊氏長驅京師ヲ陷ル、是ニ於テ建武中興ノ業再ヒ壞レ、天下大  
 ニ亂ル、太平記、梅松

左ニ掲クルハ建武ノ落首ナリ當時ノ情況、寫得テ眼前ニ迫ルモノアリ、蓋  
 一篇ノ戯文ト雖モ、千言萬語ノ記事ニ勝レルモノアルヲ以テ之ヲ抄録セ  
 リ、

此頃都にはやる物、夜討盜賊謀論、召人早馬、虚騷動、生頸還俗自由出家、俄大  
 名迷者、安堵恩賞、虚軍本領はなる、一訟訴人、文書入たる、細葛、追從讒人、禪律僧、  
 下克上する成出者、器用の堪否沙汰もなく、もる、一人なき決斷所、着つけぬ冠  
 上の衣、持もならはぬ笏持て、内裏ましはり珍しや、賢者顔なる傳奏は、我も我  
 もと見ゆれとも、巧なりける詐は、氣色めきたる京侍、たそがれ時になりたれ  
 は、うかれてありく色好、いくそはくそや、數不知、内裏をかみと名付けたる、人  
 の妻、鞆のうかれめは、よその見るめも心知あし、尾羽をれゆかむぬせ小鷹、手  
 ごとに誰もすゑたれと、鳥とることば更になし、錯作のおほかたな、太刀より  
 大にこしらへて、前さかりにそ指ほらす、はさら扇の五骨、ひろこしやせ馬薄  
 小袖、日錢の質の古具足、關東武士のかこ出仕、下衆上臈のきはもなく、大口に  
 きる美精巧、鍔直垂猶すてす、弓も引きぬす犬追物、落馬矢數にまさりたり、誰

を師匠となければと、遍くはやる小笠懸事新らしき風情なく、京鎌倉をこきまさせて、一座そろはぬひせ連歌、在々所々の歌連歌、點者にならぬ人そなき譜代非成の差別なく、自由狼藉世界なり、犬田樂は關東のほろふる物と云ひながら、田樂はなほはやるなり、茶香十種の寄合せ、鎌倉釣に有鹿と、都はいとよ倍増ぬ、町ことに立箒屋は、荒涼五間板三枚、幕引きまはず役所柄、其數しらす満々たり、諸人の敷地定らず、半作の家是多し、去年火災の空地共、福福にこそなりにけれ、適のこゝ家々は點定せられて置去ぬ、非職の兵仗はやりつゝ、路次の禮儀辻話し、花山桃林さひしくて、牛馬華浴に遍満す、四夷をしつめし鎌倉の、右大將の掟より、只品有りし武士もみななめんたうに、今はなる、朝に牛馬を飼ながら、夕に變ある功臣は、左右におよはぬ事そかし、させる忠孝なけれとも、過分の昇進するもあり、定めて損あるらんと、仰て信をとるはかり、天下一統めつらしや、御代に生てよさまゝの事を見聞くと不思議とも、京童の口すさみ、十分の一ともらすなり、

### 京師戰亂

建武二年十一月、足利尊氏新田義貞ト相惡シ、各上書シテ其罪狀ヲ陳ス、朝議之ニ惑フ、已ニシテ尊氏鎌倉ニ據ル、足利氏ノ黨京畿ニ在ル者ハ鎌倉ニ走リ、新田

氏ノ族關東ニ在ル者ハ京師ニ還リ、道路旁午織ルカ如シ、此ニ於テ朝廷尊良親王ヲ以テ東國ノ管領ト爲シ、義貞ニ節刀ヲ賜ヒ、尊氏ヲ討セシム、太平記尊氏素ヨリ大志アリ、常ニ時變ヲ窺ヒテ、霸業ヲ興サンコトヲ圖ル、是ニ至リ、已ムナ得スシテ官軍ニ抗スルノ狀ヲ示ス、兵勢大ニ振フ、梅松論細川定禪、赤松則村等反シ、尊氏ニ應ス、朝廷京師ノ危ヲ慮リ、義貞ヲ召還ス、太平記尊氏勢ニ乘シテ西上ス、延元元年正月十日、官軍之ヲ宇治、勢田、大渡、山崎ニ防ク、山崎先ツ敗レ、敵兵京師ニ亂入ス、義貞乃チ大渡ノ守ヲ棄テ、天皇後醍醐ヲ奉シテ叡山ニ奔リ、東坂本ヲ以テ行宮ト爲ス、尊氏進テ京師ニ入ル、會北畠顯家、陸奥ノ兵ヲ率井入援ス、官軍稍振フ、廿七日、義貞大軍ヲ合シ、尊氏ヲ破リ、京師ヲ復ス、尊氏西ニ奔ル、太平記梅松論、四月、天皇華山院ニ還幸シ、功ヲ論シ、賞ヲ行ヒ、延元ト改元ス、新田義貞ヲ中國十六州ノ管領ト爲シ、以テ尊氏ヲ討セシム、義貞京師ヲ發シ、赤松則村ヲ白旗城ニ圍ム、未タ拔クアタハス、尊氏西奔スルヤ、赤松則村ノ策ヲ用井、使テ遣ハシ、持明院ノ院宣ヲ請フ、此ニ及ヒ、錦旗ヲ樹テ、大兵ヲ率井東上ス、五月、楠木正成京師ヲ發シ、義貞ト俱ニ尊氏ノ軍ヲ兵庫ニ邀ヘ、廿五日、大ニ湊川ニ戰ヒ、之ニ死ス、義貞敗レテ京師ニ還ル、天皇遽ニ叡山ニ幸ス、尊氏京師ニ入り、東寺ニ陣ス、光嚴院之ニ幸シ、日野資名、三條實繼等來會ス、太平記六月、尊氏西坂ヲ攻ム、千種忠顯等之ニ死ス、六月



卅日官軍期ヲ刻シテ四面京師ヲ攻ム、四條隆資南都ノ兵ヲ以テ京ニ入り、期ニ先タナテ東寺ニ戰ヒ、敗レ走ル、義貞西坂ヲ下リ、名和長年等ト俱ニ京ニ入り、大ニ六條大宮ニ戰ヒ、遂ニ進テ東寺ニ逼ル、賊軍大ニ集ル、官軍戰敗レ、長年一條大宮ニ戰死シ、義貞僅ニ身ヲ以テ免ル、太平記八月十五日、尊氏後伏見帝ノ皇子豐仁親王ヲ立テ、帝ト稱ス、光明院藤原良基押小路烏丸ノ邸ニ移シ、尙ホ建武ノ號ヲ用フ、皇年代略記、公卿補任、太平記八月兩軍賀茂糺河原ニ戰フ、官軍利アラズ、是ヨリ連日戰爭絶エス、梅松論尊氏兵ヲ分テ官軍ノ糧道ヲ梗ク、官軍大ニ窘ム、屢出テ、戰ヘトモ利アラズ、尊氏僞テ降り還幸ヲ請フ、天皇窮ニ之ヲ許ス、義貞等其僞ヲ知り固ク諫ム、天皇聽カス、慰藉シ皇太子ヲ奉シ北國ヲ經略セシム、十月十日天皇華山院ニ還御ス、尊氏兵ヲ置キテ監衛シ、公卿以下ノ官職ヲ奪ヒ、將士ヲ拘ス、十一月尊氏逼リテ神器ヲ新主ニ授ケンコトヲ請フ、天皇僞器ヲ造リテ之ニ與フ、太平記十二月廿一日夜ニ乘シ天皇神器ヲ擁シテ、潜ニ華山院ヲ出テ吉野ニ幸シ、楠木正行等兵ヲ率テ來リ衛ル、以テ行宮ト爲ス、世ニ之ヲ南朝ト稱シ、京師ノ皇居ヲ北朝ト稱ス、保曆間記、元弘日記、吉野拾遺、取延元三年、北朝曆北朝尊氏ヲ征夷大將軍ニ任ス、正平五年、北朝觀足利直義、高師直師泰ノ驕僭ヲ惡ミ窮ニ之ヲ除カンコトヲ謀ル、師直之ヲ知り、兵ヲ率井テ其三條邸ヲ攻ム、直義遁レテ尊氏ノ館ニ入ル、師直之

ヲ圍ミ、直義ヲ獲ントス、尊氏乃チ直義ヲ罷メ、子義詮ヲシテ政ヲ聽カシム、時ニ直義ノ義子直冬備後ニ在リ、師直又之ヲ殺サントス、是ニ於テ直冬肥後ニ走リ、兵ヲ鎮西ニ擧ク、尊氏義詮ヲシテ京師ヲ守ラシメ、自ラ住テ之ヲ討ツ、發スルニ臨ミ直義ヲ殺サント欲ス、直義走テ南朝ニ降ル、其黨所在ニ蜂起ス、太平記六年、北朝觀尊氏之ヲ聞キ、軍ヲ分チ義詮師直等ト二條四條東寺ノ三面ヨリ進テ京師ニ入り、直義ノ將桃井直常ヲ破テ之ヲ走ラス、然レトモ將士多ク直義ニ降ル、尊氏義詮復西ニ走ル、尋テ直義ト和シテ京師ニ還ル、直義師直兄弟ヲ途ニ殺シ、義詮ニ代テ復タ政權ヲ執ル、尋テ尊氏ニ叛キ走リテ鎌倉ニ據ル、太平記尊氏往テ之ヲ伐タント欲ス、京師空虚ニシテ爲ニ襲ハレシテ懼レ、北朝崇光院ヲ廢シ、降ヲ請ヒ正平ノ年號ヲ奉ス、天皇後村陽ハリ之ヲ許シ、京師ヲ恢復セント欲シ、詔書ヲ賜ヒ直義ヲ討タシム、尊氏義詮ヲシテ京師ヲ守ラシメ、自ラ兵ヲ率井テ直義ヲ鎌倉ニ破リ、尋テ之ヲ燒殺ス、太平記七年閏二月、北朝文天皇男山ニ幸ス、百餘戎衣ス、中院顯能、千種顯經、和田、楠木等諸軍ヲ率井、鳥羽、桂川、櫃越、ノ三方ヨリ掩撃シテ、遂ニ京師ヲ復ス、義詮近江ニ奔ル、三月義詮兵ヲ集メテ東山將軍塚ニ陣シ、進テ京師ニ入り、東寺ニ據ル、官軍引退ク、義詮兵ヲ進メ男山ヲ攻ム、五月十一日、

天皇甲ヲ擐シ馬ニ御シ、圍ヲ突テ南奈良ニ幸ス、藤原隆資等三百餘人之ニ死ス、八月義詮光嚴院ノ皇子彌仁親王ヲ奉シ、帝ヲ京師ニ稱ス、是光嚴院八年、北朝文山名時氏官軍ニ降り、楠木正儀、和田正武等ト兵ヲ合セ、嵯峨仁和寺、西七條ヨリ進ミ、四條河原、神樂岡等ニ戰フ、義詮大ニ敗レ、東坂本ニ據ル、已ニシテ義詮ノ軍大ニ振ヒ、進テ京師ニ逼ル、官軍諸將皆引退キ、義詮復京師ニ入り、尊氏モ亦鎌倉ヨリ還ル、九年、北朝文足利直冬、山名時氏等詔ヲ奉シ、山陰道ノ兵ヲ發シテ京師ヲ攻ム、足利高經、桃井直常モ亦事ヲ以テ尊氏ヲ恨ミ、北陸道ノ兵ヲ率井將ニ京師ニ入ラントス、尊氏新主ヲ奉シテ近江ニ走ル、十年二月、北朝文直冬京師ニ入り、大内裡ノ舊趾ニ陣シ、自ラ大極殿額門ノ趾ニ居ル、時人之ヲ惡ム、高經直常モ亦來リ會シ、尋テ陣ヲ東寺實相寺ニ移ス、時ニ義詮播磨班鳩驛ニ在リ、尊氏延曆寺ニ據リ、日ヲ刻シテ東西京師ヲ挾撃セントス、直冬高經等東寺ニ據リ、時氏及ヒ楠木和田等ノ諸將ヲ鳥羽、赤井、大渡、八幡ニ遣シテ之ヲ拒カシム、三月大ニ七條ニ戰ヒ、官軍敗走ス、尊氏父子復京師ニ入ル、將士掠略暴戾ヲ極ム、太平記、園大補任、十三年四月、北朝文尊氏薨ス、義詮征夷大將軍ニ任シ、細川清氏執事タリ、十六年、北朝文佐々木高氏、細川清氏ト讐アリ、義詮素ト高氏ヲ寵ス、乃テ清氏ヲ斥ク、清氏南朝ニ降り、十二月八日楠木正儀和田正武等ト共ニ大舉シテ京師ヲ攻

メ、賊將細川賴春ヲ斬ル、義詮新主ヲ奉シ近江ニ走ル、官軍京師ヲ取り、義詮ノ第ヲ焚ク、尋テ官軍兵ヲ旋ス、義詮京師ヲ復ス、是ヨリ南朝復タ振ハス、義詮遂ニ細川清氏ヲ讚岐ニ殺シ、大内、山名、仁木、石塔、上杉等ノ諸將ヲ降ス、廿二年、北朝文義詮薨ス、太平記子義滿職ヲ嗣ク、尙幼ナルヲ以テ細川賴之執事ト爲リ、心ヲ竭シテ輔導シ、將士ヲ戒飭シ、恩威並ニ行ハル、是ニ於テ京師始テ安シ、花營三代記、細川賴之記義滿已ニ長シ、四方ノ官軍益振ハス、賴之之ヲ機トシ、義滿ニ勸メ和ヲ議シ、南北合シテ海内一統ニ歸セリ、正統記

南北朝合併

南北朝ノ岐ル、ヤ、楠氏足利氏ノ關係尤モ多シ、故ニ其合スルヤ、亦兩氏ノ盛衰ヲ説カサルヲ得ス、正平廿三年、北朝文十二月義詮病テ薨シ、嗣子義滿幼ナリ、細川賴之遺命ヲ奉シテ之ヲ輔ケ、先ツ制法五條ヲ定メ、賂賄ヲ禁シ、儉約ヲ勸メ、上下ノ分ヲ正ス、花營三代記、應武翌年二月、又内法三條ヲ義滿ノ近臣ニ頒テ、利慾ヲ戒メ、法令ヲ犯スヲ禁シ、主君ニ佞媚スルヲ止ム、又關東評定衆、六波羅評定衆ノ例ニ倣ヒ、四職ヲ置キテ、事皆會議ニ決ス、山名時氏、赤松則祐、一色詮範、六角崇永始テ其職ニ就ク、類之記、貞之ヲ行フ數年、上下緝睦、士風大ニ改ル、太平記、評町幕府ノ基礎此ニ及テ確立ス、而シテ南朝ハ正平廿三年三月後村上帝住吉ノ



謀レトモ成ラスシテ南朝ノ皇胤ハ斷絶セリ、南方紀傳、櫻雲記、茂根記、參取、

室町幕府

建武三年、足利尊氏光明帝ヲ擁立シ、幕府ヲ其第二開キ、以テ天下兵馬ノ事ヲ管  
ス、此時ノ幕府、直義邸址、室町幕府、武衛陳邸等ノ所在ハ舊蹟志ニアリ延元三年、尊氏正二位ニ叙シ、征夷大將軍ニ任  
ス、弟直義幕府ヲ總ヘ、副將軍ト稱ス、足利官位記、將軍家譜、威權赫奕、尊氏ト並ヒ稱シテ兩  
御所ト曰フ、正平中、高師直執事ト爲リ、頗ル威力アリ、直義ト權ヲ争ヒ、遂ニ直義  
ノ爲ニ殺サル、是ヨリ直義益、專恣、尊氏稍之ヲ忌ミ、遂ニ之ヲ殺ス、是後尊氏仁木  
賴章ヲ以テ執事ニ任スト、雖モ政皆己ニ出ツ、太平記、正平四年、北朝貞和五年尊氏次子基  
氏ヲ以テ鎌倉ノ管領ト爲シ、上杉憲顯、高師冬ヲシテ之カ執事タラシメ、喜連川列傳  
幕府ノ業稍、定マル、十一年、北朝延文元年尊氏ノ長子義詮征夷大將軍ニ任シ、細川晴氏  
斯波義將ノ二人前後執事タリ、京都將軍家譜二十一年、北朝貞治五年義詮薨シ、子義滿嗣キテ  
立ツ年甫テ十歳、聰明ニシテ器局アリ、細川賴之管領ト爲リ、心ヲ傾ケテ輔導ス、  
二十三年冬、北朝應安元年征夷大將軍ニ任セラル、文中三年、義滿上杉朝房ヲ鎌倉ヨリ  
召シテ京師ノ留守ト爲シ、自ラ鎮西ニ入り、九州ヲ平定シ、喜連川列傳尋テ南朝ト和  
シテ天下大ニ定リ、幕府ノ基礎此ニ於テ固シ、續神皇正統記永和四年、室町新第ヲ造リ  
之ニ徙ル、世ニ之ヲ花御所ト稱ス、足利官位記、花營三代記、是ヨリ累世此ニ住シ、多年幕府ノ

地タリ、應仁ノ亂兵火ヲ免レシモ、義種義澄ノ時、足利氏大ニ衰ヘ、將軍屢、京師ヲ  
出奔シ、東西ニ漂泊スルニ及ヒ、室町府遂ニ衰頽ニ歸ス、義輝二條武衛陣ヲ修メ  
テ、新ニ府ヲ開ク、義昭亦之ニ住シ、足利氏ノ世ヲ終ルニ至レリ、山城名勝志、京室町幕府及武衛陣第八舊跡志ニ記セリ、

足利氏略系

足利氏ハ清和源氏ニシテ、源義家ノ孫義康ニ出ツ、尊氏ニ至リ、大權ヲ執  
リ幕府ヲ立ツ、相承クル八世十四代、義昭ニ至リテ亡フ、基氏義詮ノ弟ヲ  
以テ關東ノ管領タリ、相承クル四世、持氏ニ至リ亡フ、

源尊氏 源義家ノ孫義康七世貞氏ノ子、從二位征夷大將軍、在職二十五年、薨年五十四

直義 從四位左兵衛督

直冬 從四位左兵衛督、直義養子

義詮 征夷大將軍、在職十年、薨年三十八

基氏 關東管領、左兵衛督、薨年廿八 氏滿 關東管領、左兵衛督、薨年四十 滿兼 關東管領、左馬頭、薨年卅三年 持氏

義滿 征夷大將軍、在職四十一年、薨年五十一

滿詮 從二位權大納言

○ 義持 征夷大將軍、在職二十九年、薨年四十三、

○ 義量 征夷大將軍、在職三年、薨年十九、

○ 義嗣 大納言

○ 義教 征夷大將軍、在職十四年、薨年四十八、

○ 義昭 大覺寺門主

○ 義勝 征夷大將軍、在職三年、薨年十、

○ 義政 征夷大將軍、在職四十九年、薨年五十六、

○ 政知 義澄 義政養子

○ 義視

○ 義植 征夷大將軍、在職十八年、薨年五十八、義冬

○ 義榮 征夷大將軍

○ 義尙 征夷大將軍、在職十七年、薨年二十五、

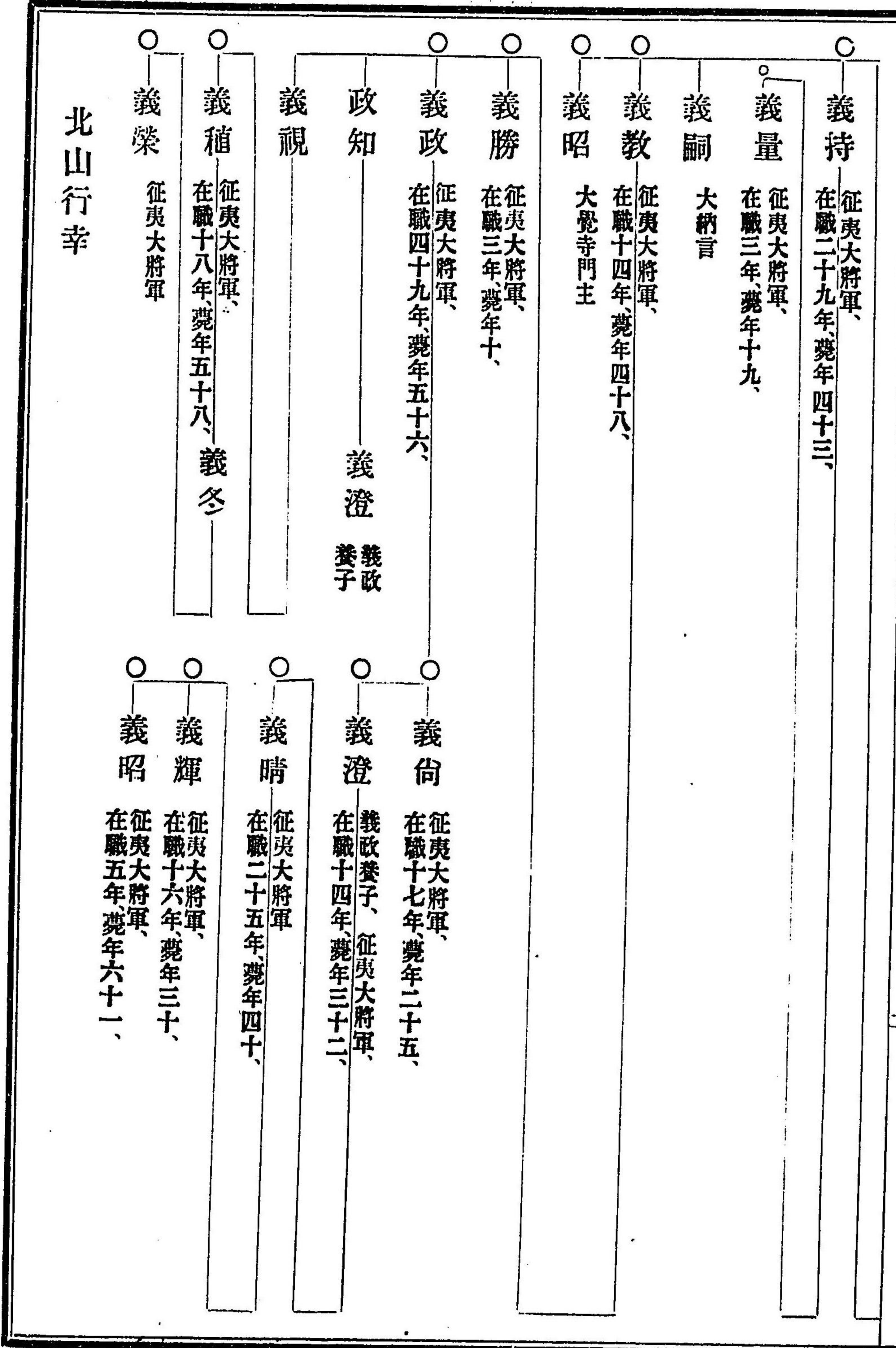
○ 義澄 義政養子、征夷大將軍、在職十四年、薨年三十二、

○ 義晴 征夷大將軍、在職二十五年、薨年四十、

○ 義輝 征夷大將軍、在職十六年、薨年三十、

○ 義昭 征夷大將軍、在職五年、薨年六十一、

北山行幸



南北既ニ合併シ、海内一ニ歸シ京師稍寧シ、是ニ於テ足利義滿、天皇後小行幸ヲ北山第二請ハント欲ス、應永十五年春、第一ノ門内ニ櫻樹ヲ栽エ、新ニ十三棟ノ殿舎ヲ築ク、正殿ハ其屋ヲ八棟ニ分ケ、上ニ八龍ノ裝飾ヲ施ス、金碧輝耀彫鏤燦然、華麗ヲ窮極ス、遂ニ三月八日ヲ以テ行幸ノ期ト爲ス、北山殿是日午牌車駕宮ヲ發ス、關白藤原經嗣以下、公卿百司扈從ス、藏人權右中辨家俊奉行タリ、其儀概ネ永徳元年後圓融帝室町第行幸ニ倣フ、西牌鸞輿北山ニ達ス、義滿衲衣ヲ着ケ念珠ヲ捻リ、幼子義嗣ヲ携ヘ出テ、四足門ノ下ニ迎フ、既ニシテ殿廂ニ御座ヲ設ケ宴ヲ張ル、義滿西階ニ坐シ、義嗣笏ヲ持シテ東階ニ侍ス、坐次關白藤原經嗣ノ上ニ在リ、天皇先ツ盃ヲ義嗣ニ賜フ、義嗣拜シテ之ヲ受ケ、乃ケ南階ヲ下ル、公卿皆坐ヲ起テ庭ニ下ル、舞踏畢リテ坐ニ復ス、時ニ奉行家俊瓶子ヲ侑ム、義嗣盃ヲ把リテ關白經嗣ニ傳フ、公卿遞次之ヲ受ク、世以テ異例トス、九日雨フル、内宴アリ、十日義滿和漢古今ノ珍玩寶器ヲ堆積シテ之ヲ獻ス、又衣服三領或ハ五領ヲ廷臣ニ頒ツ、十一日雨フル、連歌會ヲ開ク、義滿首句ヲ唱ヘ、御製之ニ賡ク、相次シテ終ニ百韻ニ至ル、十二日雨フル、因テ小宴ヲ開ク、是日天皇北山院ニ行幸シ、女院天皇ノ生母ニ面ス、又崇賢門院後圓融院ノ生母ニ幸ス、十四日天晴、春色駘蕩、櫻花爛漫、天皇正殿ニ御シテ舞樂ヲ觀ル、伶人皆集ル、舞童ハ奈良兩門跡乘一

院大 乘院ノ進ムル所ニシテ、大衆五百人之ニ從ヒテ場ニ上ル、公卿皆陪覽ス、十五日  
雨フル、夕ニ至リ霽ル、天皇乃チ義滿ヲ從ヘ崇賢門院ニ行幸ス、宴ヲ張リ猿樂ヲ  
觀ル、北山殿  
行幸記 十七日蹴鞠ノ遊アリ、殿上及賀茂ノ技人皆參集ス、二十日三船ノ遊  
アリ、關白經嗣以下數人ハ詩船ニ乘リ、天皇及義滿義嗣以下數人ハ歌船ニ乘リ、  
又管絃ノ船ニ乘ル、二十三日歌會アリ、花契萬年ヲ以テ題ト爲ス、  
よろつ代となれては花に契るとも春へむとしそなをよかきらし 御製  
萬代と契りし花も今よりは君かみゆきにかきりしられし 義滿  
萬代とさして契らしかきりなく花になれ見む春のゆくすゑ 義嗣  
花はけふうれしき色に出そめてあへるを春と契る萬代 經嗣  
時ニ天皇駐輦十餘日ニ及フ、公卿或ハ皇居ヲ此ニ移サシコトヲ議スル者アリ  
シトイフ、是時關白經嗣其記ヲ作ル、世ニ傳フル所ノ北山殿行幸記即チ是ナリ、  
北山殿行幸記、漢  
文北山殿行幸記、

平安通志卷之五十一

平安通志卷之五十二

湯本文彦等編

第三編

足利義滿驕僭

義滿幼ヨリ器局アリ、加フルニ細川賴之ノ輔佐ヲ以テス、故ニ能ク禍亂ヲ平ラ  
ケ、南北ヲ合シ、海内ヲ統一セリ、征夷大將軍ヲ以テ右馬寮御監ヲ兼テ、從一位ニ  
叙シ、左大臣兼藏人所別當トナリ、牛車ヲ聽サレ、院ノ別當并ニ淳和獎學兩院別  
當源氏長者ニ補セラル、遂ニ准三后太政大臣ニ至ル、細川賴之記、花營三代記、足  
利家傳、公卿補任、尊卑分賦、  
皇年代  
畧記、 故ニ意滿チ心驕リ、中年以後僭奢ノ事甚タ多シ、離太平記、臥  
殿日件錄、 明德三年八  
月、相國寺ヲ創建シ、海内ノ諸國ヲシテ役ヲ助ケシム、其周垣二十餘町、工事雄壯、  
當時比ナシト稱ス、應永六年九月、更ニ七層塔ヲ堂東ニ築ク、高サ三百六十尺、法  
勝寺九重高塔ノ外、古今之ヲ以テ第一トナス、相國寺供養記、南方  
紀傳、碑林諸祖傳、 其他興福寺延  
曆寺ノ諸堂ヲ建テ、前後大工事ヲ起スコト枚擧ニ違アラズ、應永二年、太政大臣  
ヲ辭シ、髮ヲ削リテ天山道義ト號ス、公卿補任、  
足利家傳、 之ヨリ驕奢更ニ甚シク、四年四月、  
藤原公經ノ北山西園寺ノ地ヲ愛シ、他ト交換シ、大ニ別業ヲ營ミ、土木ヲ窮極ス、  
又海内ニ令シテ役ヲ助ケシム、費ス所凡ソ一百万貫、誅求苛責至ラサルナシ、大

内義弘ノ反セシ如キ實ニ此ニ原因スト云フ、以テ其海内ヲ苦メシヲ知ルヘシ、其構造廣大、山ニ據リ林ヲ控ヘ、中央ニ三層閣ヲ起シ、柱壁牖戸塗ルニ金ヲ以テシ、號シテ金閣ト云フ、輪奐人目ヲ奪フ、其他宮殿之ニ稱フ、遶ヲスニ苑池ヲ以テシ、奇石珍木ヲ集メ、林泉ノ勝ヲ極メ、更ニ麋鹿ヲ此内ニ養フ、稱シテ鹿苑ト云フ、功竣リ徙リテ之ニ居ル、應永十五年三月奏シテ車駕ヲ此ニ迎フ、之ヲ北山行幸ト曰フ、足利宗傳、山城名勝志、臥雲、日伴、是ヨリ先應安中、明太祖三タヒ僧徒ヲシテ、來テ通信互市ヲ求メ、併セテ我人民ノ彼邊境ニ寇スルモノヲ禁遏センコトヲ求ム、當時外國ノ交通ハ大内氏之ヲ掌ル、義滿義弘ヲ誅スルノ後、應永八年、僧祖阿及商人肥富ヲ明ニ遣シ、表ヲ奉シ交通ヲ求ム、之ヨリ信使常ニ絶ヘス、方物ヲ明朝ニ贈リ、又多ク金ヲ輸送シテ、珍器異品ヲ求メ、把玩獨リ自ヲ樂ミ、且ツ錢ヲ求メ國用ニ贍ス、善隣國實記、相國寺文書、義滿取、九年、明主義滿ヲ封シテ日本國王ト稱シ、使ヲシテ冠服ヲ携ヘ來ラシム、義滿之ヲ北山別業ニ延キ、其封爵ヲ受ケ、其衣冠ヲ服シ以テ榮トナシ、表ヲ奉シテ恩ヲ謝ス、此ヨリ交通禮聘、其世ヲ終ルマテ絶ユルコトナシ、其年號ノ如キモ、亦彼ヲ摸セントスルニ至ル、關白成恩寺經嗣、其事ヲ記シテ曰ク、明德五年七月一日出仕以前、菅相公前式部大輔菅原秀長密々談云、今度所勘進年號五也、彼勘草、今朝夫内々室町殿入見參之所、被仰云、興德年號五之、内其一也興字可

改洪字、此字有大切子細、洪德引文、早可撰獻云々、洪字被執仰條有議歟、當時異朝號大明王歟年號洪武也、爲學彼風化、若自僧中申出來歟、中凡者吾國何可追異朝之法哉、殆可謂本朝之耻也、荒トアリ、以テ義滿ノ王室ヲ蔑シ名分ヲ亂リシ心事ヲ見ルヘシ、義滿素ヨリ驕肆禮法ヲ顧ミス、相國寺ヲ供養スルヤ、其儀ヲ御齋會ニ準シ、延曆寺講堂ヲ慶セシ時、其鹵簿ノ儀仗ヲ行幸ニ准ス、足利宗傳其甚シキハ臣ヲ外邦ニ稱シ、封爵ヲ受ケ、恬然自カラ喜フニ至ル、應永十五年五月病テ薨ス、年五十、是ヨリ先其長子義持ノ生ルルヤ、天使就テ之ヲ從五位下ニ叙ス、義滿憚ハス、天使恐レテ辨官ノ誤ニ托シ、改メテ正五位下ヲ授ク、史、野是ニ至テ朝廷太上皇ノ尊號ヲ贈ル、其夫人日野氏ハ帝ノ准母トナレリ、分、原明主成祖計ヲ聞キ、使ヲ來ラシ恭獻王ト諡ス、紀傳、南方管領斯波義將曰ク、人臣ノ贈位、上皇ニ至ルコト古來アラサル所ナリ、且ツ外國ノ封諡ヲ受ク、國體ノ關スル所ナリト、義持ヲ勸メテ之ヲ辭セシム、南方紀傳

明德之役

世之ヲ内野ノ戰ト稱ス、内野ハ北ハ一條ヨリ南二條ニ至ル、廣袤十餘町ノ間ヲ謂フ、今ヤ京都市ノ西北ニ屬シ、農家市街田圃林藪相接ス、古老或ハ指示シテ當時ノ營趾ヲ説ク者アリ、初メ足利尊氏志ヲ得ルニ急ニ、將士ヲ賞スル制限ナシ、

其大ナル者而三州ヨリ十餘州ニ至ル、山名氏清之カ魁タリ、勢ヲ恃ミ強横ナリ、細川頼之之ヲ惡ム、明德元年、氏清ノ兄時義但馬ニアリテ專恣ナリ、會病テ歿ス、二子時熙氏之亦暴戾、氏清之ヲ義滿ニ構フ、義滿乃チ氏清及ヒ滿幸ニ命シテ之ヲ伐タシム、時熙敗レテ逃ル、滿幸ハ氏清ノ兄ノ子ナリ、義滿伯耆隱岐ヲ氏清ニ授ケ、但馬ヲ滿幸ニ與ヘ以テ之ヲ賞ス、氏清等益驕ル、既ニシテ時熙氏之窮ニ京師ニ入り情ヲ訴フ、義滿之ヲ憫ミ將ニ氏清ニ諭シ之ヲ宥サントス、其十月氏清義滿ニ紅葉ヲ宇治別墅ニ觀ント請フ、義滿之ヲ許ス、供張既ニ備ル、滿幸窮ニ之ヲ氏清ニ告ク、氏清大ニ恚テ曰ク、將軍反覆是レ我ヲ輕ニスルナリト、俄ニ疾ト稱シテ之ヲ辭ス、義滿既ニ室町ノ第ヲ出ツ、中途ニシテ還ル、意甚タ憚ハス、是ヨリ先出雲ニ上皇ノ邑アリ、滿幸之ヲ掠奪ス、義滿滿幸ニ諭シ之ヲ返サシム、聽カス、義滿將ニ其守護ヲ奪ハントス、滿幸憤怨氏清ニ反チ勸ム、曰ク、事既ニ此ニ至ル、若カス闔族兵ヲ擧ケ道ヲ分テ京ニ入ラシム、今日ノ勢誰カ能ク吾ニ抗セシ、我怨チ細川頼之ニ修ムト聲言セハ是レ兵ニ名アルナリ、機失フヘカラスト、氏清之ヲ可トス、期スルニ十二月廿七日ヲ以テス、約シテ曰ク、卿西國ノ兵ヲ以テ丹波ヨリ進ミ、以テ我ト合撃セヨト、滿幸乃チ還ル、義滿氏清ノ怨望スルヲ聞キ、故ニ時熙氏之ヲ宥ム、十二月十九日、滿幸ハ兵千七百ヲ率キテ丹波ヨリ進ミ、

氏清ハ兵二千三百ヲ率キテ男山ニ屯ス、義理ハ紀伊ヲ發シテ天王寺ニ陣ス、義理ハ氏清ノ兄ナリ、齊ク進テ京師ヲ攻ントス、二十日、義滿諸將ヲ召シ議シテ曰ク、我出テテ東寺ニ陣シ、諸將ヲシテ内野ニ陣セシメハ、氏清必ラス進テ我軍ヲ衝カン、我前後夾テ之ヲ撃タハ必ラス殲サント、一色詮範進テ曰ク、東寺内野ト相去ル遠シ、請フ臣カ堀河第ヲ以テ牙營トシ、諸將ヲシテ出テ、内野ニ陣セシメ、敵若シ河ニ循テ來ラハ、則チ内野ノ軍之ヲ諸巷ニ要シ、別ニ一軍ヲ遣リテ東寺ニ陣セシメ、其軍後ヲ斷タハ之ヲ破ル必セリト、議乃チ定ル、二十六日、今川泰範、赤松顯則、佐々木高詮ヲシテ東寺ニ陣セシム、義滿ハ出テ、詮範カ堀河第ニ陣ス、今東堀川下立賢東側地諸將ハ皆内野ニ赴ク、細川頼之ハ手兵二千ヲ以テ中御門西大宮今高野郡朱雀野ニ陣シ、滿幸ニ備フ、赤松義則ハ千三百ヲ以テ雀森今高野郡大宮ノ西ニ陣シ、丹波ノ兵ニ備フ、畠山基國ハ八百ヲ以テ神祇官址ノ北ニ陣シ、東面ニ當ル、大内義弘ハ五百ヲ以テ二條大宮ニ陣シ、氏清ニ備フ、一色詮範ハ三百ヲ以テ春日猪熊ノ敵ニ備フ、佐々木高詮ハ七百ヲ以テ大嘗會畦今千本通一色ノ北ニ當ルニ陣シ、滿幸カ長阪口ノ別軍ニ備フ、布置既ニ定ル、二十八日、滿幸峯ノ堂ニ至ル、氏清ハ淀中島ニ至ル、兵ヲ分チ三ト爲ス、山名氏冬ヲシテ因幡ノ兵ヲ率キテ鳥羽ヨリ進マシム、義理ハ山名義教部將小林上野名ヲト失スト兵ヲ合セ、四條畷ヲ經テ



大宮ニ向フ、氏清自ラ本軍ニ將トシテ、七條ヨリ東洞院ヲ經テ大宮ニ向フ、俄ニシテ義數上野カ兵先ツ至リ、吶喊戰ヲ挑ム、大内義弘之ヲ邀ヘ、自ラ上野ト闘ヒ之ヲ斬ル、義數ハ挺進シテ中御門ニ至ル、義滿カ麾下ノ土富永筑後撃テ之ヲ殺ス、二將率ル所ノ兵百八十餘人悉ク之ニ死ス、滿幸ノ先鋒桂川ノ上流ヲ亂リ梅津ニ至ル、滿幸途ヲ誤リ期ヲ失シ、更ニ二條ニ向フ、賴之ニ二條口ヲ扼ス、義滿旗鼓ヲ備ヘ進テ中御門ニ陣ス、滿幸進テ内野ニ至ル、賴之基國邀ヘ戰ヒ、勝敗未タ決セス、高詮二條口鬪聲雷ノ如キヲ聞キ、兵ヲ率テ之ニ赴ク、滿幸カ軍之ヲ顧ミ、土屋黨百五十ヲ分ツテ之ニ當ラシム、高詮戰テ大ニ之ヲ破ル、義滿因テ全軍ヲ鼓シ、滿幸カ軍ニ迫ル、滿幸大ニ敗ル、死者五百餘人、右近馬場ヨリ梅津桂ニ至ル、伏屍野ヲ蔽フ、滿幸走テ桂川ニ至ル、追撃急ナリ、部下松田將監殿戰シテ之ニ死ス、滿幸間ヲ得テ僅ニ免ル、氏清義數上野既ニ死シ、滿幸亦敗ルト聞キ、大ニ志リ進鬪セントス、左右或ハ之ヲ諫テ曰、敵兵甚タ銳ナリ、暫ク其鋒ヲ避ケ、退テ再舉ヲ圖レト、氏清曰ク、我精兵ヲ舉テ之ヲ京軍ニ加フ、之ヲ破ル必セリ、不幸ニシテ戰没セハ今日戰死ノ勇士ト地下ニ相見シノミト、因テ兵ヲ進メテ西七條ニ至ル、赤松義則之ヲ迎ヘ大ニ戰フ、敵勢甚銳、義則敗走ス、山名時熙曰ク、今日ノ戰ハ我ニ由ルカメサルヘカラスト、手兵五十ヲ率テ進ム、戰敗レテ敵ニ圍マル、部

下ノ士垣屋彈正滑良兵庫奮鬪シテ死ス、時熙僅ニ身ヲ以テ免ル、我軍急テ本軍ニ告ク、義滿正ニ滿幸ヲ破リ兵疲ル、一色詮範奮テ曰、臣死ヲ以テ之ニ當ラント、進テ氏清カ軍ヲ突ク、戰數合、殺傷過當ナリ、氏清多ク麾下ノ良ヲ失フ、能ク從フ者僅カニ七騎、塚ニ據リテ息フ、詮範モ亦三十騎ヲ餘ス、馳セテ氏清ニ迫ル、氏清素ヨリ詮範ヲ識ル、呼テ曰ク、好敵手來レ、吾汝ト死セシト、乃チ奮鬪ス、遂ニ詮範ノ獲ル所トナル、首ヲ麾下ニ獻ス、此役敵軍死者八百七十九人、我軍百六十餘人ヲ失フ、實ニ明德二年十二月晦日ナリ、

嘉吉之變

將軍義教既ニ足利持氏ヲ滅ホシ、又結城氏朝ヲ討テ、春王安王ヲ虜ニシテ、之ヲ美濃ニ殺ス、是ニ於テ意益驕ル、鎌倉大草子、永平記居常赤松滿祐ノ人ト爲リテ憎ミ、短矮ヲ嘲リ數、之ヲ辱カシム、滿祐啣ム、滿祐ノ妹義教ニ侍ス、旨ニ忤ヒテ殺サル、滿祐益、恚恨ス、初メ義持滿祐ノ族持貞ヲ愛シ、滿祐ノ邑ヲ以テ之ニ授ク、滿祐之ヲ怨ミ、播磨ニ走ル、諸將素ヨリ持貞ノ驕恣ヲ惡ミ、之ヲ分疏ス、義持已ムヲ得ス、死ヲ持貞ニ賜フ、義教モ亦持貞ノ姪貞村ノ色ヲ寵シ、滿祐ノ邑ヲ奪ヒ、之ヲ貞村ニ與ヘント欲ス、滿祐遂ニ病ト稱シテ出テス、子敏康ヲシテ幕府ニ奉仕セシメ、竊ニ義教ヲ弑センコトヲ謀ル、時ニ關東平クテ以テ、諸將交、義教ヲ其家ニ饗ス、教康

モ亦請テ日ク、當年鴨兒多ク乳シ、遊泳ノ狀愛スヘシ、幸ニ臨宴アラント、義教其  
 隱謀アルヲ知ラス、之ヲ許ス、嘉吉元年六月二十四日、義教教康ノ西洞院、油小路  
 ノ第二往ク、三條以下公卿、及ヒ諸將從フ、教康盛饌ヲ設ケ、散樂ヲ張ル、曲鶴ノ羽  
 ノ及フ、故サヲニ馬ヲ縱テ、陽リ驚キ謂フ馬逸スト、第中喧擾ス、因テ四門ヲ塞キ、  
 以テ出入ヲ禁ス、伏兵俄ニ發リ、義教ヲ捉ヘ伏シテ其首ヲ斬ル、事倉卒ニ起リ、衆  
 咸驚譟ス、中納言藤原實雅及ヒ大内持世拒キ戰テ創ヲ被ル、斯波義廉ハ墻ヲ踰  
 エテ遁レ、京極加賀入道道統、山名熙貴ハ鬪テ死シ、細川持之、細川持常等皆逃ル、  
 教康滿祐己ニ志ヲ得、幕府ノ來討ヲ待テ、以テ戰死セントス、而シテ幕府ノ諸將  
 錯愕爲ス所ヲ知ラス、唯其邸ヲ守ルノミ、敢テ赴キ撃ツ者ナシ、二十五日、教康滿  
 祐ト俱ニ其第ヲ火キ、隊ヲ整ヘ義教ノ首ヲ函ニ盛リ、兵士前後ヲ圍ミ、油小路ヲ  
 南ニ東寺ニ抵リ、遂ニ京都ヲ去ル、敢テ追躡スル者ナシ、乃テ路義教ノ首ヲ葬リ、  
 播磨ニ歸リ、城山白旗ノ二城ニ據ル、幕府ノ諸將議シテ義教ノ子義勝ヲ迎ヘ之  
 ヲ立ツ、時ニ年八歳ナリ、乃テ義教ヲ等持院ニ葬ル、夫人及ヒ婢妾皆髮ヲ削リ、尼  
 トナル、是ヨリ先室町邸中ニ怪アリ、小人長二寸許、燕室ニ來集シテ、散樂ヲ奏シ  
 鶴ノ羽ヲ舞フ、義教ノ弑ニ遭フニ及ヒ、適、鶴ノ羽ヲ舞フ、蓋シ其凶兆ナリト云フ、  
 義教頗ル學問アリ、性嚴峻、已ニ桑門ヲ出テ將軍トナリ、能ク強横ヲ制シ、幕威ヲ

立ツ、足利氏ノ勢稍振フ、然トモ天資恩少ク、愛憎常ナシ、以テ遽カニ禍ニ及ヘリ、  
持氏、永平記、八月、管領細川持之ニ勅シテ、赤松滿祐父子ヲ討タシム、細川成之、赤松  
 貞村、武田信繁ハ須磨ヨリシ、山名持豐、山名熙高ハ大口山ヨリシ、各自兵ヲ督シ  
 テ白旗城ニ薄ル、九月、持豐險ヲ破リ、遂ニ城ヲ拔キ、滿祐ヲ誅シ、首ヲ京師ニ傳フ、  
 教康ハ逃レテ伊勢ニ走ル、國司北畠氏收メテ之ヲ誅ス、乃テ首ヲ三條西洞院ニ  
 梟ス、世ニ之ヲ嘉吉ノ變ト曰フ、嘉吉元年九月、幕府貨借廢棄ノ令ヲ布キ、之ヲ德政ト稱ス、是ヨリ先幕府ノ奢侈

德政

嘉吉元年九月、幕府貨借廢棄ノ令ヲ布キ、之ヲ德政ト稱ス、是ヨリ先幕府ノ奢侈  
 年ヲ逐テ増長シ、用度支エス、京師ノ民ニ商稅ヲ課スルコト益重シ、商人亦利ヲ  
 貪リ、益、民財ヲ朘削シ、京師日ニ凋弊ス、將軍義教鎮西ノ富豪ヲ京師ニ徙ス、京師  
 因テ喧闐ナリ、乃テ酒戶稅及土倉稅ヲ徵シ、以テ將軍一家ノ用度ニ充ツ、課稅煩  
 重、物價從テ騰貴ス、會、畿内近江饑ウ、是ニ於テ窮民蜂起シ、火ヲ放テ典舖ヲ燬キ、  
 債ヲ償ハスシテ財物ヲ橫奪シ、號シテ德政ト曰フ、幕府兵ヲ出シテ之ヲ禦ケト  
 モ制スルコト能ハス、是ニ至リ、遂ニ令シテ德政ヲ行フ、是歲物件ノ貸借賣買ニ  
 關シ、制規ヲ定メテ之ヲ頒ツ、曰ク、

德政條々

一諸社神物 付神明無野隈要脚事

不可有改動之儀、但不載其社名者、難被信用歟、

一祠堂錢事 限文字

子細同前、但不載祠堂方帳者、難被許容歟、

一永領地事

不可有改動之儀、但爲出領主返狀之年紀之內者、不可有、其沙汰也

一帶御判并下知狀地事

既被經御沙汰之者、不能悔返者也

一永代賣寄進地事

不可有改動之儀

一本地返地同屋事

可被返本主也

一借書事 付總政文言不可、依文章全前

子細同前

一紀年沽却地事

子細全前

一土倉以下流質事

過約月者、任法可爲錢主計也

時ニ禪僧慧鳳、德政篇ヲ幕府ニ獻シ、其害ヲ論ス、三年二月、德政ノ徒洛南ニ起ル、幕府其首魁塔森船渡代官山本彌次郎ヲ捕ヘテ斬ニ處ス、其黨逃亡ス、長祿三年十一月、羣民城西ニ聚リ、鐘ヲ鳴シ、鼓ヲ打テ、德政ノ令ヲ出サンコトヲ要請ス、幕府命シテ其首領ヲ誅ス、寛政三年十月、德政ノ徒復起リ、城外ヨリ鼓噪シテ洛中ニ入ル、幕府兵ヲ以テ之ヲ禦ク、其徒麤至シ、道路通セス、商估皆業ヲ止ム、應仁中將軍義政ノ領地十七所ヨリ數、德政ヲ布カンコトヲ請フ、義政幕府ノ諸老ヲ召シ、先規ニ依リ、遂ニ德政ヲ行フ、其後足利氏ノ末葉ニ至リ、人民黨ヲ結ビ、屢幕府ニ逼テ、德政ヲ要請ス、而シテ其黨ヲ聚ムルヤ、貝ヲ吹キ、鐘ヲ鳴ラシ、以テ德政ノ事ヲ報ス、是ニ於テ無賴ノ徒雲集シ、各兵器ヲ携ヘ、富豪ノ家ニ入り、財貨ヲ掠奪シ去ル、其兇暴ナル山賊海盜ニ均シ、幕府之ヲ患ヒ、貸借ノ物件ニ依リ、其期限ヲ定メ、且ツ其亂暴ヲ戒ム、令ニ曰ク、

定德政事

一ケ精布ンフノダグイ、エサ繪登ンノ物、諸籍ノダグヒ、カ樂器ツキノ具足、カ傢具グ、サ雜具ウグ等、置月ノ外十二ヶ月タルヘキ事

一、益、香、合カウハコ、茶碗ワ、花瓶ヒン、カウロ、カナ物以下廿ヶ月タルヘキ事付フクケ月暮

右條々任先例サタメナカル、トコロナリ、シヨセン十分一ヲサタセシメ、以女白晝ニトルヘシ、若コノヤク月ヲハセスギハ、ナガレ質タルヘキ上者、德政ノサ取タニヲヨフベカラス、萬一寄事於左右、ガウ取ノ儀ニヲヨハ、ナキテトイヒ、トリテトイヒ、共ニ以ザイクワニシヨセラルヘシ、此外ノ借錢以下事相互令注進、御下知ヲモツテ其沙汰アルヘキノ由、所被仰下也、仍下知如件、

永正十七年二月十二日

丹後守平朝臣

上野介藤原朝臣

幕府又償還法ヲ定メ、物件ニ依リ、本錢ノ五分ノ一、或ハ十分ノ一、或ハ十分ノ一ヲ以テ償還スルヲ許ス、然レトモ當時幕府ノ威令漸ク行ハレヌ、吏胥亦間ニ居テ土民ヲ煽動シ、德政棄債ニ託シテ私利ヲ謀ル、是ヲ以テ德政ノ徒復期限ト償還法トナ間ハス、幕府德政ノ制規モ終ニ空文徒法タルニ至ル、而シテ德政ニ全國一般ニ行フ者ト、一地方ニ限リテ行フ者トアリ、又私ノ德政アリ、是レ守護地頭領家ノ輩、將軍ノ命ヲ待タス、恣ニ管内ニ德政ノ令ヲ出スヲ謂フ、嘉吉以來

此ノ如ク德政頻繁ニ行ハレ、土地物件ノ賣買質入等往々無効ニ屬シ、天下ノ人々財産ノ安固ナルヲ知ラス、商業從テ萎靡シ、上下ヲ舉テ疲弊ノ極ニ陥レリ、其間幕府ノ德政ヲ以テ、良民ヲ培克シ、暴民ノ德政ヲ藉リテ凶亂ヲ肆ニシタルノ情狀ハ、當時ノ日記、及ヒ劫濁發心畧記、小松殿教訓狀、塵塚物語等ノ諸書ニ載セテ詳ナリ、

往古王朝ノ時德政ト稱セシハ、桓武帝延曆十八年ノ詔ニ、惟王經國、德政爲先ト見エ、又村上帝天曆十年恩赦ノ詔ニ、夫德政防邪、善言招福トアリテ、或ハ田租ヲ蠲免シ、或ハ調庸未進ヲ免除セラル、カ如キ專ラ恩德ヲ垂レテ仁政ヲ施スヲ謂フ、降りテ弘安永仁ノ際、沽却ノ田畠質物悉歸本主ヲ以テ德政トナスニ至リ、先王ノ制始テ壞ル、其後陵夷シテ室町幕府ニ及ヒ、貸借廢棄ノ令ヲ公布シ、暴政ヲ施シテ天下ノ良民ヲ困シメ、尙ホ之ヲ德政ト稱ス、名實全ク相反スト謂フヘシ、而シテ人民ノ黨ヲ結ヒ、政事ノ要請ヲナスモ、亦實ニ此ニ始マル、且ツ夫レ德政一タヒ行ハレテヨリ、其福足利氏ニ止マラス、延テ織豊二氏ニ及ヒ、更ニ德川氏ニ至テ尙ホ其弊ヲ承ケ、棄捐ノ令ヲ發スルノミナラス、凶年饑歲往々細民ノ一揆ヲ起シ、竹槍席旗ヲ以テ、或ハ富豪ヲ劫シ、或ハ代官所ニ迫テ、減租ヲ要請セシメタルハ、是レ其餘風ナリ、建内記、管見記、建武以來追加、室町殿日記、小松殿教訓狀、日本後紀、本朝文粹、竹居清寧、國史眼録取、

日野有光之變

嘉吉三年九月二十三日楠次郎某、名呼ナラス、璽シ正儀ノ子、又ハ孫ナラフント云フ、大和ノ越智某等ト南朝ノ遺臣ヲ糾合シ、後龜山帝ノ皇孫小倉宮ノ第二子尊義王、尊義王ハ初メ僧トト曰フ、竊ニ髪ヲ鬻ヘ今名ニ改ム、及ヒ其長子尊秀王ヲ奉シ、日野一位入道藤原有光ト合シ、兵三百餘人ヲ率テ、夜半皇居ヲ襲ヒ西門ヨリ入り、其兵ヲ二隊ニ分テ、一ハ楠次郎之ヲ率テ清涼殿ヲ犯シ、一ハ越智某將トナリ局町ニ入ル、時ニ禁衛軍微、事忽卒ニ發ス、一人アリ眉尖刀ヲ振ヒ帝ニ迫ル、目眩シテ僵ル、帝御冠ヲ捨テ宮女ノ爲シテ、步走唐門ヨリ遁ル、帝忽卒ノ間寶劍ヲ取り換フルニ鞘卷、繪ノ太刀ヲ以テス、神璽ハ典侍奉シテ遁レントス、亂兵寶劍ノ袋ヲ見テ之ヲ取り、典侍ヲ逐ヒ神璽ヲ奪ヒ、又内侍所ヲ取り、火ヲ清涼殿ニ放テ去ル、時ニ守兵漸ク集リ、追撃シテ五十三人ヲ斬リ、内侍所ヲ取返ス、火勢益々熾ニ宮殿灰燼トナリ、免ルモノ僅ニ東正二門ノミ、帝初メ裏辻中將ノ家ニ遁レ、又廣橋綱光ノ家ニ移リ、又腰輿ニ御シ、前關白近衛忠嗣ノ家ニ御ス、内侍所モ尋テ至ル、亂ノ起ルヤ、太后准后皇子各々散走シテ僅ニ免ル、二十六日ニ至リ、帝更ニ伏見殿ニ遷御アリ、伏見殿ハ生父貞本ト伏見帝ノ仙宮ナリ、一條東洞院ニ在リ、亂兵已ニ神璽ヲ奪ヒ、走テ叡山中堂ニ據リ、牒シテ今度南方ノ官ヲ立ルヲ以テ内裏ニ至リ、神璽ヲ取りシ事ヲ報ス、官兵來リ攻ム、山僧之

ニ應シ、戰テ中堂ヲ陷ル、有光、二郎、越智某等戰死シ、尊義王亦害セラレ、首ヲ京師ニ傳フ、南軍大和ニ走リ、神璽ヲ尊秀王ニ奉リ、吉野ノ奥ナル北山莊ニ行殿ヲ造リ、之ヲ北山宮ト稱ス、年號ヲ建テ、天禧元年ト稱ス、後十五年長祿元年十二月二日、津川ニ據ル、八月又攻テ之ヲ破ル、王傷テ死ス、遺臣神璽ヲ取リ、其三十日ヲ以テ土御門新造ノ内裏ニ奉遷セリ、其奪フ所ノ御劍ハ、清水寺ノ堂中ニ遺シ一書ヲ附ス、曰ク大内の三種の神器にて候、御返シ申され候へ、わろくせられ候は、罰あたり候へく候トアリ、寺僧之ヲ奉ル、同二十八日、足利氏命シ其擒スル所南軍五十四人ヲ六條河原ニ斬リ、有光ノ子參議右大辨資親ニ及フ、十月二日勸修寺權僧正教尊、後龜山帝尊孫尊秀ニ通スルヲ疑ヒ、兵ヲ遣リ之ヲ執フ、坊官鬪死スル者アリ、是ヲ日野有光ノ變ト曰フ、初メ南北ノ合併スルヤ、兩統交立ノ約アリ、然ルニ稱光帝ノ立ツ、已ニ其約ニ背ク、帝崩シ嗣ナシ、後龜山ノ皇子小倉宮立ツヘシ、然ルニ又約ニ背キ、持明院ノ統伏見貞成親王ノ王子ヲ立ツ、之ヲ後花園帝トス、小倉宮憤懣伊勢ニ走リ、國司北畠滿雅ニ頼リ事ヲ擧ク、滿雅戰死シ、和ヲ約シテ止ム、事成ラスト雖トモ、南方ノ遺臣其志未タ屈セス、永享元年楠光正ノ事アリ、此ニ及ヒ遂ニ此變アリ、其事蓋ニ近シト雖トモ、其先皇ノ幽憤ヲ舒ヘ、南朝ノ皇統ヲ立テントスル精神、千挫百折漸燼消滅セサレハ熄マ

附記

永亨元年九月二十四日、足利義教命シテ、楠木五郎左衛門尉光正入道常泉ヲ  
 斬リ、其首ヲ四塚ニ梟ス、光正入道ハ蓋シ正儀ノ族ナリ、初メ應永三十二年足  
 利義量薨シ嗣ナシ、青蓮院門主義圓ハ義量ノ弟ナリ、入テ其統ヲ繼ク、三年ヲ  
 經テ此年九月十五日、將軍宣下アリ、同二十三日義教春日神社ニ詣ツル事アリ、  
 光正蓋シ此時ヲ以テ、爲ス所アラント欲シ、南都ニ隱レ之ヲ伺ヒシカ、足利  
 氏ノ爲ニ捕ハレタルナリ、看聞御記ニ、九月十八日、楠木備後也、俗名五郎被召  
 捕上洛、此間南都忍居、室町殿御下向爲伺申云々トアリ、義教南都ヨリ命シテ  
 速ニ之ヲ戮ス、此日六條河原ニ於テ刑ヲ行フ、光正命ニ臨ミ、從容變セス、筆硯  
 ナ請ヒ辭世ヲ作テ、曰ク不來不去楠真空、萬物乾坤皆一同、卽是甚深無二法、秋  
 霜三尺斬西風、長月やすへの原の草の上に身のよそならてきゆる露かな、  
 我のみかたか秋のよもすへの露本のしつこのかゝるためしを、夢の内に都  
 の秋のはても見つ心は西にありあけの月ト見ル者之ヲ壯トス、光正其志遂  
 ケスト雖トモ、其忠烈楠氏ノ子孫タルニ愧ケスト謂フヘシ、此後十五年ニシ  
 テ有光ノ變アリ、  
 此時ノ皇居ハ東洞院土御門ニ在リ、今ノ皇居ト同シ所ニシテ、其區域ハ今ノ

半ニ及ハサリシナリ、看聞御記、續神皇正統記、後醍醐天皇御記、南方記傳、南朝紀、  
 逐條康富記、楠氏系圖、殘機記、嘉吉記、應仁記、

應仁之亂

寶徳元年三月、足利義政征夷大將軍ニ任シ、天下ノ大權ヲ統フ、年甫十四歳、  
 是時ニ當リ、幕府ノ實權久シク權豪ノ手ニ在リ、政綱弛廢シ、弊害百出ス、義  
 政幼弱庶務ヲ綜理シ、群下ヲ統馭スルコト能ハス、而シテ大亂ノ階此ニ生セリ、  
 是ヨリ先管領畠山持國子ナシ、弟持富ノ子政長ヲ養ヒテ子ト爲ス、後義就ヲ生  
 ム、稍長スルニ及ヒ、遂ニ政長ヲ逐フ、義就年少下ヲ憐マス、衆離叛シテ政長ニ從  
 フ、是ヲ以テ政長義就遂ニ爭端ヲ開ク、政長乃チ河内ニ歸ル、義就因テ義政ニ請  
 ヒ之ヲ討ス、尋テ和シ、共ニ還リテ京師ニ在リ、既ニシテ義就義政ノ旨ニ忤ヒ、兵  
 ナ率井テ河内ニ還リ、若江城ニ入り、尋テ嶽山ノ險ニ據ル、政長乃チ之ヲ攻ム、  
 長祿寛正記寛正元年天下飢饉、加フルニ疫癘行ハレ、餓殍巷ニ滿ツ、義政之ヲ恤マス、  
 奢侈ヲ好ミ、逸樂ヲ事トス、寛正五年義政年三十四、既ニ其職ニ倦ム、而シテ未タ  
 子アラス、是ニ於テ其弟僧義尋神土寺門主ニ論シ、蓄髮シテ巳ノ後ヲ嗣カシム、義尋  
 固辭ス、義政強テ曰ク、余若シ子ヲ産マハ襁褓ヲ脱セスシテ必ス之ヲ桑門ニ棄  
 テ約ニ違フコトナカラント、是ニ於テ義尋還俗シテ名ヲ義視ト改ム、管領細川  
 勝元之カ輔佐タリ、會義政ノ夫人藤原富子男ヲ生ム、後義尙富子之ヲ僧ト爲ス

ニ忍ヒス、竊ニ之ヲ山名宗全ニ托ス、宗全ハ嘉吉ノ變ニ大功アリ、領地廣ク、族類多ク、頗ル威望アリ、蓋シ富子之ニ倚賴シ、以テ勝元ニ抗セントス、宗全亦喜ヒテ之ヲ諾ス、初メ宗全女ヲ以テ勝元ニ妻ハス、應仁故ヲ以テ勝元ヲ助ケテ政長ニ黨ス、享德三年宗全義政ノ旨ニ逆ヒ、但馬ニ屏居ス、應仁適勝元ノ族成之、赤松氏ノ衰滅スルヲ憐ミ、義政ニ請ヒ、滿祐ノ姪則尙ヲ赦シ、播磨國ヲ與フ、宗全之ヲ聞キテ大ニ忿リ、遽ニ兵ヲ起シテ赤松氏ヲ襲ヒ、遂ニ則尙ヲ殺ス、應仁外記、嘉吉記、野史尋テ宗全赦サレテ京師ニ入り、勝元ヲ責ムルニ成之、赤松氏ヲ庇スルヲ許スナリテス、勝元亦初メ宗全ノ子ヲ養フ、後子ヲ得ルニ及ヒテ之ヲ廢ス、是ニ於テ宗全益悦ハス、二人漸ク隙アリ、是ニ至リ密託ヲ受ケ、荐リニ勝元ト權ヲ争フノ計ヲ爲ス、時ニ宗全ノ勢威幕府ノ内外ニ振フ、益黨ヲ植テ、志ヲ逞シクセント欲ス、乃チ畠山義就ノ勇アルヲ聞キ、己カ援ト爲サント欲シ、夫人富子ト謀リ、義政ニ請ヒテ其罪ヲ赦サシム、義就已ニ赦サレテ京師ニ入ル、宗全機ニ乘シテ畠山政長ヲ斥ケント欲ス、應仁元年正月政長先例ニ遵ヒ、梶飯ノ供具ヲ設ク、期ニ至リ將軍義政臨マス、政長憤惋ス、尋テ持豐梶飯ヲ幕府ニ獻シ、其族ト俱ニ訟ヘテ政長ヲ逐ハンコトヲ要求ス、義政之ヲ許ス、是ニ於テ政長勝元ト共ニ兵ヲ集メ、輦轂ノ下將ニ大亂ヲ起サントス、義政之ヲ憂ヒ令シテ曰ク、義就政長二人怨ヲ構

フ、各手兵ヲ以テ輪贏ヲ決スヘシ、若シ黨援スル者アラハ、以テ叛賊ニ比セント、十八日政長御靈社ニ陣ス、義就之ヲ攻ム、宗全潛ニ之ヲ援ク、政長敗走ス、應仁記、長祿記正記、應仁時ニ世皆勝元ノ政長ヲ救ハサルヲ誹リ、或ハ狂歌ヲ作りテ之ヲ謗ル、勝元之ヲ愧テ、門ヲ閉ケテ出テス、伯父持之切ニ勝元ヲ激動ス、部下亦兵ヲ舉ケシコトヲ怨懣ス、是ニ於テ勝元意ヲ決シ、令テ諸國ニ下シテ大ニ兵ヲ募リ、十六萬一千五百餘人ヲ得、宗全之ヲ聞キ亦大ニ兵ヲ發シ十一万六千餘人ヲ得、應仁記、應仁時ニ勝元ノ邸ハ京師ノ東ニ在リ、北小宗全ノ陣ハ京師ノ西ニ在リ、五辻西抗衛シテ將ニ干戈ヲ交ヘントス、而シテ義政之ヲ制スルコト能ハス、應仁記、應仁五月勝元兵ヲ實相院今出川小川ニテ東ニ出シ、西將一色義直ノ邸ヲ奪ヒ、且ツ幕府ニ入りテ將軍ノ旌旗ヲ請ヒ、之ヲ四脚門ニ立テ義視ヲ奉シテ大ニ兵ヲ進ム、尋テ西將斯波義廉等、東將細川師春ノ大官ノ邸ヲ圍ミ、赤松政則等師春ヲ救ヒ、一條堀川ニ激戦ス、伏屍數萬、流血河ヲ成ス、其後鬪戰數回、東軍利ヲ得ルコト毎ニ多シ、時ニ義政其子ノ故ヲ以テ望テ西軍ニ屬ス、侍臣亦欸テ西軍ニ通スル者アリ、勝元牒シテ之ヲ知ル、八月遂ニ義政ニ迫リ、侍臣二十餘人ヲ逐ヒ、天皇及ヒ上皇ヲ室町第二奉迎シ、吉良義信ヲ遣シテ禁闕ヲ衛ラシム、蓋シ勝元、義政ノ志西軍ニ在ルヲ以テ、緩急天子ヲ挾ミテ號令セント欲スルナリ、爾後兩軍日夜

戰鬪シ、所在兵燹ニ罹ル、邸第社寺及ヒ民舍悉ク灰燼ト爲ル、禁闕僅ニ免ルノミ、是ヨリ勝元宗全互ニ持久ノ計ヲ爲シ、各陣營ヲ張り交戦相當ル、黨與亦各國ニ戰鬪シ、天下大ニ亂ル、是ヨリ先義親戰亂ヲ厭ヒ、奔リテ伊勢ノ國司北畠具教ニ倚ル、是ニ至リ義政勝元書ヲ贈リテ之ヲ招ク、既ニシテ蜚語アリ、勝元義親ヲ立テントスト、義政疑惧ス、勝元因テ義親ヲ西軍ニ入レシメント欲シ、謀リテ之ヲ叡山ニ上ラシム、宗全喜ヒテ義親ヲ邀ヘ、之ヲ陣中ニ置ク、義政請ヒテ義親ノ官爵ヲ削ル、應仁二年十二月上皇後花室町第二崩ス、義政悲泣ス、野史三年正月上皇ヲ悲田寺ニ葬ル、道路梗塞泉涌寺ニ送ルアタハサルヲ以テナリ、義政藁履ヲ着ケ、勝元以下將士ヲ率ヰテ扈從ス、四年勝元宗全連戦未タ解ケス、時ニ能登守護畠山義統久シク京師ニ在リ、西陣ニ黨ス、義政之ヲ招ク、義統命ニ應ス、是ニ於テ北陸ノ糧道通ス、會、西陣糧ニ乏シ、其黨多ク東陣ニ降ル、五年三月宗全病ヲ以テ歿ス、東陣踊躍ス、勝元之ニ乘シテ西陣ヲ殲サント欲ス、適亦病ヲ得テ歿ス、兩軍既ニ其首領ヲ失フ、而シテ西軍ノ勢甚微ナリ、翌年西軍先ツ散シ、東軍亦尋テ解ク、世之ヲ應仁ノ亂ト曰フ、應仁記、宛正記、國史、實錄、諸家系圖、雜取、此亂タルヤ、京師大半兵燹ニ罹リ、大小ノ館舍三萬餘宇ヲ蕩盡シ、典籍記錄ノ燒亡スル者擧ケテ數フヘカラス、都下ノ士民、老ヲ扶ケ幼ヲ携ヘ、逃走四散ス、是ニ於テ京師蕩然トシテ殆ト曠野ト

ナリ、滿目蕭條、延曆ノ規模殆ト盡ク、

義政好事

夫レ雅懷ヲ翰墨ニ寄セ、風情ヲ好古ニ托シテ、政務ノ餘閑ヲ娛ムハ、高雅風流稱スヘシト雖トモ、耽溺當務ヲ忘レ、奢侈財政ヲ顧ミサルニ至リテハ、國家ヲ誤リ生民ヲ惱マス、其罪固ヨリ遁ル、所ナシ、然リト雖トモ、其技藝ヲ勸奨シ、美術ヲ開拓スルニ至リテハ亦埋没スヘカラサルモノアリ、足利氏ノ好事ニ於ケル如キ亦是ナリ、尊氏宅間榮賀ヲ師トシテ畫ヲ學ヒ、佛像ヲ作ルニ著色緻密、精巧畫師ニ讓ラス、義詮和歌ヲ善クシ、畫ヲ好ム、新千載集、本朝書史、義滿義持皆文藝ニ長シ、義持尤モ畫ヲ善クセリ、義教豪邁英武ヲ以テ稱セラル、而ルニ詩文ヲ善クシ、書法ニ長シ、又畫ヲ兆殿司ニ學ヒ、多ク觀音ヲ畫ク、累世文雅ノ淵源アルコト斯ノ如シ、義政ニ至テ、多藝好事、殆ト爲サ、ル所ナク、風流謙遊、以テ一代ヲ風靡スルニ至ルモ、亦偶然ナラサルナリ、長祿三年、義政新殿ヲ室町ニ作り、泉石ヲ築キ、珍花異草ヲ蒐メテ之ニ栽エ、華麗ヲ窮極ス、長祿寬正記室内奇玩ヲ列ネ、食ニ黄金沈檀ノ箸ヲ用井、又其母重子ノ爲メニ高倉第ヲ興シテ、善美ヲ盡シ、一障ノ值ニ萬錢ニ至ル、應仁記、野史又猿樂ヲ盛ニシ、或ハ花ヲ東西ノ名區ニ賞シ、常ニ公武百官ヲ會シテ、衣冠ノ美ヲ鬪ハシ、鹵簿供帳ノ盛ナル、古來無比ト稱ス、曾テ花ヲ若王子ニ觀、自



ラ咲きみちて花より外の色もなしト詠ス、其盈滿豊富ノ勢ヲ見ルヘシ、不幸ニシテ兵戈衽席ニ伏シ、爭亂宴安ニ胎シ、終ニ職ヲ其子ニ譲リ、東山別業ヲ營ミテ、東求堂ト號シ、文明十五年、移リテ之ニ居ル。親長記、京師集、堂東ニ四疊半ノ茶室ヲ作り、同仁齋ト名ツク、茶室四疊半ノ濫觴ナリ、繞ラスニ林泉ヲ以テシ、山ニ據リ野ニ臨ミ、泉石布置自然ノ妙アリ、今ニ至リテ天下有數ノ名園ト稱ス、銀閣其中ニ在リ、北山金閣ニ倣ヒ、銀ヲ貼セント欲シ、未タ果サスシテ薨ス、義政既ニ此ニ居ル、禪學ヲ好ミ、茗香ヲ愛シ、茶人珠光等ト公卿ヲ會シ、笑談嬉遊ス、茶記常ニ文墨ヲ好ミ、近臣及ヒ公卿縉紳ト應酬唱和ス、集アリ、今ニ存セリ、曾テ此地ニ於テ詠スル所ノ、わか菴は月待山の麓にてかたふくそらの影をしそ思ふノ歌ノ如キハ、今猶人口ニ膾炙セリ、又畫師藝阿彌ヲ師トシテ畫ヲ學ヒ、筆墨優ニ逸境ニ入ル、藝阿彌ノ父能阿彌、子相阿彌、三世皆義政ニ仕ヘ、丹青ノ技其妙ヲ極メ、遺跡今ニ至リテ清賞セラル、義政又吳道子以下百五十餘人ノ名蹟佳作ヲ聚メテ之ヲ鑑賞シ、室内裝飾ノ法、亦相阿彌ニ至テ備ハル、其好事此ニ至テ極度ニ達シタリ、故ヲ以テ霸業益衰ヘ、時事日ニ非ナリト雖モ、工藝美術勸奨ノ道、知ラス識ラス其間ニ行ハレ、髹漆陶磁ノ法、彫鏤刻飾ノ道、書畫文詞ニ至ルマテ、皆一代ノ特色ヲ成シ、今ニ至テ美術家ハ之ヲ艶稱シテ、東山殿時代ト曰ヒ、多ク典型ヲ此ニ取ル

ニ至レリ、義政ノ好事、治績ノ上ヨリ之ヲ論スレハ、固ヨリ識者ノ譏ヲ免レスト雖モ、其美術工藝上ニ係ル功績ハ、文雅ヲ亂世ニ維持シ、模範ヲ後代ニ貽ス、コト甚タ多シトス、

### 京都衰頹

平安京ノ延曆建奠已來其全盛ヲ極メシハ、圓融花山ノ御宇マテニシテ、此時已ニ右京ハ衰微シ、左京ヨリ一條ノ北鴨川ノ東西、白川東山カケテ繁榮ノ地トナリテ、其勢東北ニ偏重セリ、此間時ニ火災アリシモ、未タ幾年ナラス、恢復シテ其繁華ヲ維持シタリシカ、治承ノ大火ニ及ヒ、京都ノ三分ノ一ハ烏有ニ歸シ、大内裏モ此ニ及ヒ衰頹セリ、其ヨリ福原遷都トナリ、世家巨室ハ家ヲ毀テ宅ヲ移シ、細民ハ家ヲ毀テ之ヲ賣リ、或ハ以テ薪ト爲スニ至ル、官令シテ之ヲ禁スト雖トモ停ムルコト能ハス、徳大寺實定ノ今様ヲ見テモ知ルヘシ、其後承久ノ役アリ、建武ノ亂アリ、南北ノ爭アリ、足利氏稍、小康ヲ保テ、一時安寧ニ歸セシカ、應仁大亂ニ及ヒ、全都荒殘、殆ト寒村荒野トナルニ至レリ、其事ハ別ニ記事アリ、此ヨリ後テ將軍ノ廢立管領ノ爭權ヨリ、三好松永ノ戰亂ニ至リ、益衰頹ニ赴キ、以テ百六十餘年ヲ經過セリ、今諸書ニツキ、其記事ヲ抄出シ、以テ其實況ヲ示ス左ノ如シ、

應仁記ニ曰ク、花洛ハ眞ニ名ニ負フ平安城ナリシカ、不量應仁ノ兵亂ニ依テ、今ハ赤土ト成ニケリ、中略不計萬歲期セシ花ノ都、今何ソソ狐狼ノ伏土トナラントハ、適、殘ル東寺北野サヘ灰土トナルヲ、古ニモ治亂興亡ノナラヒアリトイヘトモ、應仁ノ一變ハ、佛法王法トモ破滅シ、諸宗皆悉ク絶ハテヌルヲ、不堪感歎、飯尾彦六左衛門一首ノ歌ヲ詠シケル、

汝ヤシル都モ野邊ノ夕雲雀アカルヲ見テモ落ツルナミダヲ

又曰ク、花洛ノ體ヲ告來ルニ、二條ヨリ北山東西盡ク燒野ノ原トナリテ、其殘ル處ハ將軍ノ御所ハカリ也、中略爰ニ物ノ哀レナリシハ、下京ヲ追出サレシ細川方ノ者共、一條小川ヨリ東今出川マテ一條ノ大路ニ、小屋ヲサシテ居タリシニ、一條殿小笠原ノ餘焰ニ懸リテ燒ケヌレハ、妻子ノ手ヲ引キ、財物ヲ背ニ負ヒ、方角ヲ失ヒ、右往左往シタル有様、哀トモ中々オロカナリ、又岩倉合戰ノ狀ニ曰ク、此時洛中盜賊南禪寺ニ火ヲカケテ、栗田口ニハ花頂山、青蓮院、北ハ元應寺、岡崎、忽ニ灰燼ト成ケリ、京中ハ戰場ヲ恐レ、東山南禪寺ヘ財物ヲ隱置ク、不計如此成行、マコトニ淺間布ケレ、又曰ク、同六日午ノ刻計リニ、中ノ御門猪熊ノ一色五郎館ニ亂妨人火ヲカケ、又近衛ノ町ノ吉田神主ノ宅ヲ物取共カ火ヲ放ツト、同時ニ火ヲ上ル所九ケ

所折節南風吹、下ハ二條上ハ御靈辻、西ハ大舍人、東ハ室町ヲサカヒ、百町餘リ、公家武家ノ家三萬餘宇皆灰燼ト成、郊原ト成畢、

應仁略記ニ曰ク、廿六日合戰初ツテ、大伽藍灰燼してより、公家武家僧坊人屋いハ程の物ハ損滅セシ、靈佛靈社神驗を失ヒ、佛法破滅時既にいたれり、一々の日限、折々の倒惑、翰墨に暨はされは、泣々告來るに隨ひて、あらゆる損滅の砌憶特分あらく、おもひ出るに隨ひ、過去帳に寫し留むるの處也、

- 草堂 百萬遍 淨菩提寺 新善光寺 佛心寺 廣覺寺 圓興寺 空也
- 堂 三福寺 地持院 猪熊殿 安居院坊 誓願寺 崇福寺八月十日 等
- 持寺 河崎 觀音堂 長講堂 城福寺 禪心院 秋野道場 清和院 麓道場
- 寶傳寺 細山 慈福寺 白細川爲 實相院殿 梶井門跡 大内氏ノ陣 白龍寺
- 大德院 釋院 昆沙門堂 八月十日 同門跡 相國寺法界門 淨花院 九月十日 東
- 北院 伏見殿 鷹司殿 七月十日 近衛殿 勸修寺殿 日野町殿 一條
- 殿 裏松殿 大館殿 四辻殿 久我殿 日野殿 轉法輪三條殿 裏築
- 地殿 萬里小路殿 九月一日 今出川殿 中御門殿 松本殿 三寶院門跡 九月
- 日 烏丸殿 九月廿日 同御庵 西園寺殿 花山院殿 綾小路殿 八月十日
- 四條殿 正親町三條殿 伊勢殿 下伊勢殿 武衛大夫 津殿 六角殿 上下共

色殿 大夫殿 波多野殿 齋藤新兵衛殿 京極殿 八月廿七日 布施殿 九月一日

大御乳人 播磨殿 藤宰相殿 細川豊州 武田殿 伯殿 肥州 九月十三日

日奉行 吉良殿 安禪寺殿 一條上 粉河寺 觀音靈緣 無應本尊 地藏堂 傳教大 師御作 常樂寺 大炊御門清小路

應仁略記ニ曰ク、屋形を見は灰燼となる、焼野には人跡絶ひて滅亡せり、今ま

ては回祿の沙汰を遁れしに、彼方五町十町の間には、鳥類の外に通ふ類も見

ひざりけり、

續應仁後記ニ曰ク、應仁大亂の後、天下とこしなへに戰國となり、諸大名皆己  
か領國に割據し、互に國郡鄉村を争て、毎に合戰の止む時なく、凶年打續て、萬  
民其身を不安、貴賤只危難を懷き日を送る、角して日本一州はいつ治るへし  
共不覺、淺猿き世と成ければ、朝廷の陵廢、武家の衰微、たとへて云はん方もな  
し、中畧 禁裏仙洞、其外諸公家の宅地は、皆亂中に燒果て、公家の面々多分は諸  
國へ離散して、皆大名に身を寄せ、命を繋かれ日を送らる、留り残る人々は、次  
第に寡く成まゝに、其日其夜を送り兼て、京都は大形空地と成り、野原交りに  
荒果たり、され共禁裡の朽ち残りし織かなる御所をしつらひて、皇居ましま  
したりける、中畧 公方の位は名のみにて、天下を治る權威を失ひ、大亂より以  
來は、諸國の大名小名等在京上諸奉行を不相勤、近習の外の者共皆下知を不

用、故武家役諸税を不貢納、剩へ公方の御料所をも、所々に於て押領す、因茲御  
料の御所帶、日々に困窮して動もすれば、大名へ御身を寄せられ、朝夕を送ら  
せ給ふ、是又公方家初てより以來、前代未聞の衰廢也、

延徳御八講記ニ曰ク、應仁のみたれより二十餘年の間に、公私諸家の文書記  
録も、兵塵狼烟のおなし空に揚り、佛閣僧舎の經論聖教も、劫火魔風のひとつ  
道にうせ果て、萬牛か中に一毛を得かたきさまにて、舊例も先規も事にふ  
れて詳かなる事なければ、禁闕の深き軒には、むかし恐ふの露をかけ、京洛の  
荒し庵に、ふかき蓬のもとを戀つゝ、貴きも賤しきも、朝儀のひとへに見し世  
にかへり、武運の同しく末の世を保たれん事をのみ、神にも佛にも祈りうれ  
へて、月日を送るのみなるにや、

筆樞序 一條關 一條良 二曰ク、今行末もありかたくおほは侍は、應仁の今のみたれに

そ侍るへき、九重のうち、二條より北は、はつかに禁裏仙洞の外、神祇官太政官  
をばしめ、百官諸司の居所、一字も残らず、咸陽宮の烟となりて、姑蘇臺の露の  
みしけかりき、中畧 さしもいらかむをならへて、蜂の巢の如くありし東山西山  
の堂塔も、ことごとく燒はらはれ、打やふられ、今は一寸の青葉も残らず、八重  
の白雲跡をうつむはかりなり、中畧 こゝに桃の名におふ坊に住なれしつた

なき翁ありけり、此あたりも兩陣のさかひにて、つひに残るまじきよしをつけしらするものありければ、人なみくに蓬の門をうかれ出て、しはらく九條のほとりにやとりをかり、こしかたをかへり見れば、程なく一片の烟とたちのほりて、焼野の原と成にけり、一字の文庫は、瓦をふき土をぬりしとしにや、餘烟にのかれ侍りしかとも、そのあたりのしらなみとも、立こそりて、錢帛をさめおきたるとやおもひけん、時の程にうちやふられ、數百合のしみの柄を引散して、十餘代家につたへし和漢の書籍とも、一卷ものこらすなりにけり云々、

紳書ニ曰ク、後奈良院云々、此時公家以外の外に微々として、紫宸殿の御築地破れて、三條の橋の邊より、内侍所の御あかしの光見ぬしとなり云々、

老人雑話ニ、本能寺ノ變ヲ記シテ曰ク、本能寺に火つけてより、城介殿のおはします妙覺寺へ推寄す、其頃は京の町屋は處々に疎になりて障るものなければ、土居の上より分明に水色の旗、妙覺寺の方に來るを見ゆければ云々、  
豐臣記ニ曰ク、大永の頃より、至天正年中、家國分離し、朝威八荒に衰へ、武命四維に輕くなりて、公武の兩家、有名無實の爲體、末世とは云なから、かほとにあはしとは、誰かしらん、あさましかりける、

室町殿日記追加ニ、天正十八年の頃豊臣秀吉六十餘州、屬御手、四海靜謐に治りしかば、立以法印法橋紹巴をめて、潜に洛中の境を御覽せらるゝに、東は高倉よりあなたは、鴨川原也、遙に見渡し給へば、平々と東山になり續て耕作の地也、西は大宮よりあなたは、嵯峨太秦へ押通て田畠也、南北の際も、何とも堺もなく、只田舎の在郷の如し、幽齋を召して、花洛とは昔より言傳へぬれとも、京都の有様は在郷にひとし、北は何れより、南は是まてといふ、洛中洛外の堺を末代まで相定むへし、都の舊記をきかば、やと仰出されければ云々、  
義殘後覺ニ、松永京都の守護として、在家の地子諸役をあらためたる、名にしておふ都もふりはて、たうき栗ひをつかねてはしらにしたるわらや所々にありければ、たゞ在郷の如し、

此外京都衰頽ヲ記セシモノ少カラサントモ、枚擧ニ堪エサルヲ以テ之ヲ畧セリ、以上抄出スル所ニヨリテ之ヲ見ルニ、其衰頽荒殘ノ狀、蕭條寂寞ノ景、之ヲ眼前ニ見ルカ如シ、嗚呼桓武帝ノ大業、平安京ノ雄壯ナル、一ニ此ニ至ル、豈流涕セサルヘケンヤ、若シ織田氏ノ入京、豐臣氏ノ完聚ナカリセハ、何ヲ以テ京都ヲ再造シ、更ニ隆昌ニ復スルヲ得ンヤ、此荒廢ノ時ニ當リテ、群豪四方ニ雄峙シ、虎視眈々、其欲ヲ逞シクセント欲スルモ、終ニ天子ヲ他地ニ擁シ、以テ其私ヲ爲スモ

ノナク、京都ハ依然動搖スルコトナシ、亂窮リ數復シ、遂ニ再ヒ今日ノ盛ナルヲ見ルヲ得タリ、是レ實ニ我帝國ノ特質ニシテ、海外萬國ノ企及スルアタハサル所ナリ、然リト雖モ治ニ居テ亂ヲ忘レズ、滿ニ居テ損ヲ思フハ、益昌大ヲ致ス所以ナレハ、京都市民ハ今日ノ盛ニ處シテ、昔年衰頽ノ事ヲ忘ルヘカラサルナリ、  
皇室否運

京都ノ荒廢ニ繼キテ、記スヘキハ皇室ノ否運ナリ、皇室ノ否運、實ニ臣子ノ筆スルニ忍ヒサル所、然レトモ古來已ニ書籍ニ載セ口碑ニ傳ヘタレハ、之ヲ削リテ記サ、レハ却テ實ヲ失フノ恐アルヲ以テ、其事ノ信ニ近シト考フルモノヲ抄録シテ之ヲ記セリ、應仁大亂、海内鼎沸、幕威地ニ墜テ、群雄割據、朝廷御料モ武人ノ横奪スル所トナリ、貢賦入ラス、後花園、後土御門、後柏原、後奈良ノ數朝ニ至リテ極マレリ、宮闕頽破スルモ、修理スルモノナク、供御窮乏スルモ、供給スル者ナク、即位ノ禮、祭葬ノ儀モ、殆ト行フヘキノ資ナク、踐阼數十年ノ後、僅ニ他ノ資力ヲ藉リテ之ヲ行ヒ、大行ノ柩ヲ以テ密ニ之ヲ山野ニ葬ルニ至レリ、嗚呼神皇ノ尊キ朝廷ノ高キニシテ、一ニ此極ニ至ルカ、豈痛歎ノ至ナラスヤ、  
續應仁後記ニ曰ク、京都は大形空地となり、野原交りに荒果てたり、されども禁裏の朽残りし纒なる御所を、しつらひて、皇居ましましける云々、  
應仁亂ニハ皇居値

ニ免カ、然レトモ十餘年、空官トナリ、シテ以テ、其荒廢甚シ、文明十二年、遷幸アリ、

老人雜話ニ、信長の時は、禁中微々たりし事は、邊土の民屋に異ならず、築地なともなく、竹の垣に茨なと結付たるさまなり、老人兒童の時は、遊ひにゆきて、椽にて土なとねやし、破れたる簾を折ふし明けて見れば、人もなき體なり云々、

神書ニ恒齋曰ク、後奈良院宸筆の物、世に多きは理りにして、此時公家以外の微々にして、紫宸殿の御築地やふれて、三條の橋のほとりより、内侍所の御あかしの光見ぬしとかや、右近の橋のもとには、茶を煎てうるもの居てあきのふ、其例によりて、其茶うりし人の子孫、年に一たひ天子に茶を上るといふ、此時銀なと様の物に札つけて、たとへば百人一首伊勢物語なと云札つけて、御簾にゆひつけおくに、日をへてのちまぬれば、宸筆をそへて出されたりと云々、

安政内裏造營記ニ、道喜門建禮門ノ東ノ穴門ハ河端道喜ハ祖道喜應仁ノ後、官殿荒廢、供御吳服ナトモ、事缺クルコトヲ哀ミ、粽ヲ製シ朝々奉レリ、正親町帝ノ時、己カ財ヲ棄テ、工夫ヲ出シ、官殿ヲ修理ス、此時工夫ヲ出入セシムル爲ニ開ヲキシニヨリ、道喜門ト稱セラレシナリト、  
河端道喜ノ家ハ、今猶ホ下立賣局丸ニアリ、此因縁ニヨリ、古來内裏

御菓子ヲ調進セリト云フ

萬里小路惟房公記ニ、永祿元年云々、五月十四日禁裏築地地覆トモ少シ以陣座板令修補、

理性院殿助僧正記ニ、天文十年八月十二日、大風雨、前代未聞禁中所々顛倒、陣座、宜陽殿、廻廊、月華門、車寄、外様、番所、以下所々顛倒、散々次第、洛外都鄙在家山林顛倒、言語道斷次第也、

昨日は今日の物語に、むかし天下を治め給ふ人の御内に、とうちやくものともあり、禁中に参る、ちんをとろふといひて、やりの石つきをもちひて、御門をたよく、御つほぬ出あひ給へて、是はこれたいりさまとて、下々のたやすく参る所にてないを、何かたへもまぬれとおほせければ、此家とちんにとらせぬといふりくつあらは、ていしゆまかり出て、きつとことわり申せといふた云々、

親長卿記ニ、文明三年十二月二十六日、法皇後花卯刻許已ニ御命終ル、二十一日、今晚自舊院奉盜出聖壽寺世人號堅固密々不及何沙汰御板輿安羅寺御比丘尼御所ノ也云々

時慶郷記ニ、文祿二年正月六日正親町帝大葬ノ事ヲ記セシ條ニ、曉院をも盜

出し奉り、泉涌寺ニ成らしまゐらせ候、御忍と申北面さへ不付奉、公卿雲客は申に不及、誰の計とは知らねとも、太上天皇御在世の御時、世の御覺殊なりしに、今朝の御幸、彼寺僧一兩人供奉申す、金物もなき俄の張輿に参らせ奉り、事御痛敷云々、大内義隆記ニ、多々良朝臣義隆卿ハ、内裏ヲ尊ミ將軍ヲアカメ、毎年千餘貫ノ御調、其外唐物ノ類數ヲ盡シテ運送アリ、都ヨリハ公家ノ宣下ヲナシ玉フ云々、内裏モ公家モ門跡モオトロヘサセ玉ヒツ、適、殘ル住家ニハ、葎茂リテ門ヲトナ、軒ノ檜皮モ朽ハテ、立入ヘクモアラサレハ、松風計オトツレテ、琴琵琶ノ音モ絶ハテ、イツモ太守ハ、此事ヲ憐ミ玉フ心フカクイタハリ申サル、云々、

應仁記ニ、寛正六年後土御門院御即位ノ御時ハ、上薦車及二百兩、諸人歎曰、後白河法皇三十三間間堂供養ノ御時ハ、乗車八百兩ト聞傳ルニ、今纔減二百兩、是併陛下ノ御威風輕、而公家中ノ衰微知之、京童ノ口歌セシニ、今將無一兩ナリ終リヌ、鳳輿、玉輦、鹿車、網代車、大八葉、小八葉、菅車、檳榔子、絲毛車ナト云フ事ヲ、眼ニコソ不遮、名ヲ不聞世トナリヌル事ヲ思フニ、無情偃鼠ノ身ニモ、只袖ニ餘ルハ涙耳也云々、

三寶院滿濟日記ニ、應永卅四年八月十四日今朝官廳太政官廳ノ回祿、定付火敷、又

ハ乞食所行歟、旁不思議事也、爲朝家驚入者也、

豊臣記ニ、大永の頃より至天正年中、家國分離し、朝威八荒に衰へ、武命四維に輕く成りて、公武の兩家、有名無實の爲體、末世とは云なから、かほとに有へきとは、誰かしらん、あさましかりける云々、

此時ニ當リ王室式微如此其レ甚シ、今其事ヲ抄出スルモ實ニ痛慨ニ堪ヘサルモノアリ、若シ他邦ニ在リテ、如此勢ニ馴致センニハ、中興再造ノ功豈望ムヘケンヤ、然ルニ我國ニ於テハ、獨リ鼎ノ輕重ヲ問フ大慙ヲ生セサルノミナラス、此際ニ當リテモ、朝廷ノ尊嚴依然替ルコトナク、此時大内義隆七州ノ守護ヲ以テ西國ニ雄タリ、日華門ノ顛倒ヲ聞キ、資ヲ獻シテ之ヲ修ム、其意太宰大貳トナリテ、西國ヲ經略セントス、然ルニ後奈良帝前例ニ徵シ、巳ニ下セシ奉書ヲ收還シ、以テ其令ヲ中止セラル、帝ノ宸記ニ、大内太宰大貳之事、旁以不可然之、昨日下午ス所ノ女房奉書取返ス事也トアリ、此式微衰頽ノ時ニ當リ、七國ノ豪雄カ資ヲ獻シ、以テ宮闕ヲ修補セルモ、猶破格ノ叙用ヲ許サレス、而シテ大内亦遂ニ之ヲ要スルアタハス、朝廷ノ尊キ名爵ノ重キ、果シテ如何ソヤ、夫レ名器爵位ハ、人主ノ天下ヲ駕馭スル所以ナリ、若シ之ヲ失スルトキハ、何ヲ以テ王室ノ尊嚴ヲ保タシヤ、謹テ案スルニ、天祖業ヲ創メ、列聖相承ケ、君臣ノ義上下ノ分、秩然不紊、數

千百年ノ久シキ、民心ニ浸染固結シ、國體益尊ク、皇統愈遠シ、天地晦蒙、乾坤否塞ノ時ト雖モ、一點ノ靈光曾テ消滅セス、猶太陽ノ陰雲深霧ノ爲メ、其光ヲ失フト雖モ、其光輝ハ九天ノ上ニ耀瑩スルカ如シ、雲霧一タヒ披ケハ、則テ赫々タル靈光ヲ放テ、天地萬物忽テ其觀ヲ改ム、故ニ皇天禍ヲ悔ユレハ、中興ノ盛運忽テ開ケ、遂ニ古來未曾有ノ隆昌ヲ仰クヲ得タリ、是レ我國體ノ尊キ所以ニシテ實ニ萬國ニ卓越スル所ナリ、

管領爭權

足利氏ノ重職ヲ管領ト曰フ、細川、斯波、畠山、三氏交々之ニ補ス、三管領ト稱ス、紀傳、文安、中御番帳、將軍義政ノ時、斯波義廉族義敏ト爭ヒ、畠山政長族義就ト相鬪キ、遂ニ應仁ノ亂ヲ釀成ス、長祿記、應仁記、是ヨリ後二氏振ハス、獨リ細川氏相襲キテ管領タリ、足利季世記、將軍義種ノ時ニ及ヒ、細川政元畠山義豐ト謀ヲ合セ、擊テ政長ヲ殺シ、義種ヲ逐ヒ、義澄ヲ迎ヘテ主トナス、政元子ナシ、關白政基ノ子澄之ヲ以テ嗣ト爲ス、既ニシテ族之勝ノ子澄元ヲ養ヒ、足利季世記、政元記、尋テ又族政春ノ子高國ヲ養フ、細川澄元ノ傳三好之長ナルモノ才略アリ、藥師寺長忠、香西元長等之ヲ忌ム、時ニ澄元モ亦管領政元ヲ怨ム、乃テ元長等ト謀リテ之ヲ弑ス、足利季世記、政元記、之長澄元ヲ奉シ、畠山義英ノ子等ト攻メテ澄之元長等ヲ殺ス、澄元將軍義澄ノ管領ト爲

リ、之長ノ驕横ヲ制スル能ハス人心離叛ス是ニ於テ澄之ノ黨奈良元吉内藤貞正等細川高國ヲ擁シ京師ヲ攻ム澄元之長敗走シ義澄モ亦近江ニ奔ル高國自ヲ管領ト爲リ前將軍義植ヲ迎フ大内義興畠山尙順政長ノ子等來リ援ケ兵勢大ニ振フ八年澄元之長四國ノ兵ヲ發ス赤松義村モ亦播磨ノ兵ヲ率井テ京師ニ寇ス高國義興義植ヲ奉シテ丹波ニ奔ル尋テ兵ヲ旋シテ洛北船岡山ヲ襲ヒ澄元ヲ奔ラシ政賢ヲ殺ス義植京師ニ歸リ義興ヲ以テ管領ト爲ス十五年義興周防ニ還リ高國之ニ代ル十七年二月澄元之長復々四國ノ兵ヲ率井テ京師ヲ攻ム義植高國近江ニ奔ル五月高國諸國ノ軍ヲ以テ京師ニ入り之長ヲ曇華院ニ圍テ之ヲ殺ス澄元逃レテ阿波ニ歸リ尋テ卒ス是ヨリ權勢獨リ高國ニ歸シ專横殆ト將府ヲ凌ク義植之ヲ厭ヒ畠山某ヲ以テ管領タラシメントス高國之ヲ怨ミ大永元年三月義植ヲ淡路ニ追ヒ先將軍義澄ノ子義晴ヲ迎ヘテ之ヲ立ツ六年高國老臣香西四郎左衛門ヲ殺ス七年二月香西ノ族波多野某柳本某等兵ヲ丹波ニ舉ケ澄元ノ黨ト謀ヲ合セ足利季世記京師ヲ攻ム義晴六條ニ屯シ高國妙本寺ニ在リ諸將ヲ鳥羽鶴森ニ遣リ武田元光西七條泉乘寺ニ陣シテ之ヲ拒カシム元光戰利アラヌ諸軍大敗シ義晴高國近江ニ奔リ救ヲ朝倉六角二氏ニ乞フ二氏三萬餘騎ヲ以テ京師ニ入り進テ東寺西七條唐橋鳥羽鶴森ニ至ル細川晴

元澄元三好元長之長畠山義宣義英波多野柳本等兵ヲ西院五條六條七條法花堂等ニ分ケテ之ヲ拒キ既ニシテ和ヲ講ス享祿元年高國晴元ト協ハス京師ヲ去ル將軍義晴モ亦近江ニ走ル三年高國赤松村宗ノ播備作三國ノ兵ヲ率井天王寺ニ至ル晴元擊テ高國ヲ殺ス足利季世記後義晴京師ニ歸リ晴元管領ト爲ル足利將軍家譜天文十二年高國ノ黨玉井某細川尹賢ノ子氏綱ヲ擁シテ兵ヲ舉ク十五年氏綱畠山政國晴元ヲ圖ル晴元氏綱政國ヲ伐ツテ利アラヌ乃々四國ノ兵ヲ召ス十河一存等來會ス十六年將軍義晴晴元ノ專恣ヲ惡ミ畠山政國ト謀テ之ヲ除ントス是ニ於テ北白川ニ城ク晴元長慶兵三萬ヲ以テ東山ニ陣シ火ヲ吉田淨土寺眞如堂鹿谷ニ放ツ既ニシテ攝津ノ兵起リ引テ還ル七月晴元京師ニ入り相國寺ニ陣シ六角定頼ノ兵ト北白川ヲ圍テ之ヲ陷ル義晴坂本ニ奔ル尋テ和シテ京師ニ還ル長慶族宗三ト善カラス晴元宗三ヲ助ク長慶因テ氏綱ニ通シ宗三ヲ殺シ晴元ヲ逐フ晴元逃レテ京師ニ入り義晴父子ヲ奉シテ近江ニ走ル是年義晴薨ス廿一年正月晴元氏綱ト成ヲ行ヒ將軍義輝京師ニ還リ氏綱ヲ管領ニ補ス晴元子信良ヲ質トシ髮ヲ剃リテ逃遁ス廿二年七月義輝晴元ヲ憫ミ之ヲ召還ス晴元復々其徒ヲ聚メ義輝ヲ奉シテ三好氏ヲ討ツ衆寡敵セス近江ニ走ル永祿元年十一月義輝長慶ト和シテ京師ニ歸ル四年晴元長慶ト



和シ攝津富田ニ老ス、六年晴元卒ス、八年氏綱亦淀城ニ卒シ、細川氏はニ至テ亡  
ヒ、政權遂ニ三好氏ニ歸ス、足利季世記、二川分流記、

足利氏衰亡

足利氏ノ衰フルヤ久シ、初メ將軍義熙薨ス、嗣ナシ、義親ノ子義植職ヲ繼ク、管領  
細川政元之ヲ廢シ、義植ノ從弟義澄ヲ立ツ、尋テ大内義興等義植ヲ奉シテ京師  
ニ入ル、義澄薨ス、其子義晴亦義植ト争フ、義澄薨シテ後、細川勝元義晴ノ弟義維  
ヲ奉シテ之ヲ立テント欲ス、事就ラズ、足利季世記、足利將軍家譜、應仁亂後海内紛擾、諸將各  
地ニ割據シ、弱肉強食復々制スヘカラス、京畿ハ細川畠山諸氏兵ヲ構ヘ、義植義  
晴等爲ニ左右セラレ、徒ニ空位ヲ保テ、東西ニ流寓ス、幕府ノ衰頽此ニ至リテ極  
ル、義晴ノ子義輝繼立ニ及ヒテハ、細川氏ノ臣三好氏威權最モ熾シナリ、足利季世記、足利將軍家譜、  
天文廿一年、三好長慶其主細川氏綱ヲ奉シテ上洛シ、將軍義輝ニ謁シ、氏  
綱ヲ立テ、管領ト爲シ、陰ニ政權ヲ収ム、永祿三年、長慶義輝ノ命ヲ以テ相伴衆  
ニ列シ、又義輝ニ扈從シテ入朝シ、修理大夫ニ任セララル、權勢益振フ、其臣松永久  
秀彈正大弼ニ任ス、久秀長ク京師ニ留守シ、四年長慶ノ長子義興ニ從ヒ、義輝ニ  
謁シ、共ニ桐章ヲ賜ハル、六年義興俄ニ卒ス、蓋シ久秀鳩殺スル所ト云フ、長慶哀  
悼殆ト政務ヲ廢ス、七年七月長慶卒ス、次子義繼尙幼、久秀益暴橫ナリ、足利季世記、益町殿

日將軍義輝之ヲ惡ミ、密ニ之ヲ除カンコトヲ謀ル、日本政教史、將軍家譜、時ニ足利義維ノ

子義榮阿波ニ在リ、京師ニ入ランコトヲ圖リ、久秀及ヒ三好長縁三好政康ニ説

ク、久秀等許諾シ、八年五月十九日、兵ヲ率井テ洛東清水ニ詣ルト聲言シ、直ニ義

輝武衛陣第ヲ襲フ、第八烏丸室町勘解由小路春日小路ノ間ニアリ、本ト斯波氏

ノ邸ナリ、義輝修繕シテ幕府トス、土木未タ終ラズ、此日未明久秀ハ烏丸春日ヨ

リ、十河一存ハ室町大門大手口ヨリ、今大門町三好修理大夫ハ三本木、今東洞院

リ、町ア三好岩笑齋ハ腹帶地藏、今ノ府前ヨリ岩成主税介ハ櫻馬場ヨリ、今烏丸ノ

リ、鼓噪シテ四面圍ミ攻ム、事不意ニ起リ、一第驚擾ス、一色淡路守有馬源次郎以

下ノ士防戰甚タ力ム、衆寡敵セス、義輝親ヲ近臣ヲ從ヘ禦キ戰フ、力竭キ火ヲ第

ニ縱テ自殺ス、其母慶壽院以下皆火中ニ自刃ス、足利季世記、三川分流記、義輝二弟覺慶周髡

アリ、覺慶ハ南都一乘院ノ門主ニシテ、周髡ハ北山鹿苑寺ノ寺主タリ、久秀人ヲ

シテ周髡ヲ欺キ、之ヲ惠比須川ニ殺ス、覺慶ハ免レテ近江ニ奔リ、還俗シテ義昭

ト改メ、佐々木義賢、武田義統、朝倉義景ニ依リ事ヲ謀ル、果サズ、遂ニ織田信長ニ

頼リ、京師ニ入ル、此時永祿十一年九月ナリ、足利季世記、信長記、久秀既ニ義輝ヲ弑シ、稍ク

長縁政康、康長等ト權ヲ争フ、三好義次、長縁等ニ黨ス、是時義榮亦入テ職ヲ繼キ、  
長縁政康ヲ寵ス、義次心平ナラス、窃ニ久秀ニ通シ、争亂止マス、京畿大ニ亂ル、會

將軍義榮薨ス、義繼久秀等信長ノ風ヲ望テ迎ヘ降ル、義昭假リニ細川氏綱ノ舊邸ニ館ス、十月詔シテ義昭ヲ以テ征夷大將軍ニ任シ、信長ヲ從五位下彈正忠ニ叙ス、信長義昭ヲ本國寺ニ移シ、兵ヲ引キテ岐阜ニ還ル、十二年正月、三好政康等虛ニ乘シ、兵一萬ヲ以テ東福寺ニ屯シ、進テ本國寺ヲ圍ム、細川藤孝三淵藤英等力戰シテ之ヲ拒ク、三好義繼及伊丹池田二氏來リ援ケ、激戰三日、之ヲ卻ク、信長變ヲ聞キ馳セ至ル、二條第ヲ營ミ、義昭ヲ之ニ移ス、足利季世記元龜三年義昭織田氏ノ威勢ヲ嫉ミ、窮ニ之ヲ除カンコトヲ圖リ、檄ヲ諸國ニ傳ヘ以テ兵ヲ起サシム、天正元年、義昭三好義繼和田惟政ヲ執權ト爲シ、軍糧ヲ遠近ニ課シ、石山堅田ニ城キテ、大ニ守備ヲ治ム、三淵藤秀長岡藤孝諫ムレトモ聽カス、信長記二月信長柴田勝家丹羽長秀等ヲシテ兵一萬餘ヲ率井西上セシム、石山堅田乃テ陷ル、信長自ラ京ニ入り、火ヲ所在ニ放テ、知恩院ニ陣ス、四月遂ニ義昭ヲ二條ノ第ニ圍ム、義昭大ニ驚キ、乃テ和ヲ乞フ、信長之ヲ諾シ、退キテ近江守山ニ至リ、丹羽長秀ヲ戒メ、命シテ巨船ヲ造リ以テ之カ備ヲ爲ス、信長記七月、義昭復タ兵ヲ興シ、槇嶋城ニ移リ、以テ戰備ヲ爲ス、七月信長大舉シテ京師ニ入り、妙覺寺ニ陣シ、直ニ二條第ヲ攻ム、三淵藤英之ニ死ス、信長諸軍ヲ率井、宇治川ヲ渡リ、宇治町ヲ燒キ、直ニ中島ニ逼ル、松井康之千餘人ヲ以テ城ヲ出テ奮戰シテ之ニ死ス、義昭茫然

爲ス所ヲ知ラス、梶川正教義昭ニ勸メ和ヲ請ヒ、速ニ城ヲ出テシム、義昭之ニ從フ、正教乃テ信長ニ謁シ、義昭ノ意ヲ告ク、信長之ヲ諾ス、義昭遂ニ近臣子女ヲ率井テ城ヲ出テ、普賢寺、山城縣普賢寺ニ入ル、此ニ於テ足利氏ノ幕府亡テ、建武二年尊氏霸業ヲ初メシヨリ、是ニ至ルマテ十五世二百三十八年ヲ經タリ、足利將軍家譜

### 尾州密勅

應仁以降、皇室式微、正親町帝ノ時ニ至リテ極マレリ、御領ハ武人ノ橫奪スル所トナリテ、供御殆ト給セス、皇居ハ敗壞スルモ、修繕スル者ナシ、是時ニ當リ立入左京亮宗繼ト云フ者アリ、多年皇室ノ財務ヲ掌ル、常ニ朝廷ノ衰微ヲ傷ミ、數私財ヲ以テ供御ノ缺乏ヲ補フ、竊ニ以爲ヘラク天下ノ喪亂己ニ久シ、蓋世ノ英雄ヲ得テ之ニ托スルニ非サレハ、皇室ノ衰頽挽回スヘカラス、今ヤ群雄國郡ニ割據シ、日ニ干戈ヲ事トス、然レトモ其志皆寸攘尺取、以テ銖兩ヲ爭フニ過キス、獨リ尾張國主織田信長雄才大略アリ、且ツ心ヲ皇室ニ存ス、是レ倚賴スヘシト、一日大納言藤原惟房ニ詣リ密ニ說テ曰ク、今ヤ朝廷ノ衰微極マレリ、天下ノ英雄ニ非サレハ、誰カ能ク之ヲ恢復セン、尾張ニ織田信長アリ、少歳ニシテ父ヲ喪ヒシモ、家聲ヲ墜サス、嚮ニ今川義元駿遠參ノ兵ヲ擧ケテ來リ攻ムルヤ、信長寡兵ヲ以テ之ヲ邀ヘ、其麾下ヲ襲ヒ、直ニ義元ヲ斬リ、武威四隣ニ震フ、思フニ天下

ノ大事斯人ニ非サレハ托スヘキ者ナシ請フ奏シテ密勅ヲ信長ニ賜ヒ委スルニ皇室恢復ノ事ヲ以テセヨ惟房曰ク是レ大事ナリ若シ三好松永等之ヲ聞カハ汝必ス不測ノ禍ヲ被ラン請フ再ヒ言フナカレ宗繼曰ク天道靈アラハ此事必ス行ハレン假令事敗レ死スト雖トモ皇室ノ爲ニセハ固ヨリ本懐ナリト惟房乃チ之ヲ聽ク時ニ惟房ノ妹房子宮ニ仕フ上臈局ト稱ス寵アリ皇子ヲ産ム誠仁親王宗繼乃チ之カ計ヲ立テ、曰ク苟モ之ヲ密ニセハ事甚々難カラス上臈局沐浴ノ日ヲ以テ密ニ之ヲ上奏セシメ局奉書ヲ作り公親カラ其文ヲ撰ヘハ何ソ外人ノ知ルコトヲ恐レン近江ニ磯貝久次ト云フ者アリ臣ト相知ル是レ使フヘシト惟房乃チ密ニ之ヲ奏ス帝大ニ喜ヒ密ニ内侍所ニ祈リ親カラ圖ヲ引キ成否ヲトス吉ナリ依テ惟房ニ命シ其事ヲ行ハシム此時ニ當リ松永等防警頗ル密ニシテ公然勅使ヲ發スルヲ得ス乃チ主上靈夢ニ感シ幣ヲ熱田神宮ニ奉スルニ托シ以テ密ニ使ヲ下サントス惟房即チ宗繼及ヒ久次ヲ召シ織田氏ニ紹介スヘキ者ヲ問フ久次對ヘテ曰ク尾張ニ道家某アリ光明峰寺殿ヨリ以來美濃尾張三河ノ調物ヲ掌トリ公ノ名ヲ賜ヒ以テ氏トナス世尾張守ニ任セラル後チ家衰ヘ某ニ及ヒ信長ニ事フ此人臣ト深ク相知ルト惟房大ニ喜フ是ニ於テ永祿五年十月願看記永祿七年ト爲ス然レトモ諸書ナ案スルニ五年ヲ以テ正トスヘキ立入宗繼ヲ以テ勅使

トシ磯貝久次ヲ嚮導トシ尾張ニ遣ハシ幣ヲ熱田祠ニ用井ルニ託シ織田信長ニ密勅ヲ傳ヘ托スルニ三事ヲ以テス是月二十五日宗繼等京師ヲ發シ二十八日清洲ニ至リ道家ヲ訪フ道家適馬ヲ浴ス久次ノ來ルヲ見大ニ喜フ久次密ニ告クルニ其事ヲ以テス道家乃チ宗繼ヲ迎ヘ優待シ且ツ曰ク主公適出テ獵ス歸途來リ過キン公等暫ク之ヲ待テト即チ浴ヲ設ケ饌ヲ調ヘ以テ信長ノ歸ヲ待ツ薄暮信長果シテ道家ノ家ヲ過キ馬ニ騎リ門ニ入り直チニ浴ニ就ク道家天使ノ家ニ在ルヲ告ク信長驚喜シ即チ新衣ヲ求メ道家及ヒ村井貞勝ヲシテ天使ヲ引接セシム事倉卒ニ出ツ二人禮ニ嫺ヒ周旋具ニ至ル信長乃チ盛服儀ヲ整ヘ以テ天使ニ謁ス天使名香及道服ヲ賜フ貞勝進ミテ綸旨ヲ捧讀ス其條ニ曰ク轉退公家相續ノ事御領所ノ事御修理ノ事信長再拜稽首答ヘテ曰ク今ヤ海内雄藩少シトセス然ルニ特ニ宣命ヲ小邦ノ臣信長ニ賜フ何ノ榮カ之ニ加ヘン臣冀クハ皇上ノ威靈ヲ假リ先ツ濃江二國ヲ平ラケ然ル後チ京師ニ入り謹ミテ闕下ニ伏シ以テ命ノ辱キヲ拜セント獻酬禮畢リ信長宗繼ニ謂テ曰ク余貴客ト俱ニ痛飲快食セント欲ス請フ便服安坐シテ醉ヲ取ラント乃チ給旨ヲ收メ更ニ厨ニ入りテ道家ノ妻ヲ呼ヒ其臣森可成柴田勝家丹羽長秀瀧川一益羽柴秀吉ヲ召サシム是ニ於テ主客團欒觴ヲ飛ハシ歡ヲ罄ス既ニシテ宗

繼等辭シテ曰ク、詔アリ、將ニ熱田祠ニ詣ラントス、信長曰ク、請フ暫ク安息セヨ、將ニ辰辰ヲ擇ヒ、道家貞勝ヲシテ嚮導セシメン、又曰ク、明日家臣ヲシテ舟ヲ城濠ニ浮ヘシメ、以テ公等ヲ慰メン、余ハ別ニ鷹ヲ放テ鳥ヲ獲テ、晚餐ヲ此ニ享セント、明日味爽、信長侍臣若干ヲ從ヘ野ニ出ツ、道家貞勝等數人宗繼久次ヲ迎ヘ、舟遊ヲ爲ス、道家綱ヲ下シ、一益秀吉等棹ヲ操ル、既ニシテ相共ニ樂ヲ舟中ニ張リ、各、鼓笛ヲ弄ス、聲中流ニ沸ク、會、信長還リテ亦舟ニ上ル、道家戯レテ曰ク、何者ソ我閑遊ヲ妨クト、信長笑テ曰ク、閑遊者樂ヲ張リ喧嘩スルハ何ソヤ、又曰ク、下物ハ如何ン、道家曰ク、未タ獲ル所ナシ、信長哄笑シ自ラ鼓ヲ拍テ歌ヲ唱フ、既ニシテ衆咸テ道家ノ家ニ至リ、更ニ宴ヲ張ル、信長宗繼ニ語テ曰ク、十一月朔ハ佳辰ナリ、宜シク熱田ニ詣ルヘシ、余亦岩倉尾張四郡ノ領主ヲ攻メ、以テ公等ニ示サント、是日會、雨アリ、信長竟ニ師ヲ出サス、宗繼歸ルニ及、信長贈ルニ物ヲ以テス、二日宗繼清洲ヲ發シ、伊勢ヲ經テ京師ニ還リ、密ニ其事ヲ奏ス、天皇大ニ喜ヒ、深ク其忠ヲ賞ス、永祿十一年、信長入京ニ及ヒ、勅シテ宗繼ヲ遣ハシ、蹴上ニ迎勞セシム、事ハ別章ニ詳ナリ、道深祖看記、立入類直記、立入文書、織田眞記是レ尾州密勅ノ概略トス、此ヨリ數年ヲ出テス、勅旨ノ事乃テ擧ル、此事ハ世傳甚少ク、其詳ヲ知ルニ由ナシ、然レトモ王室再造、撥亂反正ノ基ナルヲ以テ、特ニ之ヲ記セリ、要スルニ此事立

入宗繼ノ忠誠ト盡力トナカリセハ、誰カ敢テ此危難ノ間ニ立テ、其身ヲ挺テ其財ヲ棄テ、以テ此大計ヲ立テシヤ、宗庶ノ靈ニ賴ルト雖トモ、抑、亦立入氏ノ力ナリ、其家今猶在リ、當時古文書一筐ヲ藏ス、其中國史ノ闕ヲ補フヘキモノアリ、先年其舊勳ヲ追賞シ、金數百圓ヲ賜ヘリ、然レトモ子孫零丁哀ムヘシト云フ、

織田氏勤王

織田信長既ニ朝廷再興ノ密勅ヲ受ケ、將ニ師ヲ整ヘテ上洛シ、以テ朝命ニ答フル所アラント欲ス、初メ信長ノ父信秀勇武智謀アリ、兵ヲ勵シ國ヲ富シ、心ヲ王室ニ存ス、天文中、伊勢神宮ノ荒廢ヲ歎シ、費ヲ獻シテ之ヲ修ム、又銀四千貫ヲ獻シ、皇居ノ墻垣ヲ修理ス、朝廷之ヲ嘉シ、望ヲ織田氏ニ屬ス、信長遺業ヲ紹キ、夙ニ大志アリ、常ニ天下ヲ經略セント欲ス、是時足利義昭、松永久秀ノ亂ヲ避ケ、江越ノ間ニ在リ、佐々木朝倉等ニ依リテ、恢復ヲ謀ル、應スルモノナシ、遂ニ信長ニ托スルニ其事ヲ以テス、信長已ニ今川氏ニ克テ、齋藤氏ヲ滅シ、勢益盛ナリ、乃テ義昭ヲ奉シ、大ニ爲ス所アラント欲シ、迎ヘテ美濃ニ居ラシム、先ツ東顧ノ憂ヲ去リ、以テ西上ヲ謀ラント欲ス、其女ヲ以テ武田勝頼ニ嫁シ、又其妹ヲ淺井長政ニ嫁シ、以テ六角氏ノ勢ヲ殺キ、日夜西上ノ策ヲ講ス、永祿十一年九月十二日、大ニ兵ヲ起シ、近江ニ入り、使ヲ遣ハシテ佐々木承禎ヲ招ク、應セス、和田山等十七

處ニ寨ヲ築キ備ヲ爲ス、信長箕作和田山等ヲ取ル、諸城風ヲ望テ潰ユ、承禎父子  
宵遁ル、信長進テ三井寺ニ次シ、義昭ヲ美濃ニ迎ヘ、二十六日、軍ヲ整ヘ逢坂ヨリ  
京師ニ入ル、天皇萬里小路惟房ヲシテ立入宗繼ト粟田口ニ迎勞セシメ、賜フニ  
御饌ヲ以テス、信長再拜其忝ヲ謝シ、服スル所ノ道服ヲ指シ、宗繼ニ謂テ曰ク、是  
往年賜ヒシ所ナリト、兵ヲ率井テ入テ東寺ニ陣シ、義昭清水寺ニ陣ス、松永久秀、  
岩成左通青龍寺ニ據ル、廿八日、義昭東寺ニ入り、軍ヲ西岡ニ進ム、久秀左通降ヲ  
乞フ、廿九日、信長東福寺ニ移ル、初メ京人信長ノ強武ヲ聞キ、其三井寺ニ次スル  
ヤ、人心騷擾荷擔シテ立ツ、是ニ至リ、諸軍ヲ嚴戒シ、士民ヲ撫愛ス、秋毫犯スナシ、  
衆皆安堵ス、十月十八日、詔シテ義昭ヲ征夷大將軍參議左近衛中將ニ任シ、從四  
位下ニ叙ス、信長ヲ左兵衛亮ニ任ス、辭シテ受ケス、從五位下ニ叙ス、廿三日、義昭  
大ニ猿樂ヲ設ケ、信長ヲ饗セントス、信長四方未タ平カサルヲ以テ、辭シテ其半  
ヲ減ス、義昭深ク信長ノ功ヲ喜ヒ、管領タラシメント欲ス、朝旨擬スルニ副將軍  
ヲ以テス、皆辭シテ受ケス、義昭信長ノ功大ニシテ賞薄キヲ病ミ、射カラ書ヲ作  
リ、其大勳ヲ稱シ、之ヲ呼フニ御父ヲ以テシ、之ヲ管領ノ上ニ次レ、且ツ重壽桐章  
ヲ授ケ、又攝津和泉近江等ニテ封ヲ加ヘント欲ス、又辭シテ受ケス、請フテ所々  
ニ代官ヲ置キ、且關稅ヲ除キ、諸政ヲ修メ、辭シテ國ニ歸ル、十二年、久秀左通京師

ニ入り、遽カニ義昭ヲ本國寺ニ圍ム、信長警ヲ聞キ馳セ至ル、賊散走シ、久秀左通  
等復降ル、乃チ武衛陣故邸ヲ經營シ、躬親ヲ工事ヲ監視シ、之ヲ義昭ニ奉ス、此ニ  
於テ京師稍、定マル、信長曩ニ三條ノ密勅ヲ奉シ、曰ニ京師ヲ定ム、首トシテ其實  
ヲ舉ント欲シ、日乘上人村井貞勝ニ命シ、其事ヲ掌ラシム、先ツ浴中ノ市民ヲシ  
テ、皇居ノ築地ヲ造ラシメ、更ニ皇宮ヲ造營ス、三年ヲ經テ其功ヲ成ス、紫宸殿、清  
涼殿、內侍所、昭陽舍、其他諸局ニ至ルマテ之ヲ造畢セリ、又供御ノ地ヲ附スルモ、  
其不納アラシコトヲ恐レ、米ヲ上下京市民ニ貸シ、其利米ヲ朝廷ニ納メシメ、以  
テ供御ニ充ツ、又流離ノ公卿ヲ復シ、爲ニ其家ヲ立ツ、密勅ノ三事皆行ハル、且京  
都ノ荒廢ヲ修理シ、人民ノ離散ヲ招徠シ、地子ヲ免シ、賦課ヲ薄クシ、其私宅ヲ造  
畢スルマテハ、人足ヲ免除ス、初メ義昭信長ノ力ニ倚リ、將軍ト爲リ、已ニシテ其  
恩ニ畔キ、之ヲ伐ツヲ謀ル、信長屢之ヲ諫ム、聽カス、遂ニ兵ヲ構ヘ、槇島ニ據ル、信  
長急ニ之ヲ攻ム、義昭降ル、命シテ之ヲ河内ニ放ツ、遂ニ足利氏ニ代リ、大權ヲ執  
ル、朝廷其功ヲ嘉シ、累遷シテ右大臣右近衛大將ニ拜シ、正二位ニ叙ス、信長朝廷  
禮樂ノ廢闕ヲ憂ヒ、故老ニ諮ヒ、遺譜ヲ求メ、資ヲ獻シ、之ヲ復ス、二條新殿ヲ修理  
シ、既ニ成ル、敢テ之ニ居ラス、以テ誠仁親王ニ奉ス、又伊勢皇太神宮石清水神宮  
ヲ修ム、兵亂以來、神宮修理典故ヲ舉ケサルモノ、百數十年、此ニ及ヒ、信長奏シテ

其舊式ニ復セリ、應仁大亂以來、京都荒廢、市坊蕭條、皇室式微、宮闕廢頽、殆ト風雨  
ヲ掩ハサルノ極ニ至リシカ、此ニ及ヒ京都完聚、再ヒ市坊ヲ爲シ、宮闕造營、供御  
備ヘアリ、公卿舊ニ復シ、典禮漸ク舉リ、京都ノ觀、朝廷ノ威儀ニ至リ初メテ觀ル  
ヘシ、是皆織田公ノ力ナリ、公卿補任、僧長記、總見記、多門院日記、外宮引付文書、織田  
眞記、道家祖君記、立入頼直記、立入文書、京都市古文書

附記

此時信長皇居ノ側ニ大馬寄ヲ爲シ、其武ヲ輝セシ事アリ、西教史ニ其事ヲ記  
スル最モ詳カナリ、其略ニ曰ク、演武場開場ノ日ニ當リ、衆諸侯此ニ會ス、前行  
者七百ノ騎兵、各從者ヲ俱シ、盡ク一樣ノ衣ヲ著ス、裝飾ノ美名狀スヘカラス、  
次ニ進ムモノハ信長ノ三子ニシテ、其容貌ノ尊大ナルト、衣服ノ華麗ナルト、  
共ニ衆ニ超絶セリ、其衣服ハ絹ニシテ、金銀ノ繡ヲ以テ飾リ、眞珠及ヒ其他ノ  
寶石ヲ點綴シタルモノナリ、馬具ノ裝飾モ亦此ノ如ク、而シテ衆多ノ歩兵ヲ  
率井タリ、此三公子ノ場ニ入ルヤ、信長ニ次テ進行シ、常ニ喇叭ヲ吹キ、其前ニ  
一隊ノ歩兵ヲ進メタリ、衆諸侯信長ヲ認視シ、其喝采ノ聲、田野ニ響キタリ、信  
長ノ衣服ハ支那ノ精巧ナル繡工ノ製造ニシテ、寶石ヲ以テ點綴シ、肩飾ト馬  
具ノ華麗ナルコト、實ニ名狀スヘカラスナルナリ、信長ハ其容貌尊大ニシテ、騎

馬ニ巧ナリ、故ニ衆人皆信長ニ注目シタリ、信長ハ微笑ヲ含ムト雖モ其勇氣  
及ヒ位階ノ尊キヲ表スル所ノ傲然タル體面ヲ失ハス、部下ノ騎兵千人ヲ率  
井、其裝飾亦各美麗ヲ極メタリ、信長ノ場ニ入ルヤ、茲ニ會スル所ノ衆人ハ、各  
其位次ニ就テ備ヲ立テ、尋テ騎士或ハ二人或ハ三人各馬ヲ驅リテ其技ヲ盡  
シ競フタリ、尋テ三公子出テ、其馬術ノ巧ナルト、馳驅ノ迅速ナルト、就中劍ヲ  
揮ヒ槍ヲ把リ、其他ノ諸術皆衆人ヲ驚カシメタリ、最後ニ信長ハ悍馬ニ騎リ、  
先ツ力ヲ極メテ之ヲ驅リ、以テ場中ニ縱横シ、劍ヲ揮ヒ槍ヲ把リ、的ヲ睨シテ  
槍ヲ投スルニ、正鵠ヲ失ハス、其技ノ精巧ナルヲ見テ、衆人喝采ノ聲、天地ヲ震  
動セントス、此ノ演技ハ午後四時ニ至レリ、此日此式ニ會セルモノハ、十三萬  
餘人ニ至ル、然レトモ一モ紛紜混亂ノコトナクシテ畢レリトアリ、國史ノ記  
スル所ヨリモ甚タ詳密ナルヲ以テ、歷々當日ノ實況ヲ見ルカ如キノ觀アリ、  
因テ抄出シテ此ニ附ス、

此時ニ當リ信長用井シ所ノ印章、京都ノ社寺ニ藏スル所ノ古文書ニ押セシ  
モノ數種アリ、永祿十一年入京ノ時ヨリ、天正ノ初年ニ及ヒ數様アリ、時ニ改  
刻セシモノ、如シ、其印文ハ天下布武ノ四字ナリ、此時僅ニ五位ノ彈正忠ニ  
過キス、然ルニ其志天下ニ在ルモノノ如シ、故ニ一舉シテ旗ヲ京師ニ樹テ、撥

亂反正ノ基ヲ開ク、此印文ヲ見テモ、以テ其大志雄略ヲ想見スヘキナリ、  
本能寺之變

天正十年六月二日、明智光秀兵ヲ舉ケ、其主右大臣織田信長ヲ京都本能寺ニ弑シ、世子中將信忠ニ及フ、是ヨリ先信長已ニ足利氏ニ代リ、政ヲ京師ニナス、光秀ノ才ヲ愛シ、重ク之ヲ任用ス、信長人ヲ待スルニ恩少ナク、傲慢ニシテ慘酷ナリ、光秀爲ニ怨望ヲ抱キ、自ラ安ンセサルコト久シ、且其爲人權譎ニシテ大志アリ、時機ニ投シ爲ス所アラント欲ス、是歲信長武田勝頼ヲ滅シ、西毛利氏ヲ伐ツ、徳川家康亦來リ通ス、信長先ツ信忠家康ヲシテ入浴セシメ、五月廿九日、近臣數十人ヲ從ヘ、微行京都ニ入り、四條坊門ノ本能寺ニ館シ、信忠妙覺寺ニ館ス、初メ信長已ニ皇宮ヲ再興シ、又二條新御所ヲ造營シ、之ヲ誠仁親王ニ奉シ自ラ居ラス、故ヲ以テ其入京スル多ク巨利ヲ以テ陣營トス、此ニ及ヒ本能寺ニ館シ、宿衛最モ單微ナリ、此ヨリ先キ光秀丹波ニ封セラレ、新ニ周山ニ築キ、五月廿六日其封ニ就ク、將ニ命ヲ奉シ援軍ニ將トシ備中ニ赴カントス、其廿七日愛宕福ニ詣リ祈ル所アリ、廿八日福頭ニ於テ百韻連歌ヲ作ル、其句ニ曰ク、時は今天か下し、五月かな、人竊ニ之ヲ恠シム、六月一日、公卿本能寺ニ信長ノ入京ヲ賀ス、信長之ヲ饗シ深更ニ及フ、此日光秀兵一萬ヲ率テ龜山ヲ發ス、聲言ス軍容ヲ獻セン

トスト、老阪ヲ踰エ直チニ軍ヲ勅シ、馬首ヲ左ニシ、桂川ヲ涉リ、令シテ曰ク、我敵本能寺ニ在リト、未明寺ヲ圍ミ之ヲ攻ム、此時寺中變ヲ聞キ、出テ其旗ヲ見テ、初テ光秀ノ反ヲ知ル、信長左右ト防戦シ、創ヲ被リ殿中ニ入り、火ヲ放テ自刃ス、時年四十九、信忠變ヲ聞キ難ニ赴カントス、及ハス、其館スル所妙覺寺ハ防戦ニ便ナラサルヲ以テ、遽ニ誠仁親王及ヒ皇孫謙和仁、後周仁ト改ム、ヲ大内ニ移シ、二條新殿ニ據ル、光秀軍ヲ移シ來リ攻ム、信忠勇ヲ勵シ、苦戰殺傷相當ル、然レトモ衆寡敵スヘカラス、信忠乃チ火ヲ放テ自刃ス、年二十八、從士百餘人、力戰之ニ死ス、之ヲ本能寺ノ變トナス、總見記、信長記、遠老物語、川角太閤記、常山紀談、老人雜話、林鐘談、四教史、取、

案スルニ本能寺ノ變、或ハ光秀天下ヲ取ルノ大志アルニ因ルトシ、或ハ其怨望ニ因ルトシ、又信長ノ驕暴ニヨルトシ、議論一定セス、然シテ皆其因アル者ノ如シ、光秀深刻權譎ニシテ大志アリ、然レトモ信長之ヲ待ツニ禮ヲ以テスル時ハ、固ヨリ能爲スナシ、但驕暴ヲ以テ深刻ニ加ヘ、且光秀ノ野心ヲ懷クアリ、事變ノ發セサルヲ欲スルモ得ヘケンヤ、此時安國寺惠瓊京師ニ在リ、常ニ毛利氏ノ爲ニ計ル所アリ、其吉川小早川氏ニ報セシ書ニ曰ク、信長の代、五年三年ハ可被持候、明年ハ公卿なとにも、可被成かと思及ひ申候得ハ、高ころひにあとのけにころはれ候ひつると見ゆ申候、藤吉郎さりとてはの者にて候

トアリ、此一言以テ當時ノ事情ヲ見ルニ足ルヘシ、惠瓊モ亦人傑ト謂フヘキナリ、是ニ由テ之ヲ觀レハ、光秀ナキモ信長ハ免カレサルカ、

此時本能寺ハ、四條坊門今地西洞院通リノ西南ニ在リ、南北二町東西一町ノ地ヲ占メ、其中ニ堂宇方丈庫裏及子院等相連リシ巨刹ナリ、此時兵燹ニ災シ烏有トナリ、後數年ヲ經テ今ノ地ニ移レリ、二條新殿ハ二條家ノ邸第ノ趾ニシテ、烏丸室町ノ間、押小路ノ南ニアリ、今二條殿町小池町ト稱スル所ナリ、天正七年信長大ニ造興ヲ加ヘ、之ヲ誠仁親王ニ奉セシカ、此ニ及ヒ兵燹ニ罹レリ、妙覺寺ハ押小路室町ノ西南ニ在リ、今妙覺寺町ト云フ、二條新殿トハ室町ヲ隔テ、西ニ在リ、老人雜話ニ妙覺寺ノ南隣トナスハ、蓋シ誤ナルヘシ、二條新殿ト本能寺トハ西南ニ七町ヲ隔テタリ、京都中古圖、信志、老人雜話、本能寺文書、取、長記、山城名勝

阿彌陀寺古文書及ヒ鐘銘ニ據ルニ、阿彌陀寺住持清玉上人ハ、織田氏ト縁故最モ深シ、此日變ヲ聞キ走リ至ル、已ニ及ハス、乃チ窵ニ遺骨ヲ收メ、更ニ光秀ニ謁シ情ヲ陳ヘ、信忠及ヒ戰死者ヲ收葬センコトヲ求ム、光秀之ヲ許ス、清玉寺僧ヲ率井、屍ヲ灰燼ノ中ニ收メ、之ヲ其寺中ヘ葬リ、各、其墓ヲ立ツ、此時寺ハ今ノ上京芝藥師町ニアリ、天正年中今ノ地ニ移ルニ及ヒ、其墓モ

亦移シタレト、地ノ狹キヲ以テ合葬セシモノ多シト、事ハ陵墓志ニアリ、寺ニ當時清玉カ筆記セシトテ卷紙ニ信長以下ノ法號氏名ヲ載セシモノアリ、氏名ハ多ク假字ヲ以テ之ヲ記シ、頗ル參考ニ供スヘキモノナリ、  
光秀伏誅

天正十年六月、羽柴秀吉毛利氏ヲ伐テ、吉川元春小早川隆景ト備中ニ對陣ス、高松城陷ル、且夕ニアリ、會、京師本能寺ノ變聞ユ、秀吉大ニ驚ク、是ヨリ先毛利輝元織田氏ノ大舉シテ將ニ至ラントスルヲ聞キ、成ヲ行ハシコトヲ議ス、秀吉未ダ之ヲ許サス、是ニ至テ直ニ毛利氏ト和シ、盟約ヲ結フ、同六日秀吉高松ヲ發シ、急行シテ八日姫路ニ入り、十一日尼ヶ崎ニ着シ、光秀ヲ討スル檄ヲ遠近ニ傳ヘ、直ニ上洛ノ備ヲ爲ス、太閤記、秀吉傳、時ニ織田氏ノ宿將柴田勝家ハ北陸ニ在リ、瀧川一益ハ關東ニ在リ、道路隔絶シテ未ダ至ラス、其他敢テ師ヲ起シ、逆ヲ討スルモノナシ、此ニ於テ秀吉首トシテ義ヲ唱フ、信長傳、秀吉傳、信孝、長秀等皆來リ會ス、秀吉諸將ヲ會シ、軍議ヲ決シ、使テ光秀ニ遣シ、十三日ヲ以テ山崎ニ會戰センコトヲ求ム、光秀之ヲ諾ス、時ニ光秀淀城ニ在リ、兵凡一萬六千ヲ率井テ山崎ニ出テ、勝龍寺勝龍寺、北凡三十町許ナリ、其處、勝龍寺ニ在リ、山崎ヨニ陳シ、齋藤利三ヲ以テ先鋒ト爲ス、初メ利三洞嶺ニ在リ、戰ノ利ナキヲ察シ、光秀ニ勸メ坂本ニ退カシム、光秀可カス、



此時秀吉ノ軍光秀ノ陣ヲ距ル里餘、諸將互ニ先ヲ争ヒ、議決セス、乃テ信長ノ遺法ニ遵ヒ、部署ヲ定ム、兵凡ソ四萬、山崎ノ南ニ對ス、山崎ノ地タルヤ、天王山其西北ニ在リ、最モ要害トナス、光秀松田某ニ命シ、兵壹千ヲ以テ之ニ據ラシム、秀吉其臣堀尾吉晴ヲシテ之ヲ攻メシム、吉晴馳セテ之ニ赴ク、騎屬スルモノ僅ニ二十、敵後ヲ追テ登ル、弓銃亂發、敵弓砲前ニ在リ、拒クコト能ハス、敗レ走ル、吉晴山ヲ奪テ之ニ據ル、秀吉ノ先鋒高山友祥山崎ノ南門ヲ突キ、中川清秀池田信輝等敵ノ先鋒ヲ夾ミ撃テ、大ニ之ヲ破ル、光秀時ニ兵五千ヲ率井オンバウガ塚ニ在リ、直ニ馬ヲ馳セテ進マントス、其臣轡ヲ執リ固ク諫メ、遂ニ勝龍寺城山城乙ニ入ラシム、驚擾軍スル能ハス、走リテ近江坂本城ニ入ラント欲シ、殘卒ヲ率井伏見ヨリ大龜谷阪ヲ踰エ、小栗栖ヲ過ク、適、土寇蜂起シ、路傍ノ竹林中ヨリ槍ヲ以テ光秀ヲ刺シ、右肋ヲ傷ク、光秀痛ヲ忍ヒテ行ク、未タ幾クナラスシテ馬ヨリ墜ツ、乃テ從騎ヲシテ首ヲ斬リ之ヲ匿サシム、從騎其首ヲ路傍ノ藪中ニ埋ム、秀吉已ニ勝テ、進テ京師ニ入り、三十三間堂ニ陳ス、又光秀ノ首ヲ得テ之ヲ獻スル者アリ、秀吉大ニ悦ヒ、其屍ヲ索メ之ヲ接シ、齋藤利三ト共ニ之ヲ日ノ岡ニ梟ス、別ニ兵ヲ遣ハシテ龜山ヲ攻メ、光秀ノ子光慶ヲ誅シ、堀秀政ヲシテ兵ヲ率井テ安土ニ赴カシム、明智光春ニ大津ニ遇ヒ、撃テ之ヲ破ル、光春湖水ヲ渡リ、坂本城ニ

入り、火ヲ放テ自殺ス、變起リシヨリ僅ニ十日、大難忽テ平キ、此ヨリ豊臣氏大ニ興ル、

平安通志卷之五十二

二十五	一十五	卷
三	九一	枚
〇	〇	表裏
〇	〇	誤
教後ヲ	卅三年 破劍 辨疑	誤
數後ヲ	卅三年 劍破全 弁疑	正
四	廿八	枚
〇	〇	表裏
〇	〇	誤
ノ死セシ 及フ	裁決 頼貞	誤
ニ死セシ 及フ	裁決 頼貞 戒傷全下	正
十六	六	枚
〇	〇	表裏
〇	〇	誤
空官	弒ニ 永亨	誤
〇	〇	表裏
〇	〇	誤
空官	弒ニ 永亨 下之 效之	正

110  
20  
60

館書圖京東			
二	一	二	
〇	〇	〇	
冊	號	架	類門

平安通志  
十八

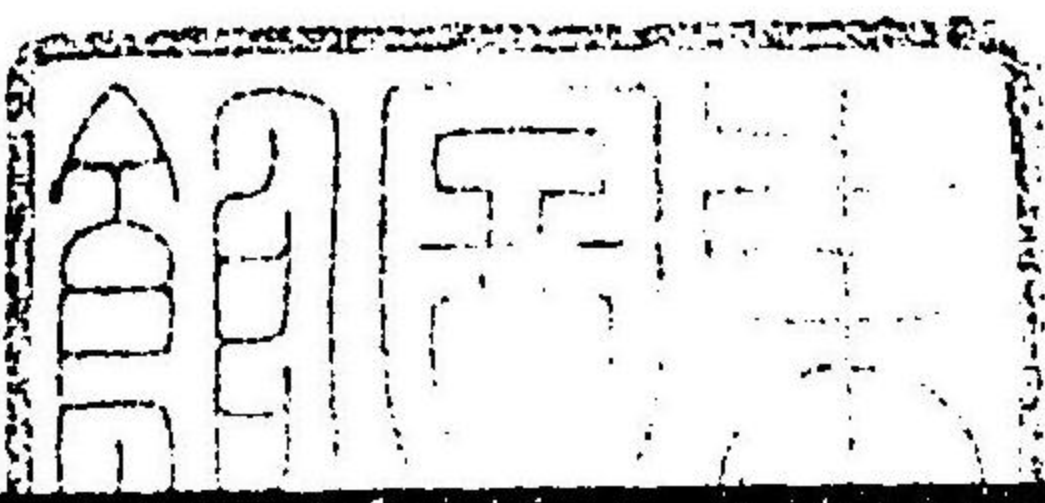
平安通志卷之五十三

湯本文彦等編

第三編

豐臣氏京政

天正十年六月、山崎ノ役大捷ヲ奏シ、明智光秀誅ニ伏ス、尋テ織田氏ノ諸將清須  
ニ會シ、相議シテ曰ク、領地ハ各自分統シ、京師ノ政ハ嗣君三法師備出ノ子、後  
五歳ニ及フマテ、柴田、羽柴、池田、丹羽ノ四氏、各其臣一人ヲ出シテ、所司代ト爲シ、  
共ニ之ヲ治メシメント、初メ信長、信忠ノ弑セラル、ヤ、宿將各信、雄或ハ信孝ヲ  
以テ後嗣トナサント欲ス、秀吉衆議ヲ排シテ、秀信ヲ立テ、自ヲ其傳トナリ、之ヲ  
抱キ出ツ、諸將已ムヲ得スシテ、之ヲ拜ス、柴田勝家之ヲ憤リ、遂ニ秀吉ト兵ヲ  
構フ、天正十一年四月、柴田勝家ヲ越前北莊ニ滅シ、五月、京師ニ入ル、參議ニ任シ、  
從四位下ニ叙ス、尋テ瀧川一益ヲ降シ、織田信雄ト和ス、是レヨリ大權、秀吉ニ歸  
シ、諸將士其門ニ拜趨ス、十三年二月、内大臣ニ遷リ、正二位ニ叙ス、初メ天皇正親  
倦勤ノ意アリ、別宮傾圮スルヲ以テ果サス、秀吉旨ヲ奉シテ、大ニ仙宮ヲ營ミ、前  
田立以ニ命シテ、役ヲ董サシム、天皇大ニ悦フ、是レヨリ先、前田立以、京師ノ所司  
代ニ任シ、專ラ浴中ノ民政及社寺ヲ掌ル、立以幹事ノオアリ、嘗テ信長ニ用井ヲ



平安通志  
 卷之五十三

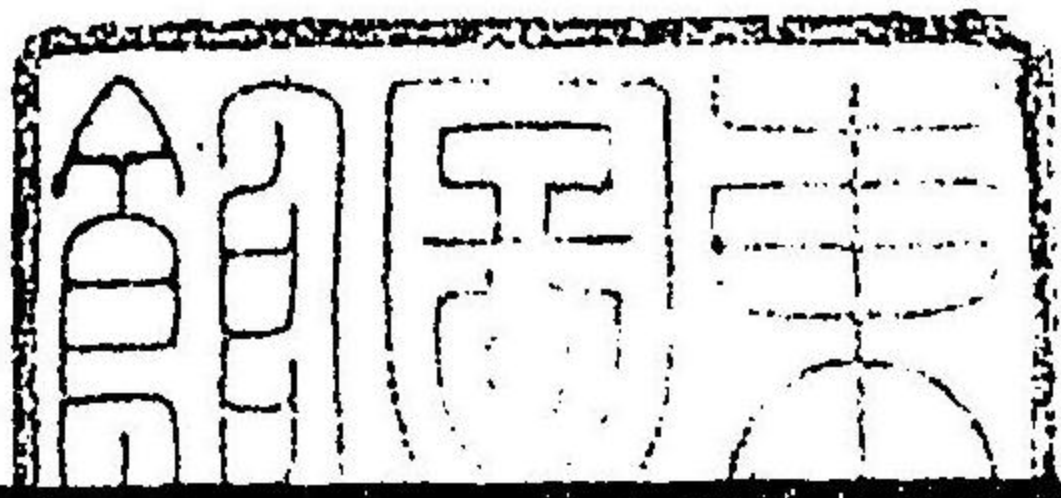
平安通志卷之五十三

湯本文彦等編

第三編

豐臣氏京政

天正十年六月山崎ノ役大捷ヲ奏シ明智光秀誅ニ伏ス尋テ織田氏ノ諸將清須  
 二會シ相議シテ曰ク領地ハ各自分統シ京師ノ政ハ嗣君三法師信忠ノ子、後  
 五歳キ及フマテ柴田羽柴池田丹羽ノ四氏各其臣一人ヲ出シテ所司代ト爲シ  
 共ニ之ヲ治メシメント初メ信長信忠ノ弑セツル、ヤ宿將各信雄或ハ信孝ヲ  
 以テ後嗣トナサント欲ス秀吉衆議ヲ排シテ秀信ヲ立テ自ヲ其傳トナリ之ヲ  
 抱キ月出ツ諸將已ムヲ得スシテ之ヲ拜ス柴田勝家之ヲ憤リ遂ニ秀吉ト兵ヲ  
 構フ天正十一年四月柴田勝家ヲ越前北莊ニ滅シ五月京師ニ入ル參議ニ任シ  
 從四位下ニ叙ス尋テ瀧川一益ヲ降シ織田信雄ト和ス是レヨリ大權秀吉ニ歸  
 シ諸將士其門ニ拜趨ス十三年二月内大臣ニ遷リ正二位ニ叙ス初メ天皇正親  
 倦勤ノ意アリ別宮傾圮スルヲ以テ果サス秀吉旨ヲ奉シテ大ニ仙宮ヲ營ミ前  
 田立以ニ命シテ役ヲ董サシム天皇大ニ悦フ是レヨリ先前田立以京師ノ所司  
 代ニ任シ專ヲ浴中ノ民政及社寺ヲ掌ル立以幹事ノオアリ嘗テ信長ニ用井ヲ



平安通志  
 卷之五十三

レ後秀吉ニ仕へ、京政ヲ管ス、治蹟甚々多シ、天正記、太閤記、備長記、秀吉御取是歲三月、秀吉紀州根來寺ヲ滅シ、又四國ヲ討テ長曾我部氏ヲ降ス、七月關白ニ任シ、姓ヲ豊臣朝臣ト賜ハル、十四年徳川家康ト和シ、明年師ヲ率テ島津氏ヲ降シ、十八年大舉シテ北條氏ヲ滅シ、遂ニ海内ヲ掃蕩シ、天下一統ノ大業ヲ爲ス、太閤記、秀吉時此時ニ當リ京師應仁以來ノ大亂ヲ受ケ、市井蕭條、其市街ヲ爲スハ、僅カニ室町上立賣ヨリ四條邊ニ至ル數十町ニ過キス、秀吉已ニ海内一統ノ功ヲ奏ス、乃テ京師ヲ完聚セント欲シ、前田立以等ヲ率テ親シク其地ヲ視、細川幽齋ヲ召シ之ヲ問ヒ、大ニ其工ヲ起ス、先ツ大堤ヲ築キ以テ洛ノ内外ヲ別ツ、諸大名ニ命シ、地ヲ分テ工ヲ課ス、出町口ヨリ起リ、北ハ西鴨ニ至リ、紫竹ヲ繞リ、舟岡ヲ包ネ、北野ニ至リ、西ノ京ニ出テ、田圃間ヲ通シ、四條ニ至リ、更ニ千本ニ傍ヒ、九條ニ至リ、東寺ヲ包ネ、室町ノ南ヨリ、北折シ七條ニ至リ、東折シ鴨川ニ至ル、鴨川ノ西ハ川ニ沿テ之ヲ築ク、廣三十餘間ヨリ八九間、周圍七里餘ニ及フ、又前田立以ニ命シテ市街ヲ區畫セシメ、略古來ノ名稱規模ニ從ヒ、其寺院ノ市中ニ散在スルヲ集メ、之ヲ東京極ニ移シ、上ハ鞍馬口ヨリ下ハ五條ニ至ル、又三條大橋ヲ築キ、五條大橋ヲ五條坊門ニ移ス、密町殿日記、新草、大土居全圖十九年九月京師ノ民ニ令シ、永世地子錢ヲ免除ス、聚樂大佛等大土功ヲ興スニ及ヒ、四民雲集シ、京洛日ニ昌ンナリ、其皇宮ノ事及

ヒ御料ノ事ハ、第一編ニアリ、土木ノ事ハ本編別ニ目アリ、蓋シ秀吉ノ京政ハ、織田氏ニ繼キ、散亡ヲ招徠シ、京邑ヲ完聚シ、物力ヲ集メ、人烟ヲ殖スルニアリ、且其居京都又ハ伏見ニ在ルヲ以テ、天下ノ諸侯伯皆邸第ヲ其間ニ構ヘ、京師益盛ナリ、其撥亂反正ノ勢、豐亨豫大ノ富ヲ以テ、僅々二十年、能ク此大成ヲ告ク、應仁以來、京師荒廢、王室式微ヲ極メタリシカ、是ニ至テ完聚修理京師ヲ再造セシハ、豊公ノ功實ニ大ナリト謂フヘシ、

聚樂行幸

豊臣秀吉既ニ畧ホ海内ヲ戡定シ、關白ニ任セラル、是ニ於テ第ヲ大内裏ノ舊址ニ起シ、已ニ成リ之ヲ聚樂ト號シ、天正十五年、大坂ヨリ移リテ此ニ居ル、豐隆、秀吉時十六年奏シテ後賜行幸ヲ請フ、天皇之ヲ聽ス、時ニ亂喪已ニ久ク、典故廢缺セリ、乃テ民部卿法印前田立以ヲシテ古記ニ徵シ、舊例ヲ考ヘシメ、足利氏北山第行幸室町第行幸ノ儀ヲ采擇シ、四月十四日ヲ以テ其期ト爲ス、是日秀吉夙ニ參内シ、南殿ヨリ供奉シテ出ツ、四足門ヲ北ニ、正親町今ノ中ヲ西ニ、聚樂ニ至ル、其間十餘町警衛ノ武士六千餘人、道ノ左右ニ列ス、其儀衛鹵薄甚々盛ンナリ、秀吉前田利家以下諸大名ヲ率テ之ニ扈從ス、前驅已ニ聚樂ニ入り、後乘未タ宮門ヲ出テス、車馬衣冠華麗ヲ極メ、綾羅錦繡燦然トシテ、人目ヲ眩耀ス、遠近ノ士女雲

集縱觀ス、父老或ハ涕ヲ流シシ曰ク、圖ヲサリキ今日始テ太平ノ象ヲ觀ントハト時ニ宰相中將三條公仲ヲシテ天皇ノ饗應使タラシメ、皇族公卿等亦各饗應使ヲ附ス、着御直ニ捧膳アリ、獻酒禮畢リ、五常樂、郢曲、太平樂ヲ奏ス、次ニ德是北辰、椿葉陰ニ改尊尙南面、松花色十回ノ句ヲ朗咏ス、天皇大ニ喜フ、遂ニ駐輦三日ノ期ヲ増シテ五日ト爲シ、連日ノ饗宴歡樂霽然タリ、十五日、秀吉御料ヲ上ル、此時御料ハ織田信長貸金利息ノ制ヲ受ケシカ、此ニ及ヒ京中ノ地子銀五千五百三十餘兩ヲ御料ニ充テ、米地子三百石ヲ院ノ御所、六百石ヲ六宮、親王關白料ニ充テ、又江州高島郡八千石ヲ諸門跡公卿ノ料ニ充ツ、此日秀吉諸大名ニ朝廷ニ對シ崇尊ヲ盡スヘキ旨ヲ諭シ、起請ヲ爲サシム、其文ニ曰ク、

一就今度聚樂第行幸被仰出之趣誠以難有催感儀事、

一禁裏御料所地子以下、並公家門跡所々知行等若無道之族於有之者爲各堅加意見、當分之儀不及申、子々孫々無異儀之樣可申置事、

一關白殿被仰聽之趣、於何篇聊不可申違背事、

右條々若雖爲一事於令違背者、

梵天帝尺四大天王、總日本國中六十餘州大小神祇、殊王城鎮守別氏神春日大明神八幡大菩薩天滿大自在天神、部類眷屬神罰冥罰各可罷蒙者也、仍起

請如件、

天正十六年四月十五日

右近衛權少將 豐臣利家  
參議左近衛中將 豐臣秀家  
權中納言 豐臣秀次  
權大納言 豐臣秀長  
大納言 源 家康  
內大臣 平 信雄

金吾殿

長曾我部元親、豐臣勝俊、二十一人ハ別紙ニ之ヲ記セリ、天下諸大名ヲ會シ、御前ニ誓ハシムルハ、蓋シ古來無キ所ニシテ、豐公ノ武成ヲ告クル爲メナリ、十六日大ニ公卿諸侯ヲ燕宴ス、席上和歌ノ御會アリ、寄松祝ヲ以テ題ト爲ス、御製ニ曰ク、

わきてけふまつかひあれや松か枝の世々のちきりぞかけて見せつゝ  
秀吉以下制ニ應シテ歌ヲ廢ク、

萬代の君かみゆきになれくゝてみとり木高き軒の玉松

秀吉

上下驩娛夜半ニ及ヒテ宴ヲ撤ス、十七日、天皇舞樂ヲ觀ル、萬歳樂、延喜樂、太平樂、以下十番ヲ奏ス、雅樂廢スル既ニ久シ、此ニ及ヒ太平ノ聲ヲ聞ク、畢リテ宴ヲ開ク、北政所秀吉ノ夫人、大政所秀吉ノ母、小早川秀秋ヲシテ物ヲ獻セシム、是日上皇正親町天皇、歌ヲ秀吉ニ賜フ曰ク、

萬代にまた八百萬かきねてもなほかきりなきときはこのとき  
秀吉感喜返歌ヲ奉ル曰ク、

言の葉の濱の眞砂はつくるともかきりあらしな君か齡は

十八日、天皇還幸ス、鹵薄大抵行幸ニ同シ、此間秀吉ノ獻スル所前後數千、奉供ノ盛ナル前古ニ超絶ス、皆櫃ニ收メテ整頓シ、以テ前驅ニ遣ル、士民縱觀スル者塔ノ如ク、皆萬歳ヲ唱フ、行幸ノ事ハ秀吉ノ宿志ナリシニ、此ニ及ヒ能ク其事ヲ成シ喜ヒ甚シ、乃チ和歌三首ヲ詠進ス曰ク、

時をぬし玉の光のあらはれてみゆきそけふのもろ人の袖

そらまても君かみゆきをかけておもひ雨降りすさふ庭の面かな

みゆきなほ思ひしことのみまりあればかへるさ惜き雲の上人

天皇叙感更ニ御製ヲ賜フ曰ク、

あかきりし心をとむる宿りゆゑなほかへるさの惜まるるかな

上皇亦御製アリ曰ク、

うつもれし道もたよしきぞりにあらて玉の光の世にくもりなき

秀吉乃チ楠前河内守入道式部卿法印長諳ニ命シテ此盛典ヲ記セシム、聚樂第行幸記是ナリ、登壇聚樂行幸記、足利氏ノ時、室町北山ノ行幸アリト雖トモ、共ニ一時ノ遊ニ過キス、此ニ及ヒ豊太閤一世ノ雄才ヲ以テ、撥亂反正ノ偉功ヲ奏シ、此盛典ヲナシ、天下ノ諸侯ヲ率ヰテ專王奉上下ノ盟ヲ爲サシム、盛ナリト謂フヘシ、

豊臣氏土木

太閤秀吉ハ獨リ王室ヲ中興シ、京都ヲ完聚シタルノミナラス、其土木ヲ興シ、造築ヲナシタルモ、實ニ平安京奠都以來、空前絶後ノ大事業タリ、永祿ノ季、足利幕府已ニ廢シ、織田氏之ニ代リシモ、未ダ邸第ヲ營スルニ及ハスシテ、敗レタリ、秀吉之ニ代リ、大阪ヲ以テ首府ト定メシヲ以テ、京都ニハ其邸第ナカリシカ、天正十三年春、内野ノ地ヲ相シテ、大ニ之ヲ營セリ、夫レ内野ノ地ハ大内裏ノ舊趾ニシテ、足利氏以來、全ク荒廢シ、空地トセリ、然レトモ地勢ハ依然、京都ノ要衝タリ、是ヲ以テ其邸第ノ攸ト定メシナリ、其境域ハ東ハ大宮、西ハ淨福寺、北ハ一條、南ハ下長者町ノ北ヲ限リ、繞ラスニ深池ヲ以テシ、築クニ高堞ヲ以テシ、巨樓鐵門、其莊嚴ヲ極メ、内ニハ二重ノ郭アリテ、樓閣殿宇、其間ニ滿チ、金銀ヲ鏤ハメ、五彩



ヲ繪キ華麗善美至ラサル所ナシ其四面ニ諸將ノ邸館ヲ建テシメ一族功臣及諸將士ヲシテ之レニ居ラシム三年ノ星霜ヲヘテ同十五年落成セリ號シテ聚樂邸ト曰フ之ヲ邸第ト稱スルモ其實ハ居然タル城郭ナリ其九月十八日大阪城ヨリ移リテ此ニ住ス其調度ノミニテモ舟ヲ以テ淀ニ運シ更ニ車五百輛人夫五千人ヲ以テ此ニ輸送セリト云フ是レ聚樂造營ナリ聚樂園、豐臣記、○聚樂ニ、東ハ細川、西ハ田野、南ハ二條、北ハ一條トアリ、山城名勝志ニ、東ハ大宮、西ハ朱雀、南ハ黒門、北ハ一條トアリ、今聚樂園ニヨレハ本文ノ如シ、蓋シ此殿ハ大名邸ヲ合セシナル秀吉又前田立以ニ命シ細川幽齋ニトヒ以テ大土居ヲ築ク周回殆ト七里以テ浴ノ内外ヲ別ツ今猶存スル者アリ秀吉又大佛ヲ作り以テ偉觀ト爲サント欲シ洛東佛光寺ノ地ニ相シ其造營ノ所ト定メ佛光寺ヲ今ノ地ニ移シ其工事ヲ興ス時ニ天正十四年ナリ秀吉令シテ曰ク昔聖武帝南都ノ大佛ヲ造ラルニハ二十年ヲ費サレタリト聞ク奈良大佛ハ天平十五年ヨリ天平勝寶元年ニ至リテ成ル、實ハ七年ヲ費セリ我今五年ヲ以テ之ヲ成サント是ニ於テ前田立以テ大奉行トナシ奈良ノ大佛工法印宗貞同弟法眼宗印及大工棟梁等ヲ召シ先建設ノ方略ヲ議セシメ遂ニ木材ヲ土佐並ニ九州諸國及信濃ノ木曾紀伊ノ熊野ニ伐ルニ決シ吏二十人大工二十人ヲ一隊トシ各地ニ派シテ之ヲ採集セシム四國九州ハ之ヲ海ニ泛へ更ニ淀川ヨリ淀鳥羽ニ運ハシメ伊勢尾張美濃ハ木曾川ニ因テ桑名ニ出シ更ニ南海

ヨリ回航シテ淀川ニ入ラシム之ニ與ラサル畿内山陰山陽等廿一國ニ令シテ一地均ク石疊假山ノ役ニ從ハシム就中石疊ハ最宏壯ヲ極メシヲ以テ日ニ夫數千ヲ役シ非常ノ大石ヲ白河ヨリ曳キ之ヲ疊ム殆ト工費ノ過半之ニ費セリト云フ初メ蒲生氏郷暨四國橋ニ間ノ大石ヲ曳出ス、諸大名之ニ徵ヒ、皆競フテ大石ヲ白河ヨリ曳ク、愈々出テ、愈々大ナリト云フ、今此石疊尙存セリ、其石甚大ナルヲ以テ之ヲ白河曳セリト云フ又棟木ヲ富士山ニ求メ徳川家康ヲシテ之ヲ伐ラシム其費凡ソ人夫五万人金壹千兩ト云フ佛像ハ銅ヲ以テ鑄ント欲セシモ當時金工大ニ衰へ其工人ヲ得ス因テ木製トシ塚ノ茶人今井宗久ヲ奉行トシ支那ノ工人豊後ニ在留スルモノヲ招キ池田備中守河尻肥前守上田主水丞ヲシテ其費ヲ獻セシメ蠣壳一万俵ヲ勢尾ノ間ニ購ヒ以テ佛體ヲ塗ル蓋シ古代ノ乾漆製ニ倣ヘルナルヘシ是ヲ本邦蠣壳漆膠ノ嚆矢トス同十六年ニ至リテ成ル佛殿方廣寺ト號シ大ニ其慶事ヲ修ム其堂佛體ノ事ハ第二編ニ詳カナリ其工夫及ヒ費用ハ實ニ莫大ニシテ甫葺ノ太閤記ニヨルニ興山上人手傳毎日五千人宛受取作事等ニつかひしか日數漸ク二千日ニ及ひけりとあり豐德、太閤記興山ニ屬スル工夫一千万人トスレハ其他蓋シ測ルヘカラサルナリ其費用ハ徵スヘキモノナケレト大凡二百數十万石ニ上レル者ノ如シ古文書特ニ大判金ヲ鑄テ其費用ニ充テタリト云フ老談、書記大佛ノ工事未タ全ク竣ラサルニ天正十八年ヨ

リ京都街衢ノ修造ヲ興シ、皇居ヲ修理シ、寺院ヲ建營シ、遂ニ洛陽ノ舊觀ヲ復興セリ、事ハ第三編ニ詳カナリ、尋イテ文祿三年正月三日更ニ紀伊郡伏見郷ノ東方木幡山ニ居城ヲ營マント欲シ、佐久間河内守瀧川豊前守佐藤駿河守水野龜助、石尾與兵衛尉竹中貞右衛門尉ヲシテ工ヲ董サシメ、諸大名ニ令シテ資ヲ獻セシム、二月初旬夫二十五万人ヲ發シ、醍醐山科及雲母阪等ヨリ大石ヲ曳キテ壘ヲ築キ、木材ハ復タ之ヲ木曾山中ニ求メ、洪水ニ依リ之ヲ尾州ニ下セリ、木幡山ヲ夷ケ高壘ヲ築キ、深池ヲ穿テ、城ヲ築ク三重、本丸中ニアリ、天守臺其西北ニ聳エ、西丸ハ其西ニアリ、松ノ丸ハ本丸ノ東北ニアリ、名古屋丸其東南ニアリ、増田石田長束等諸氏ノ邸皆郭内ニアリ、城ノ南ハ宇治川ニ臨ミ、西ハ廣野ニ對シ、諸大名ノ邸第ヲ連ネ、東南ニハ船渠ヲ掘リ、舟ヲ維キ、其内ニ學問所ヲ立ツ、其城郭ノ莊宏、宮殿ノ瑰麗、金ヲ鑠シテ屋瓦ヲ塗ルニ至レリ、又宇治川ノ南シテ巨椋湖ニ入ルヲ壅キテ之ヲ北シ、長堤ヲ築キ伏見山下ヲ川路トシ、又長堤ヲ築キ湖水ヲ中斷シ、大和街道ヲ開キ、木津川ヲ移シ淀ノ地方ニ注キ、治水ノ法宜キヲ得テ、後世其利ニ賴レリ、太閤記、豐後、大佛、造營圖、築第古圖、伏見城古圖、京都府志、此時ニ當リ海内僅ニ平キ、瘡痍未タ癒エス、然ルニ此大土木ヲ興シタルハ、固ヨリ其宜ニ非スト雖トモ、其雄大豐享ノ氣、興隆鬱勃ノ時ニ適ヒ、計畫宜キ得、措置機ニ

合ヒシトヲ以テ、無前ノ大工事ヲ成シ、以テ天下ノ耳目ヲ聳動ス、又之カ爲ニ四方ノ人京洛ニ來集シ、離散荒殘セシ京都速ニ完聚再造スルヲ得タルハ、其政略ヲ得タリト謂フヘシ、加之宇治川巨椋湖治水ノ如キハ、設計妙ヲ得テ、今ニ至ルマテ治水ノ法ヲ知ルモノト雖トモ、間然スル所ナシト云フ、

德川氏大權ヲ執ル

慶長五年九月、德川家康既ニ西軍ヲ關原ニ敗リ、十九日進ミテ草津ニ次ス、天皇後關使ヲ遣シテ之ヲ勞問ス、大津ニ駐ルコト數日、諸王公卿或ハ使ヲ發シ、或ハ親ヲ來リ爭テ戰捷ヲ賀ス、軍門市ノ如シ、時慶應記、御湯殿、上日記、國史實錄、家康乃チ奥平信昌ヲ京師ノ所司代ト爲シ、士民ヲ撫シ、且ツ關原ノ餘黨ヲ捕獲セシム、十月石田三成、小西行長、安國寺惠瓊ヲ七條磔ニ斬リ、之ヲ三條橋南ニ梟ス、三寶院、德政日、六年正月、家康世子秀忠ト與ニ大阪ニ在リ、豊臣秀賴ヲ見、之ヲ撫スルコト故ノ如シ、畿甸益帖然タリ、三月、家康伏見城ヲ修メテ之ニ徙ル、五月、供御ノ田及公卿ノ采邑ヲ増加シ、豊國廟ニ田万石ヲ給ス、御年譜、國史、實錄、八年二月、家康征夷大將軍ニ任シ、右大臣ニ遷リ、淳和獎學兩院別當源氏長者ニ補セラレ、牛車兵仗ヲ賜ハル、權大納言藤原兼勝、參議藤原光豊、策命ヲ奉シ、伏見城ニ就キ之ヲ拜ス、其儀足利義政將軍宣下以來ノ盛典ト稱ス、德川御實記、公卿補任、千代の例、十年四月、家康職ヲ秀忠ニ讓ル、

勅使二條城ニ就キ、秀忠ヲ征夷大將軍ニ拜ス。家康ヲ大御所ト稱ス。十一年、家康皇居ヲ修造シ、諸侯ニ課シテ之ヲ築カシム。十九年十月、豐臣秀賴兵ヲ大阪ニ舉ク。家康大兵ヲ發シテ大阪ヲ擊ツ。朝廷命シテ和ヲ議セシム。家康朝廷ノ軍事ニ關スルヲ忌ミ、固ク辭シ命ヲ奉セス。尋テ大坂ト和ス。元和元年三月、秀賴復々兵ヲ舉ク。家康秀忠再ヒ大軍ヲ起シ、大阪城ヲ圍ム。五月八日、城陷リ、豐臣氏滅フ。家康京師ニ還リ、秀忠伏見ニ凱旋ス。乃チ諸侯ヲ率井テ入朝シ、白金万兩ヲ獻ス。三朝紀、關、德川實記、家康始メテ公家ノ法制五條ヲ制シ、增補家關白藤原昭實等ト舊制ヲ斟酌シテ朝憲十七條ヲ撰ミ、奉シテ之ヲ行フ。關府政事錄、德川實記、又公武法制十八條ヲ作り、之ヲ頒布ス。德川實記、條款中往々王家ヲ壓制シ、朝憲ヲ紊亂スル者多シ。是ヨリ先慶長六年、板倉勝重ヲ以テ京師ノ所司代ト爲シ、二條城ニ鎮セシメ、以テ朝廷ト大阪トニ備フ。大阪ノ謀臣果シテ天子ヲ擁セントスルノ議アリ、故ニ益京都ノ事ヲ重シシ。所司代ヲシテ京都ヲ護衛シテ、皇室公卿ヲ監察セシメ、併セテ關西諸藩ノ動靜ヲ窺ヒ、緩急臨機ノ處分ヲ爲サシム。又禁裏附仙洞附ノ武士ヲ置キ、皇官ヲ警衛シ、以テ變ニ備フ。新編、政要錄、且德川氏ノ爲ス所ヲ舉クレハ、僭上ニ涉ルモノ多シ。家康歿シテ後之ヲ神ニ祀リ、東照宮ノ號ヲ賜ハリ、伊勢ノ大廟ト同ク、年々例幣使ヲ日光ニハ遣シ、奉幣ヲ行フ。江戸上野ニ其寺ヲ創シ、比叡山ニ

擬シ、東叡山ト號シ、皇子ヲ奉シテ座主ト爲ス。或ハ謂フ京師若シ變アラハ、輪王寺宮ヲ擁シ、天下ニ號令スルノ策ニシテ、即チ家康ノ意ニ出ツルト云フ。蓋シ德川氏ハ、陽ニ恭遜ヲ示シ、隱ニ朝廷ヲ抑制シ、至ラサル所ナシ。後陽成、後水尾、櫻町帝ノ讓位ノ如キ、後光明帝ノ崩御ノ如キ、尊號ノ議ノ如キ、三百年間、概ネ此策ニヨリ、其間隱微ノ事ニ至リテハ、未タ詳ナラサル者アリト雖トモ、幕府ノ朝廷ニ對スル其禮ヲ失フ者少ナカラスト云フ。十三朝紀、關、德川實記、增補家康日記、正保遺事、史微、愚賢考、殿取、

東福門院入内

東福門院諱ハ和子、征夷大將軍源秀忠ノ女、慶長十二年十月、江戸ニ生ル。本朝紀、此時ニ當リ、德川氏家康海内ヲ一統シ、大權ヲ掌握シ、藤原氏ノ故事ニ倣ヒ、婚ヲ皇室ニ連ネント欲シ、百方之ヲカム。元和二年、家康歿ス。公卿往々前例ヲ援キ、其不可ヲ陳スル者アリ、爲メニ事將ニ寢マントス。秀忠之ヲ聞キ、大ニ憂ヒ、藤堂高虎ニ囑シテ密ニ近衛關白ニヨリ、頻ニ宮中ニ周旋セシム。御入内記、是ニ於テ其事竟ニ成リ、元和六年六月十八日、二條城ヨリ入内シ、女御トナレリ。時ニ歲十四、寛永元年十一月、立テ中宮トナリ、六年十一月、東福門院ト號ス。德川實記、其入内ノ儀式最モ盛ナリ、卜部兼親ノ記ニ、内裏より爲御迎、傳奏兩人、廣橋内府西三條、次九條、關白四將之隨身、諸太夫上下之侍數百人扈從、次近衛殿御供衆同上、次一條

殿乘輿也、次諸公卿諸役、次二條御城ヨリ御物之長櫃千八百八十合也、此内三百合程、唐織御紋葵丸御覆也、次前驅雜色樂人四十五人也、樂器を以て二行也、四將衆隨身帶弓箭扈從也、次御車糸毛アシロ、次車には兩上蔭中蔭局以下乘車にて牛一匹にて引也、御乘車アシロの御車也、牛二匹にて引也、公卿二行騎馬、次江戸之御廻衆板倉周防守隨身騎馬負矢籠供也、次井伊掃部、松平主殿、松平右衛門大夫、土居大炊助、本多美濃守、松平下總守扈從也、次堂上云々扈從也、トアル如キ以テ見ルヘシ、其費ス所、殆ト現米七十万石ニ及ヒシト云、德川氏ノ力ヲ極メ、財ヲ靡シテ以テ其志ヲ成セシヲ見ルヘシ、土居家門院皇子二人、皇女五人アリ、興子内親王、昭子内親王、高仁親王、皇子若宮、顯子内親王、賀子内親王、皇女菊宮ナリ、興子内親王、寛永六年十一月八日七歳ニシテ禪ヲ受ケ、翌七年七月十二日、即位ノ禮ヲ行ハル、皇胤紹平安奥都以來、茲ニ至テ始メテ女主アリ、世人稱シテ德川氏ノ故トナス、此時後水尾帝聖齡僅ニ三十ノミ、年表是レ皇位繼承篇ニ後水尾天皇衰老ニヨルニ非ス、又疾アルニ非スシテ、皇位ヲ明正天皇ニ讓リトアル所以ナリ、昔藤原氏皇室ノ古制ヲ破リ、人臣ヲ以テ、其女ヲ入レテ皇后トナシ、外戚ノ親ヲ籍リ、以テ權ヲ專ラニス、今德川氏カ天下ノ群議ヲ排シ、門院ヲシテ新ニ武門ヨリ入リテ中宮トナセシハ、至ク藤原氏ノ故智ヲ襲フノミ、更ニ之ヲ當時ノ事實

ニ徵センニ、德川氏ハ已ニ其女ヲ納レ、其外孫ヲ立ントスルハ、固ヨリ目的ノ在ル所、後水尾天皇ノ英聰ナル、早ク其意ヲ察シ、寛永五年襁褓中ノ高仁親王ニ讓位ノ詔アリシモ、同年六月十一日、其早世ヲ以テ一時中止セシカ、皇位繼翌六年五月七日、遂ニ再ヒ讓位ノ内詔ヲ下サルニ至レリ、孝亮宿稱而シテ其事情ハ日野資勝卿記、其年五月七日ノ條ニ、女院御所即門院也御使中御門大納言阿野中納言鳥帽子ニテ被參候、其様子ハ主上切々御腫物御指出申候、又此度御癩病氣ニテ候、其段通仙院へ被仰出候へハ、御腫物心モ有之様ニテ、御養生候へハ可然申候へ共、御在位ニテ如何ニ候間、御讓位モ有度由被仰候、又女宮御方ヲ東宮御誕生マテ御即位有度トノ儀ニ候トアルヲ見テモ、德川氏ノ爲此ニ及ヘルコトヲ知ルニ足ルヘシ、然レトモ此時秀忠家光父子之ヲモ知ラサルモノ、如ク數月ヲ經過シ、八月初旬ニ至テ、漸ク勅答ヲ上リ、秀忠ヨリハひめ宮の御方へ御位をゆつりまいらせられたきとおほしめし候由、むかしもめてきたためしおほく候、早々七月につけまいらせられ候はんとの御内せうのとほり、うけたまはり候、いまたおそからぬ御事と存候ト云ヒ、家光ヨリハ、ひめ宮の御方へ御位をゆつりまゐらせ候はんとの御内せうに仰下され候おほむき御内意なまゐらせ候へ共、いまたおそからぬ御事とおほしめし候まゝ、いかやうにも相伺候、仰次第

にあそはされ候へく候ト云ヒ、暗味模稜ノ中ニ、有意無意ノ勅答ヲ奉リシカハ、  
東武其事ナク再往ト經過セシニ、會幕府ハ故ヲニ元和ノ法度ヲ據トシ、勅賜紫  
實錄衣ヲ大德寺玉室等ヨリ褫奪シ、且十月十日強テ舊例故格ヲ破リ、春日局ヲシテ  
 參内セシメシカハ、帝益幕府ノ專横ヲ憤リ、愾怒一時ニ發シ、其廿九日姫宮ヲ内  
 親王ニ叙シ、十一月八日俄ニ讓位ノ詔アリシナリ、中宮附武家天野豐前守ノ日  
大内日記記ト云フ、二十一月八日女一宮様御讓位有リ、人不知、乍去公卿方へハ、朝五ツ  
ト云フ時分、束帶ニシテ出仕可有旨觸アル由云々、中宮様御所ニテ一圓不知申ノ刻許  
二、奥ヨリ其儀式有リ、則防州板倉重宗申聞候云々、九日燭ヲ取刻ニ、豐前守江戸へ罷  
 下リ候、中宮様ヨリ大御所秀へ御内書持參云々、今日マテ豐前不被召出候十一月九日ヨリ凡四十餘日ヲ經ル  
家同日ヲ經ル、今日被召、御返事被仰聞、御返書直ニ御渡、御口上被仰下候、御本丸  
光同前ニ、十七日京着、先板倉周防ニ江戸ニテノ御意ノ趣申渡ト記セリ、此日記  
ニヨレハ、門院ハ帝ノ俄然讓位アリシニ驚愕シ、手書ニ其父兄ニ寄セ急ニ報セ  
 ラルト雖トモ、秀忠家光ハ從來計畫セシ案中ノ事ナレハ、固ヨリ爲ニ驚クヘキ  
 ナク、從容トシテ之ニ處シ、數十日經過ノ後、漠然タル回答ヲ爲シタルノミ、其回  
 答ノ大意ハ、土御門泰重記ニ、御讓位ノ由驚申候御事ニ候、其上ハとかく愾慮次  
 第ノ由云々、大内日記ニハ、愾慮ノ上ハ、御意次第ノ由云々ノ意ニ過キス、此ニ於

テ讓位ノ事終ニ行ハレ、徳川氏遂ニ其素志ヲ遂ケタリ、此後家光三十萬ノ大兵  
 ヲ率井テ入朝シ、更ニ上皇ノ御料ヲ増シ、又大ニ市人ニ金ヲ頒賜シ、威福ヲ以テ  
 物情ヲ鎮壓シ、無事ヲ力メタリ、十三朝幕府東福門院ニ於テハ、始終其禮ヲ優ニ  
 シ、上皇ニハ不敬ヲ加ヘタリシハ、靈元法皇修學院離宮御幸ノ記ニ、東福門院と  
 もなひ給ふ折ばかり、諸司代供奉せしめ、舊院後水尾のみ御幸の折は、諸司代も  
 供奉せしめず、辻かためるといふこともなく、すへての行装もなかりしなりト  
 アリ、以テ其他ヲ推知スヘキナリ、修學院御幸記

二條城行幸

寛永三年秋、前征夷大將軍徳川秀忠其子征夷大將軍徳川家光ト、天下ノ諸侯ヲ  
 率井テ上洛シ、二條城ニアリ、此時徳川氏曰ニ大阪ヲ滅シ天下ヲ一統シ、霸業大  
 ニ定マリ、其女和子ヲ宮ニ入レ、後水尾帝ノ中宮トナシ、王室ノ外戚トナリ、其盛  
 ナ極ム、乃テ車駕ノ行幸ヲ仰キ以テ其武成ヲ表セント欲シ、林信勝僧崇傳等ヲ  
 シテ其儀注ヲ作ラシメ、北山聚樂、行幸ノ式ニ則トリ、益、華美ヲ加フ、更ニ行幸殿  
 ナ内城ニ營シ、扈從公卿女官ニ至ルマテ、其設周備セサルナシ、九月六日ヲ以テ  
 其日ト定ム、寛永行幸記、東武實錄、南是日乘輿宮ヲ出テ、東洞院大路ヲ北シ、正親  
 町小路ヲ西シ、堀川大路ヲ南シテ直ニ城ニ入ル、中和門院、中宮、皇女興子、及ヒ諸

妃皆往ク、右大臣二條兼遐以下諸公卿前驅シ、關白近衛信尋後乘シ、將軍家光諸  
侯ヲ率井テ扈從ス、其鹵簿ノ盛聚樂行幸ニ過ク、士民雲集縱觀ス、即日享禮ヲ行  
フ、寛永行幸圖、十三朝紀七日舞樂アリ、萬歲延喜輪臺、青海波、敷手、蘭陵王、納蘇利、千秋、八曲  
ヲ奏ス、八日和歌ノ會ヲ設ク、玉座ハ東面シ、其前ニ講座アリ、將軍家光及ヒ二條  
右大臣兼遐、式部卿智仁親王、彈正尹好仁親王、前關白藤原幸家、大納言德川賴房  
水戸等右側ニ在リ、前將軍秀忠、關白左大臣近衛信尋、兵部卿貞清親王、前左大臣  
鷹司信房、内大臣二條康道等左側ニ在リ、親王ヲ大臣ノ次座トナス、ハ、所謂元和法  
スル政、權中納言四辻季繼、中將冷泉爲賴等和歌所ノ事ヲ掌ル、竹契遐年ヲ以テ  
題ト爲シ、上下各壽ヲ述フ、御製ニ曰ク、  
もろこしの鳥もずむへく吳竹のすくなる世こそかきりしられぬ  
秀忠以下皆之ヲ廢ク、

吳竹のよろつ代まてとちきるかなあふくにあかぬ君か行幸と 秀忠

行幸する我大君は千代ふへき千尋の竹のためしととおもふ 家光

九日散樂ヲ演シテ以テ御覽ニ供ス、難波、田村、源氏、供養、道成寺、三輪、熊坂、猩々ノ  
諸曲アリ、十日車駕宮ニ還ル、秀忠父子先例ニ依リテ金銀寶器ヲ皇室ニ獻シ、且  
ツ門跡公卿以下ニ贈與スルコト甚多シ、其額實ニ聚樂行幸ニ倍蓰ス、又最モ意

ヲ饗宴ニ用井、掃部頭井伊直孝、周防守板倉重宗、供御ヲ掌リ、門院、中宮、皇女、親王、  
門跡、公卿、諸侯等各饗應使ヲ付ス、膳羞皆善美ヲ盡シ、款待周旋至ラサルナク、上  
下皆歡ヲ極メタリト云フ、寛永行幸圖、東武實錄德川氏已ニ此行幸ヲ以テ其武成ヲ天下  
ニ表シ、其志既ニ足ル、未ダ幾年ナラス、行幸殿以下ノ建物ヲ毀テ、之ヲ仙洞及ヒ  
其他ニ移シタリ、京都府文書

### 板倉父子

板倉勝重ハ、德川氏譜第ノ臣ナリ、父ヲ好重ト曰フ、勝重初メ僧ト爲リ、尾張永安  
寺ニ居ル、宗哲ト稱ス、父兄戰死ス、是ニ於テ德川家康宗哲ヲ召還シ、歸俗シテ板  
倉氏ヲ嗣カシム、即チ伊賀守勝重ナリ、勝重身ヲ緇林ヨリ起シ、粗々書史ニ通シ、  
且ツ性深沈ニシテ幹事ノオアリ、天正十四年、駿府奉行ニ任ス、播磨尋テ江戸地  
奉行、町奉行トナリ、武藏ニ於テ萬石ヲ食ム、武野燭談慶長六年五月、加藤正次ト共ニ  
奥平信昌ニ代リテ京都ノ所司代ト爲ル、正次其職ヲ罷メラレ、勝重專ラ之ニ任  
ス、是時ニ當リ喪亂新ニ平キ、衆心未ダ一ナラス、士庶動モスレハ口ヲ豐臣氏ニ  
藉リ異議ヲ唱フ、勝重公平雍容力メテ之ヲ綏服ス、大阪ノ役起ルヤ、豐臣氏ノ客  
多ク京師ニ入り、或ハ火ヲ民家ニ放テ、或ハ家康ヲ狙撃セントス、勝重悉ク捕ヘ  
テ之ヲ戮ス、武野燭談勝重職ニ在ルコト二十年、恩威並ヒ行ヒ、裁決流ル、カ如シ、是



幕府大權ヲ專ラニシ、王室衰頹セシヨリ、年ヲ閱スル七百有餘年、其間後鳥羽帝中興ヲ謀リテ成ラヌ、後醍醐帝僅ニ成シテ輒々破レ、是ヨリ足利、織田、豐臣、徳川、數代ヲヘテ、朝權益振ハス、陽ニ尊崇ヲ爲シ、隱ニ抑壓ヲ肆ニス、内ハ朝紳ヨリ、外ハ諸侯ヨリ、下ハ草莽ノ志士ニ至ルマテ、苟モ心ヲ王室ニ存スルモノ、憤惋セサルナシ、然レトモ幕威赫々、法網緻密、能ク其志ヲ致スナシ、水戸侯徳川光國深ク心ヲ王室ニ盡ス、然レトモ幕府ノ懿親ヲ以テ甚々其事ニ苦シミ、遂ニ國史ヲ修メ、以テ名分ヲ正シテ大義ヲ明ニシ、又禮儀類典ヲ修メテ、以テ禮文ヲ秩テ王制ニ備フ、此ヨリ天下人心稍歸向スル所ヲ知ル、此後七十餘年ニシテ、乃チ竹内式部、山縣大貳、藤井右門ノ事アリ、之ヲ寶曆明和ノ變ト云フ、寶曆ハ桃園帝ノ御宇ナリ、此時竹内式部ナル者アリ、丹波ノ人、或ハ云フ越後ノ人、未タ孰カ是ナルヲ知ラス、山崎派ノ學ヲ修メテ、京都ニ教授ス、常ニ王室ノ式微ヲ慨ス、曰ク朝廷ノ衰フルハ君臣ノ不學ニ由ル、苟モ學ヲ修メハ何ソ王政ノ復セサルヲ憂ヘント、公卿ノ志アルモノ多ク之ニ從遊セリ、藤井右門ハ越中ノ人、富山侯ノ庶子前田寛ノ猶子タリ、閑院家ニ仕ヘ、從五位下ニ叙シ、大和守ニ任ス、武藝ヲ善クシ、門人多シ、式部ト其志ヲ同シクス、共ニ大計ヲ立テ密ニ徳大寺公城ニ依テ宸聽ニ達ス、又四方ニ交通シ、諸侯ニ遊説シ、期ヲ刻シ、兵ヲ擧ケ、天子ヲ奉シ、幕府ヲ討セン

ト欲ス、時ニ寶曆八年ナリ、帝ノ寵妃某御机ノ上文書アルヲ見、以テ艶書トナシ、竊ニ之ヲ披ラキ、其大事ヲ知り、密ニ其姪少將某ニ告ク、少將以テ前關白一條道香ニ白ス、道香大ニ驚キ、關白近衛内前ニ告ク、内前之ヲ幕府ニ通ス、此ニ於テ事漏レ、其黨或ハ捕ハレ、或ハ遁ル、七月廿四日、俄ニ大納言鳥丸光胤、徳大寺公城、正親町三條公積、中納言坊城俊逸、今出川公言、右兵衛督高倉長秀、右中將町尻説久、水無瀬經業、左中將植松幸雅、右中將高野隆古、少納言西洞院時名、左中將勘解由小路資望、中院通維、左少辨裏松光世、後チ落飾固禪入道ト稱ス、博學考證ニ長ス、大内裏圖考證、日本春秋等ヲ著ハス、左中將西大路隆共、左兵衛佐岩倉尙具、左馬頭町尻兼望、從四位下櫻井氏福ヲ止官、永蟄居以下ニ處ス、式部巳ニ捕ハル、罪ノ問フヘキナシ、追放セラル、其他久我通兄、三條季晴、中山榮親、芝山重豐等密ニ其謀ニ預ルモ、幕府故ヲニ不問ニ附セリ、之ヲ寶曆ノ變トス、山縣大貳ハ甲州巨摩郡篠原村ノ郷士ナリ、材文武ヲ兼ネ、大志アリ、後江戸ニ寓シ、生徒ヲ教授ス、大貳、式部、右門ト相結ヒ深ク謀ル所アリ、此時小幡城主織田信邦、老臣吉田立蕃ヲ任用シ、藩政ヲ改革ス、立蕃大貳ト好シ、藩士立蕃ノ權ヲ猜シ、信邦ノ族信榮ト密告スル所アリ、幕府信邦ヲ拘シ、隱居ノ上蟄居セシメ、江戸ノ邸ヲ收メ、其封ヲ革ム、信邦ハ信長六世ノ孫ナリ、大貳右門ヲ捕テ不軌ヲ謀ルノ罪トシ、大貳ヲ斬リ、右門ヲ梟ス、大貳ノ兄市郎左衛門ニ及フ、



式部伊勢ノ宇治ニ匿レ、名ヲ變シテ正庵ト曰フ、捕ヘテ遠島ニ處セラル、之ヲ明和ノ變ト云フ、三人大事ヲ謀リ成ラスト雖トモ、此ヨリ勤王ノ士始メテ起リ、繼テ高山彦九郎蒲生秀實ノ徒出ツ、蒲生高山ノ事ハ世人能ク之ヲ知ル、三人ノ事ハ祕事隱密之ヲ知ルモノ少ナシ、明治十三年、車駕山梨縣ニ巡幸ス、特ニ祭桑ヲ大貳ノ墓ニ賜フ、蓋シ當時ノ元老院議官福羽美靜ノ建議ニ出ツルト云フ、此ヨリ三人ノ事蹟漸ク世ニ著ハル、大貳學識深遠、曾テ柳子新論ヲ著ハス、近年其裔孫印行シテ世ニ行ハル、今當時ノ遺書及ヒ傳聞スル所ニヨリ之ヲ記シ、附スルニ藤井右門ノ孫九成ノ藏スル所、當時ノ祕札一通ヲ以テス、

當今御内勅ヲ以テ、幕府征夷將軍職奉還被仰出、賴朝以來之政權召上ケ、徳川家重日光ヘ退城候様、内命可有之ニ付、夫々可致用意事、

其時ヨリ三公及大中納言ハ御推任、攝家以下平等之事ニ被仰出、自今皇族三大臣御奉職可有之様、御内決之趣、正親町三條沙汰セラル、轉法輪ハ當時伊井掃部頭縁族ニ付、遠慮可然ニ公卿申沙汰有之等申演置候也、

炎上之節ハ、先ツ聖上内侍所聖護院ヘ渡御、御内儀ハ下鴨ヨリ大原村ヘ御立退之事、

叡山坊中臨幸用意之事、

三井寺ヲ以テ、非常出張所ニ可心得事、  
南禪寺山内ヘ集議所ヲ可定之事、  
有志之輩、内侍所可爲守護事、

中院中將、西洞院少納言櫻井四位等大將トシテ、奥村兵部、前田民部、金森熊藏率井彦根城ニ向、高野中將、町尻左馬頭ハ美濃郡上ニ入城シテ、永平寺良純嚮道之、加州兵ヲ待テ、岩倉父子信濃兵率井、大垣城ノ模様牒合、大舉シテ彦根ニ入城可謀、又一手ハ鳥丸大納言、坊城中納言、高倉右兵督等ハ、柳川、鍋島、大洲等兵ノ着ヲ待、大阪表ヘ舉旗之事、

今出川中納言、町尻中將、勘解由小路中將等ハ、三井寺ヘ可向、美濃路嚮道組ヨリ山門ヘ護送之糧米之指揮并勢多口固メ之可致僉議事、

正親町三條大納言、久我大納言、裏松藏人之人人ハ、堂上地下之輩指揮シ、水無瀬中將、四辻三位ハ伏見ニ出張、鳥丸、坊城等之手ニ合、田中善法寺僧正嚮道組ニ可應事、

其人々

矢島石見  
小野和泉

立花三左衛門  
加藤作左衛門

徳大寺大納言、芝山中納言、鳥丸大納言、中院中將等、聖護院皇居ニ參集、有馬千吉、橋爲之丞、金森頼元、織田信右、三雲法眼等以下、玉座守護之事、

東久世中納言植松中將、西大路中將等、叡山御駐輦之上、登山可致都合之事、伏見口、丹波口、大津口等へ、勇士之輩固メ爲致之事、

御味方之諸侯兵各上京迄之中ニ、在京幕吏ヨリ兵端ヲ開候時分、浴中浴外寺院ハ勿論、大阪城外、彦根、淀、大垣、伏見等夫々要所々々、燒拂幕吏朝敵之旨速奏聞可致筈之事、

二條城ハ諸司代以下ノ者入城候時ハ、僉議之上可追拂筈之事、

但二條城へハ關白殿以下、御不審之面々入城可然、

龍造寺、竹内、山下、伊藤、金森、細井之軍師ハ、所々御用有之ト雖モ、常ニ皇居へ參内可有之事、

正親町三條、德大寺、鳥丸、久我、中院、芝山、勘解由小路之諸卿、毎日參内可有之事、炎上之節ハ速ニ軍使ヲ以、御味方之諸侯へ通へシ、

奧村 兵部前山前田 民部同上金森 熊藏郡上 十郎同上

本多 左仲 永平寺良純越前延壽王院法眼筑前 三雲 法眼京都

龍造寺主膳肥前 矢島 石見立花 立花三左衛門柳川 有馬 千吉久留米

橋 爲之丞同上 田中善法寺八幡 竹内 式部京都 山下 大和同上

細井 六郎大阪

寛政造營

光格天皇天明八年正月晦日ノ夜、建仁寺園栗圖子ヨリ火ヲ失ス、會大風アリ、火勢延蔓、全市殆ト焦土トナル、皇宮及ヒ上皇宮皆免カレス、車駕遽ニ火ヲ下鴨ニ避ケ、卽夜聖護院ニ幸シ、以テ行宮ト爲ス、上皇火ヲ白川ノ昭高院ニ避ケ、尋テ青蓮院ニ遷幸ス、皇代紀事大將軍德川家齊之ヲ聞キ大ニ驚キ、直ニ使ヲ發シ、朝獻シテ災ヲ弔シ、且ツ災跡ヲ巡檢セシム、三月勅シテ皇宮ヲ造ラシム、幕府諸侯ニ課シテ役ヲ助ケシメ、老中越中守松平定信ニ命シテ其事ヲ掌ラシム、定信經世ノ才アリ、好テ國書ヲ讀ム、常ニ王室ノ衰微シ、皇居ノ狹隘ナルヲ嘆ス、是ニ至リ議ヲ建テ、曰ク、慶元以來、百度苟簡、宮闕盡ク禮式ニ由ラス、堂々タル天朝ノ單薄此ノ如シ、何ヲ以テ天下ニ示サン、宜シク古例ヲ考ヘ、以テ禮度ニ由リ、之ヲ再造スヘシト、然レトモ皇居ノ古制ヲ失フコト、已ニ數百年、天正以來、屢修造スト雖モ、概ネ土御門内裏ノ制ニ依準スルニ過キス、規制已ニ違ヒ、宮殿狹隘、朝儀ヲ修ムルコトアタハス、天皇聖明ニシテ、復古ノ志アリ、乃チ前左大辨藤原光世等ニ勅シテ、古代宮室ノ制度ヲ考ヘシム、光世古典ニ通シ、考證ニ精ナリ、乃チ古圖ヲ集メ、舊記ニ徵シ、考查審案、大内裏ノ時ノ南殿、清涼殿其他ノ規度ヲ考ヘ、更ニ圖ヲ製シテ進奏ス、定信之ニ據テ、其有司ニ勗メ、其工匠ヲ定メ、以テ其役ヲ董シ、二

年ニシテ其功全ク成ル此ヨリ先南殿ハ七間四面ニ止マリ承明門ノ備ヘナク、常御殿ハ僅カニ紫宸殿ノ後ニアリシカ此ニ及ヒ紫宸殿ヲ九間四面ノ古制トシ承明門日華門月華門ノ回廊ヲ造リ建禮門ヲ更メ清涼殿ヲ一切舊規ニ復シ、常御殿ヲ東北ニ移シ更ニ之ヲ壯大ニシ御學問所小御所御三間等ヨリ後宮ニ至マテ煥然トシテ舊觀ニ復シタリ其古式アルモノハ尺寸モ規制ヲ失ハス殿舍門廡ヨリ窓戶陸欄ノ細ニ至ルマテ構造總テ古制ニ從ハサルナシ紫宸殿賢聖障子ハ建長ノ火災以後院工其傳ヲ失フ是ニ至テ幕府ノ儒員柴野彥輔等詳議シテ圖ヲ製シ之ヲ畫員住吉廣行ニ授ケ以テ其功ヲ畢ル是ニ於テ賢聖障子亦寛平ノ舊ニ復セリ寛政元年十一月新宮落成シ幕府成ヲ奏ス其二十二日天皇乃チ聖護院行宮ヨリ大ニ鹵簿ヲ備ヘ新宮ニ還幸ス十二月廿六日上皇青蓮院ヨリ還幸ス天皇大將軍家齊ノ功ヲ嘉シ御製ノ詩一篇ヲ賜フ其詩ニ曰ク、  
遙慕周文圃不羨漢文臺舊章一是從新築本非催百工忽告竣整駕自東回拭目向城雉城雉亦美哉兩殿應規矩四門總崔嵬燕雀繞簷集櫻橋接階裁豈其爲逸豫講禮共徘徊委佩群僚會將幣九州來素心既已足起臥感鹽梅欣然歌思動乙夜薄言裁  
上皇亦賜フニ和歌一首ヲ以テス、

殿つくりみかきたてたるうれしさのこゝろを見する大和ことの葉

家齊驚喜シ又親ヲ之ヲ臨シテ松平定信ニ與ヘ以テ其功勞ヲ賞ス曰ク此無前ノ光榮ヲ辱クスルハ實ニ卿總董ノ功ナリト定信拜受シ事ニ預カリシ諸僚ヲ召シテ之ヲ示シ邦彦ヲシテ其事ヲ記セシム四方傳ヘテ以テ盛事ト爲ス初メ定信工匠數人ニ命シテ造營工費ノ豫算ヲ立テシム幕吏ノ慣例之ヲ入札法ト稱シ其價ノ最モ廉ナル者ヲ取ル定信却テ其價額ノ最モ貴キ者ヲ取ル人之ヲ恠ム定信曰ク皇居造營ノ事用度ニ吝ナルハ幕府王室ヲ崇敬スルノ意ニ違ヒ又臣子ノ本分ニ背ク何ソ費ヲ惜マンヤト因テ部下ノ有司ニ諭シテ此意ヲ體セシメ以テ其功ヲ竣エタリト云フ徳川實記、十三朝紀聞、栗山文集、樂翁公傳、安政皇居造營志、編取、

### 尊號之議

光格天皇入リテ大統ヲ繼キ生父閑院宮太宰帥親王仁 諱典ヲ臣位ニ列スルヲ重カリ之レニ太上天皇ノ尊號ヲ奉リ以テ天下ヲ以テ養フノ意志アリ内旨ヲ幕府ニ諮詢ス幕府其議ヲ沮ミ歲月ヲ經ルモ奉答セス老中松平定信書ヲ關白鷹司輔平ニ寄セテ私ニ其不可ヲ陳シ其議ヲ止メシメント欲ス事聞ス寛政三年二月旨ヲ幕府ニ諭シテ曰ク尊號ノ事ハ徐ニ之ヲ議スヘシト因テ暫ク小一條院後一極天皇ノ殿太子降教明ノ例ニ據リ奉供一ニ太上天皇ニ準スルカ或ハ親王參朝ノ式

ニ限り、奉禮宜シク太上天皇ニ等クスヘシトノ議アリ、是歲十一月、參議以上ノ公卿ニ勅シテ、尊號當否ノ意見ヲ上ラシム、議奏中山愛親進奏シテ曰ク、謹テ國史ヲ檢スルニ、在世ノ天皇ノ生父ニ尊號ヲ奉ルコト前代其例アリ、後高倉後高倉、後堀皇ノ生父皇ノ生父後崇光院後花園天皇ノ生父諱貞成皆在世ノ尊號ニシテ追尊ニ非ス、且ツ陽光院後陽成天皇ノ生父諱誠仁既ニ尊號アリ、歷朝尊崇以テ定例ト爲ス今承久後高倉文安後崇光例ニ因リ尊號ヲ奉ルモ、誰カ非據ト謂ハシヤ、聖斷宜シク之ヲ裁スヘシト、議奏廣橋伊光亦漢土ノ經史ヲ考證シ、愛親ノ議ヲ可トス、關白一條輝良、右大臣二條治孝以下三十五人皆之ヲ贊ス、獨リ左大臣鷹司政熙父子之ヲ不可トス、中山愛親年正月、朝廷羣議ヲ以テ幕府ニ諭シ曰ク、尊號宣下ノ事ハ承前ノ例タリ、今ニ至テ廢棄スルコト能ハス、且ツ名分正シカラサレハ、孝道ニ闕クル所アリ、聖慮安カラサルナリ、宜シク速ニ遵奉スヘシ、若シ支費辨セサレハ、親王ノ殿舎ハ新築セサルモ可ナリ、供御ノ例格モ減省シテ可ナリト、正親町公幕議曰ク、時ニ古今アリ、議ニ是非アリ、前蹤必スシモ據ルヘカラスト、肯テ旨ヲ奉セス、一條輝良是時ニ當テ閑院官老病日ニ加ル、天皇軫念ニ禁エス、直ニ決行セント欲ス、公明是時幕府之ヲ聞キ、奉答文ヲ所司代相模守堀田正順ニ傳ヘテ曰ク、尊號宣下ノ事、聖慮深厚、孝道ヲ重ニスルニ出ツト雖モ、名器ハ輕カラス、濫ニ之ヲ假スヘカラ

ス、若シ聖上孝養ヲ盡サント欲セハ、宜シク親王ノ供御ヲ豐カナラシムヘシ、尊號ニ至テハ之ヲ止メラレノコトヲ請フト、議奏正親町公、明事ノ行ハレ難キヲ察シ、建議シテ曰ク、尊號ノ議ヲ止メ、宜シク三事ヲ以テ幕府ニ諭スヘシ、一ニ曰ク、閑院官ノ御領ヲ増シテ、以テ主上ノ孝養ヲ全クセン、二ニ曰ク、毎年閑院行幸ノ支費千兩ヲ上ラシメ、且ツ東宮ヲ造營セシムヘシ、三ニ曰ク、仙洞行幸ノ支費ヲ上ラシムヘシト、天皇之ヲ喜ハス、是歲新嘗祭ニ先ダテ尊號宣下ヲ行ハント欲ス、因テ書ヲ幕府ニ下シ、名器ノ給旨ニ就キ、其關係スル所、社稷ノ興廢蒼生ノ安危ニ在ルヤ否ヤヲ詰問セシム、幕府遂ニ中山愛親、正親町公、明、廣橋伊光、三卿ヲ召シテ、聖慮ノ在ル所ヲ糾サントス、人心恟々タリ、後櫻町上皇大ニ憂悶シ、内旨ヲ兩傳奏ニ傳ヘテ、其無事ヲ圖ラシム、天皇亦幕府ヲ激動スルコトヲ欲セス、暫ク尊號ノ議ヲ停ム、公明會幕府ノ奉答到ル、依然前議ヲ固執シ、且ツ曰ク、漢土三代ノ禮尊祖重宗、不貳斬不分、統ノ義アリ、其位ヲ踐マサレハ何ソ虛號ヲ有スヘケンヤト、以テ朝議ヲ沮ム、柳營天皇已ムヲ得ス、遂ニ尊號停止ノ令ヲ下ス、而シテ幕府三卿ノ東下ヲ稟請シ已マス、公明是ニ於テ中山愛親、正親町公、明、江戸ニ到ル、松平定信ト幕府ニ相見ル、二卿朝憲ニ精シク、尤モ聖旨ヲ重ンシ、抗辯屈セス、議論頗ル激烈、定信固ク執リテ聽カス、愛親是ヨリ先キ、天皇二卿ニ附スル

ニ封緘ノ宸書ヲ以テス、聖慮深密窺ヒ知ル者ナシ、公記愛親之ヲ懷ヨリ出シ、直ニ定信ニ授ケ日ク、老中謹テ宸翰ヲ拜セヨト、定信大ニ驚キ肯テ受ケス、其大旨ヲ領センコトヲ乞フ、二卿知ラスト答フ、事將ニ測ラレサラントス、殿中爲ニ震慄ス、是ニ於テ幕議日ク、天皇懿親ノ情固ヨリ感戴スル所ナリ、唯禮法ノ許サ、ル所之ヲ遵奉スルコト能ハサルノミ、今ヤ二卿ヲ招致シ、廷議ノ頼末ヲ詳ニセントス、而シテ二卿ノ應答其要領ヲ得ス、甚タ朝幕親密ノ意ニ違フト、遂ニ奉事輕卒ニシテ事體ヲ失スル者トシ、愛親ヲ閉門百日ニ、公明ヲ逼塞五十日ニ處ス、尋テ京師ニ護送シテ其職ヲ罷メシメ、愛親議奏廣橋伊光ニ謹慎ヲ命シ、勸修寺經逸、甘露寺篤長、千種有政ノ三卿ヲ譴責ス、柳菴天皇幕府ノ處置ヲ宸怒シ、因テ復タ之ヲ詰問セントス、前關白鷹司輔平諫メテ之ヲ止ム、尊號ノ議是ニ於テ熄ム、輝瓦後幕府閑院宮ノ御領ヲ増シテ三千俵ト爲セリ、尊號ノ議起リシヨリ殆ト六年、天明八年ヨリ寛政五年ニ至ル幕府竟ニ聖旨ヲ奉セス、越テ一年、閑院宮薨ス、年六十四、詔シテ自在王院ト追尊ス、輝瓦公記天皇終ニ其志ヲ行フコトヲ得ス、然レトモ此ヨリ天下朝廷ヲ尊フコトヲ知り、他日中興ノ基大ニ發生セリ、明治維新ニ及ヒ、詔シテ典仁親王ヲ追尊シテ慶弘天皇ト稱シ、其墓山陵ニ準ス、此ニ及ヒ天皇ノ叡志始メテ成レリ、

諡號復古

天保十一年十一月、上皇仙洞ニ崩ス、光格適德川齊昭水戸藩主奏シテ諡號ヲ復セシコトヲ請フ、諡號ノ制廢絶スルコト久シ、文武帝大寶年中始メテ諡號ノ制定マリシヨリ、爾來遵行スルコト十七世、光孝天皇ニ至リテ止ム、其後院號嵯峨、淳和、醍醐、冷泉院或ハ山陵ノ地名、宇多、醍醐、村或ハ離宮ノ名稱、鳥羽、六條ヲ用井テ追號トナシ、或ハ前ノ追號ニ後ノ字ヲ加ヘ、後一條ヲ初メト或ハ前ノ諡號ノ一字ヲ取ル、稱德、光仁ノ上ノ一字ヲ取リテ稱光ト曰ヒ、元明、元正ノ下ノ一字ヲ取リテ稱正ト稱ス、等ノ特例アリ、宇多帝以後ハ諡號ナク、冷泉帝以後ハ天皇ト稱セスシテ某院トノミ稱スルヲ例トセリ、是ニ至リ朝廷其議ヲ納レ、大臣以下叅議以上現任ノ公卿ニ諮詢ス、曰ク

太上皇如中古以來、雖可被奉御追號、御登壇以來、被興復古典舊儀、公事再興、不  
少御在位三十有餘年、古代茂稱ニ加之、被貴質素、不被好修飾、專御仁愛之聖慮、  
遂及衆庶、一同安懷之事、今上深御感悅、依之被奉御諡號、至萬代被竭御孝道、  
叙慮候、雖然小松帝以後、壽永帝之外、不被奉御諡號、今度被奉御諡號、可有如何  
哉、被尋所存候事、

公卿各封書ヲ上リ、諡號ノ再興ヲ可トス、議乃テ決ス、是ニ於テ所司代牧野忠雅  
ヲシテ旨ヲ幕府ニ傳ヘシム、幕府旨ヲ奉ス、是ニ於テ儒臣ニ命シテ、諡號五條ヲ

撰進セシメ、更ニ大臣參議現任ノ公卿ニ諮問シ、其一ヲ採擇セシム、五條ノ諡號ニ曰ク、

光格 尙書曰、允恭克讓、光被四表、格于上下、諡法曰、能紹前業曰光、

仁光 禮記曰、仁者義之本也、順之體也、得之尊、後漢書曰、顯其仁光其能、

光化 晉書曰、讚協時雍、光揚盛化、

欽崇 尙書曰、欽崇天道、永保天命、

峻極 禮記曰、大哉聖人之道、洋洋乎發育萬物、峻極于天、

時ニ公卿光格ノ字義引文可ナルヘシト奏スルモノ多シ、是ニ於テ諡號ヲ定メ光格ト曰フ、閏正月二十五日、諡號宣下ノ日時及ヒ勅使定メ等ノ事アリ、乃テ左近衛大將鷹司輔熙ヲ策命使兼奉幣使ノ長官トシ、右近衛權中將嵯峨實愛ヲ次官トシ、右大辨東坊城聰長右近衛權少將久世通熙侍從唐崎胤保等ヲ誅人トス、是日出納司廣筵ヲ小御所ニ敷キ、幣物ヲ陳設シテ天覽ニ供ス、二十七日昧早百官參朝ス、天皇朝餉ノ御座ニ於テ詔書及ヒ宣命ヲ覽畢リテ、宣陽殿ニ於テ先帝ノ山陵ヲ遙拜ス、次キテ宣命使ノ長官次官等長樂門ヨリ入リテ幣物ヲ奉シ、儀衛ヲ備ヘテ東山泉涌寺ニ向フ、其禮概ネ荷前ノ式ニ依ル、勅使陵前ニ着坐シ、誅人右大辨以下其後ニ從フ、傳奏奉行寺門執奏等ハ陵北ニアリ長官進ミテ宣命

ヲ讀ム、其文ニ曰ク、

天皇挂畏後月輪山陵爾恐奏賜倍奏久明久淨御意以大八州國所知

志與端拱天下治賜止三十九年無事久無故上下倍和睦久公民茂愈富

足思召毛官殿毛古乃法乃隨爾管比廢祭禮毛興賜布又諸乃事

古爾復賜多介百官毛皆慶仰公民毛厚慈手蒙戴仕奉奴讓國賜

利國家愈平爾臣庶愈忠心手懷天仕奉天此食國乃猶毛能治留事波偏爾恤賜

比矜賜加故止奈利仰畏美賜比天地止共爾長久孝道手盡志仕奉止念行

近來御藥乃事有豆驚聞食豆朝久夕止奈神祇爾祈利奉賜利賜加比志少久愈

賜比古來毛稀爾聖算手重賜比志一多比以豆喜爾一波比以豆懼知給爾早毛

朝覲乃禮手行給止者半思保之大坐坐間爾不慮毛此孝子手捨給比姑射乃霞爾

登利賜止聞食豆驚惜痛酸爾賜比大御泣哭之大坐利曾毛曾毛御名乃

事者久俱絕止奴禮孝波父手嚴爾爾須留大奈留莫止奈又大行爾同禮大名手受止奈

聞食須御諡手不奉婆山利與高久仰奉留恩德手伊何爾可須倍所念志又大臣毛

進奏須隨爾故是以豆吉日良辰手擇定豆御諡手光格天皇止稱白志奉利恒之

無岐御幣手令捧持豆奉出利正二位行權大納言兼左近衛大將春官大夫藤

原朝臣輔熙正四位下行右近衛權中將藤原朝臣實愛等手差使豆誅人手率志

恐美恐毛誅奏半志又此山爾御坐須挂畏彼代々乃御陵毛正三位行右大辨兼勘  
解由長官菅原朝臣聰長正三位下行右近衛權少將源朝臣通熙正五位下行侍  
從兼春宮權大進藤原朝臣胤保等乎志御幣乎令捧持且奉出賜布今利與後天下  
乃政波大臣乃正岐直岐心以且相穴比奈相扶奉麻爾治賜比長秋爾波○新清和  
愈孝心乎盡天怠須仕奉利皇女者一人乃令妹奈禮者○藥猶毛愛美給止乎所  
念行須天之日嗣止定賜比儲賜倍皇太子者○日月爾無事久成長勢賜止乎  
古止夜守日守爾護幸倍賜止此狀乎平久安久聞食止恐美恐美奏賜止乎  
天保十二年閏正月二十七日

讀ミ訖リテ再拜シ之ヲ次官ニ授ク次官之ヲ内豎内舍人ニ授ケ内舍人之ヲ瑞  
籬内ニ燒ク此間誅人右大辨菅原聰長大臣ニ代リテ誅詞ヲ奉ル卿侍臣等亦誅  
詞アリ誅詞ヲ奉ルコト中世以後久シク絶エ是ニ至リテ舊式ニ復ス次ニ歷世  
御陵ニ幣ヲ奉リ告クルニ此事ヲ以テス儀畢リ傳奏奉行及ヒ寺門執奏之ヲ檢  
知シ勅使還リテ復命ス明日公卿參内シテ之ヲ賀ス詔書ニ曰ク  
詔諡者德之表行之迹周家遺訓我邦舊典也仰以太上天皇叡哲温恭以御萬民  
清肅恭默以臨四海不治而人自化無爲而事寔成履唐堯之典星辰軌道行虞舜  
之政風雨順時上下平章咸歌望雲之慶華夷協和俱承就日之輝於是茂物不得

其所靡人弗蒙其恩蕩々仁化溢於八荒巍々德光格於四表宜上大號以旌盛德  
雖禮文之久闕奈孝思之無已爰上尊號恭稱光格天皇庶幾傳大名於萬代與乾  
坤以長施揚茂實於千秋與日月而久照普告天下俾知朕意主者施行  
天保十二年閏正月二十七日

二品行中務卿臣詔仁親王宣  
正四位下行中務大輔臣卜部朝臣行學奉  
正四位下行中務少輔臣藤原朝臣隨資行

二月一日太政官符ヲ以テ詔書ヲ天下ニ施行ス是ニ於テ數百年ノ廢典再興シ  
天皇奉諡ノ事永式トナレリ初メ徳川光圀心ヲ王室ニ存シ常ニ大義ヲ重シ  
名分ヲ正ス齊昭ニ至リ先志ヲ繼キ尤モ尊王ノ心アリ其夫人登美子ハ有栖川  
宮幟仁親王ノ子ナリ天皇ノ大喪ニ當リ夫人ノ兄尊超法親王私ニ夫人ニ手札  
ヲ贈リ其事情ヲ報ス其文中ニ黃門公よりも急便にて色々御大事に思召被上  
候よしなから末世には思召とほりにも不相成殘念候私迄も思召は感し入り  
まゐらせ候やうく天皇號御再興は出來させられ候御様子有かたくまゐら  
せ候トアリ然レハ此時ノ建議ハ獨リ諡號ノ事ノミナラス其他ノ事亦其中ニ  
アリシナルヘシト察セラルナリ此ヨリ二十五年孝明天皇ノ崩御ニ及ヒ大

和守戸田忠至ノ建議ニ依リ、佛式ノ葬禮ヲ廢シ、山陵ヲ築造シテ、全ク舊儀ニ復スルニ至レリ。光格天皇御送葬記、園左記、同天詩史、古典傳習所、讀史、同

將軍上洛

文久ノ初年、幕府ノ威令益行ハレヌ、海内ノ志士各處ニ屯集シ、相共ニ尊王攘夷ノ說ヲ唱フ、諸藩亡命ノ徒、響應雲集シ、京畿尤モ騷擾ス、是時ニ當リ、島津久光薩摩藩主、毛利定廣長門藩主、相踵テ京師ヲ過ク、朝廷命シテ、輦下ニ留メ、以テ浪士ヲ鎮撫セシム、二氏輦下ニ周旋シ、益、奏議スル所アリ、文久二年六月、左衛門督大原重德ヲシテ、詔ヲ奉シテ、東下セシム、島津久光旨ヲ奉シテ、陪從ス、天使江戸ニ抵リ、將軍家茂ニ三事ヲ勅ス、其一ニ曰ク、將軍宜シク諸侯ヲ率井上洛入朝シテ、内外ノ事務ヲ議決スヘシ、其二ニ曰ク、宜シク豐臣氏ノ故例ニ據リ、大藩ヲ擇ヒテ、五大老ト爲シ、以テ國政ヲ諮詢スヘシ、其三ニ曰ク、宜シク一橋慶喜ヲ以テ輔佐ト爲シ、松平慶永ヲ執政ト爲シ、各戮力協心シテ、以テ中外ヲ指麾スヘシト、將軍家茂乃チ勅ヲ奉ス、七月大ニ黜陟ヲ行ヒ、慶喜ヲ起シテ、將軍輔佐ト爲シ、慶永ヲ擧ケテ、政事總裁ト爲シ、遂ニ上洛ノ議ヲ決ス、上洛ノ擧ハ、將軍家光以來、關典ニ屬ス、是ニ至テ再興セラレ、勅使大原重德及島津久光乃チ京師ニ復命ス、八月山内豐範前土佐藩主、京師ニ入ル、詔シテ、島津氏毛利氏ト共ニ關下ヲ鎮撫セシム、是日

リ薩長土三藩ノ威望天下ニ重シ、十月權中納言三條實美右近衛少將姊小路公知ヲ以テ再ヒ勅使トシテ、東下セシム、山内豐範旨ヲ奉シテ之ニ從フ、勅使詔ヲ江戸ニ宣フ曰ク、幕府朝旨ヲ奉シテ、漸ク新政ヲ施行ス、叡感渺カラス、唯攘夷ノ議未ダ決セス、天下向フ所ヲ知ラス、其レ速ニ議決シテ、列藩ニ預告セヨ、而シテ其方略ハ、武將ノ職掌タリ、宜シク衆議ヲ盡シテ上奏スヘシト、又曰ク、攘夷ノ議ヲ定メ、之ヲ天下ニ告クルトキハ、外夷或ハ京畿ニ來寇スルモ、亦料リ難シ、故ニ禁關ノ守衛ヲ嚴ニセント欲ス、宜シク列藩ヲシテ、身幹強壯志氣忠勇ナル者ヲ貢シ、親兵トナシテ、專ラ宿衛ヲ掌ラシムヘシ、而シテ糧食機械兵員ノ多少ハ、封土ノ大小ニ準シ、擬議上奏スヘシト、將軍家茂對シテ曰ク、謹テ宸旨ヲ領ス、攘夷ノ令ヲ天下ニ布キ、親兵ヲ京師ニ設クルコトハ、臣之ヲ奉承ス、然レトモ、臣家茂既ニ征夷ノ軍職ニ服シ、兼テ右近衛大將ニ任セララル、親兵ノ守衛ハ、即チ臣ノ職掌ナリ、臣不肖ナリト雖モ、其守備ヲ嚴ニセン、而シテ攘夷ニ至リテハ、固ヨリ全國ノ兵備ヲ要ス、故ニ列藩ヲシテ、國力ヲ養ヒ、以テ方面ノ任ニ當ラシメントス、仰キ願ハクハ、此言ヲ聽納シ、給ハンコトヲ臣明春上京シテ具ニ方略ヲ奏聞セント、勅使乃チ復命ス、時ニ朝議攘夷既ニ決スルヲ以テ、公卿數十名ヲ撰ヒ、事務ヲ勾當シ、以テ將軍ノ入京ヲ待ツ、是時ニ當リ、諸侯京師ニ在リテ、禁關ヲ守ル



者八十餘名、皇威日ニ熾ナリ、文久三年正月將軍補佐權中納言一橋慶喜將軍ニ先タナテ京師ニ入り、東本願寺ニ館ス、政事總裁近衛中將松平慶永亦踵テ入京シ、二條邸ニ居ル、時ニ天下ノ浪士亦京師ニ充塞シ、攘夷ノ議朝野ニ沸騰ス、權中納言三條西季知待從橋本實梁等慶喜ノ館ニ就キ、促スニ攘夷ノ期日ヲ以テス慶喜曰ク將軍ノ入京ヲ待ナテ事ヲ決セント、浪士之ヲ聞キテ其姑息ヲ憤リ、千種ノ家臣賀川肇ヲ暗殺シ、攘夷ノ血祭ト稱シテ、其首ヲ慶喜ノ館門ニ投ス、肥後ノ人轟武兵衛、長門ノ人久坂義助、寺島忠三郎等、亦其期ヲ以テ關白鷹司輔熙ニ迫ル、洛西壬生村ノ人鵜殿鳩翁等亦上書自ラ薦ム、是ニ於テ朝廷益、浪士ヲ收用ス、二月松山藩士三輪綱一郎、會津藩士大庭強平、江戸人師岡節齋等十餘人、洛北等持院ニ入り、足利三將軍尊氏義隆木像ノ首ヲ斬リ、之ヲ三條磧ニ梟シ、以テ其罪ヲ暴白ス、蓋シ諷スル所アルナリ、是月十三日征夷大將軍德川家茂江戸ヲ發シ、陸路西上ス、權中納言德川慶篤水戸藩主以下扈從甚タ衆シ、三月四日京師ニ入り、二條城ニ館ス、七日始テ入朝ス、御劔一口鞍馬一頭黄金百枚白金千枚蘭絹五十卷綿千匹屏風一雙掩障一雙唐ノ名畫雙幅青磁香爐書案匣硯等ヲ獻シ、儲君親王ニハ名刀雲生一口馬直銀五百枚黄金二十枚大和錦五十卷綿五百屯名畫一幅書架花瓶ヲ獻シ、准后ニハ黄金白金綸子綿等ヲ進ム、内親王親子天璋院敬子モ

亦白金緞子紗綾ヲ獻シ、親王ニハ白金緞子綸子ヲ獻ス、天皇嘉尚ス、謁見儀畢リ、對テ便殿ニ賜フ、恩意優渥ナリ、將軍拜謝シテ曰ク、臣無狀幼ニシテ重職ニ膺リ大任ヲ叨ニス、上陛下ノ盛德ニ負キ、下蒼生ノ大望ニ背ク、聖諭ヲ奉スル以來、既往ヲ追咎シ、深ク自ラ惶悚ス、今ヤ闕下ニ拜趨シ、天顏ニ咫尺ス、恩遇至渥、臣言フ所ヲ知ラスト、天皇曰ク、汝能ク百年ノ闕典ヲ修メ、諸侯ヲ帥キテ朝覲ノ儀ヲ舉ク、朕深ク之ヲ嘉ス、方今國事多難、議論紛然タリ、汝其レ群口ノ惑ハス所トナルコト勿レト、將軍感謝シテ退ク、奏シテ供御貢賦ノ額數ヲ増シ、伊勢加茂ノ祭典ヲ復シ、列聖ノ山陵ヲ修メ、春秋行幸ノ式例ヲ定ム、今日、近事紀要、近世史、大政紀要、尊攘紀事初メ三代將軍家光ヨリ入朝セサルコト、已ニ二百年此ニ及ヒ、勅命ヲ以テ之ヲ召シ、闕下ニ拜趨セシメ、又二條行幸以來ノ廢典ヲ舉ケ、將軍ヲシテ天下諸侯ヲ率井扈從セシム、此時攘夷ノ實ヲ舉クルニ及ハスト、雖トモ、朝權霸府ニ行ハレ、他日大政返上ノ機ハ、已ニ此ニ見エタリ、

和宮東下

外艦來航シ、幕府政ヲ失ヒシヨリ、尊攘ノ說益、起リ、處士時政ヲ橫議シ、諸親藩亦幕府ヲ助ケス、幕府殆ト孤立ス、是ニ於テ幕議以爲ラク、方今ノ策、公武合體ヲ表シ、以テ海内ノ人心ヲ一ニスルニ在リト、乃チ皇妹和宮親王ノ降嫁ヲ乞ハン

トス、萬延元年八月將軍家茂侍女勝光院橋本氏ヲシテ京師ニ入ラシメ、和宮ニ  
 尙セシコトヲ奏請ス、是ヨリ先、和宮已ニ有栖川宮ニ適クノ約アリ、故ニ之ヲ辭  
 ス、天皇亦聽サス、橋本氏憂慮シ、百方請フテ止マス、十一月朔シテ皇妹和宮ヲ家  
 茂ニ釐降スルコトヲ許ス、蓋シ吉子内親王許嫁ノ例ニ依ル、吉子内親王ハ、盛元  
 ニ許嫁ス、宋繼早ク、文久元年四月十九日和宮ヲ以テ内親王ト爲ス、二十四日  
 内親王桂殿ヨリ石清水ノ廟ニ詣ル、堂上堂下及武人等從者多シ、五月八日内親  
 王修學院ニ遊觀セント欲ス、幕府爲ニ之ヲ修ス、遊期ノ前夜、松樹故ナクシテ倒  
 ル、此異事アリシヲ以テ、遂ニ其期ヲ延フ、廿九日内親王修學院ニ遊フ、途ニ加茂  
 ノ廟ニ謁シ、此ニ在リテ西陣ノ工女數人ノ錦綺ヲ織ルヲ觀ル、十月三日内親王  
 牛車ニ乘リテ、祇園ノ祠ニ詣ル、之ヲ東下ノ首途ト爲ス、權大納言中山忠能權中  
 言菊亭實順參議右近衛中將藤原實麗左近衛中將藤原定國藏人頭右大辨羽室  
 長順等之ニ從フ、其車ハ所謂絲毛ニテ紫絲ヲ懸ケ、金碧ヲ鏤メ、儀觀華美ヲ極ム、  
 二十日内親王遂ニ東下ス、其生母觀行院典侍ノ局庭田氏、大納言權本  
 實久ノ女權大納言  
 中山忠能以下公卿及幕營ノ侍女清水谷氏若年寄遠江守加納久徵高家右京大  
 夫大澤基暢等扈從甚多シ、十一月江戸ニ抵リ、清水氏ノ遺第ニ館ス、十二月十一  
 日内親王觀行院庭田氏ト與ニ、牛車ニ乘リテ幕營ニ入ル、是ヨリ朝廷幕府ヲ親

シムノ形アリ、而シテ幕府ノ實情ハ、反テ甚タ安カラサルモノアリ、今日、他、近世  
 要、近世  
 史、紀、大、政、紀

癸亥之變

幕府攘夷ノ期ヲ定メ、令ヲ列藩ニ下スマ、長藩首トシテ英米軍艦ヲ赤間關ニ砲  
 撃ス、文久三年六月、天皇左近衛少將正親町公董ヲ長門ニ遣シ、攘夷ノ期ヲ愆ラ  
 サルヲ賞シ、紅白ノ御旗ヲ毛利慶親ニ賜ヒ、益、之ヲ獎勵ス、又諸藩ニ詔シテ曰ク、  
 長藩既ニ兵ヲ開ク、袖手傍觀スルハ宸旨ニ非ス、宜シク同心戮力シテ速ニ掃攘  
 ノ功ヲ奏スヘシト、將軍家茂亦攘夷ノ詔ヲ奉シテ東歸ス、而シテ幕吏素ヨリ攘  
 夷ノ意ナシ、唯陽ニ朝旨ヲ奉スルノミ、是ニ於テ毛利氏奏シテ車駕先ツ大和ニ  
 幸シ、以テ親征ノ意ヲ示サシコトヲ請フ、議奏權中納言三條實美等尤モ之ヲ愆  
 憑ス、八月十三日、遂ニ詔シテ曰ク、攘夷祈請ノタメ大和ニ行幸シ、畝傍山陵及春  
 日祠ヲ拜シ、因テ暫ク蹕ヲ駐メテ親征ヲ議シ、而シテ後大廟ニ謁セント、時ニ備  
 前藩主池田茂政入朝シテ、親征ヲ止メンコトヲ請フ、聽カス、尋テ廿五日發轅ノ  
 詔アリ、時ニ事忽遽ニ出テ、危機甚迫ル、皇姊桂宮事ノ急ナルヲ見テ、入テ諫メテ  
 曰ク、陛下草莽浮浪ノ言ヲ採用シ、萬乘ノ尊ヲ以テ、輕シク官闈ヲ出ツ、恐クハ祖  
 宗ノ意ニ非サラント、天皇稍、悔心アリ、適、都下流言アリ曰ク、是レ毛利氏陰ニ謀

リ天子ヲ狹ミテ天下ニ號令セシコトヲ欲スルナリ、道路恐クハ變アラント、是ニ於テ天皇遽ニ尊融法親王中川宮ヲ召シテ之ヲ謀ル、親王素ト親征ヲ可トセス、奏シテ曰ク、陛下苟モ其不可ナルヲ知ラハ、速ニ宸衷ニ斷セヨ、臣請フ力ヲ盡シテ處分セント、天皇乃チ親王ニ勅シテ大事ヲ處セシム、十八日味爽、親王俄ニ入朝シ、急ニ守護職松平容保所司代稻葉正邦ヲ召シ、命シテ九門ヲ關シ、兵ヲ備ヘテ之ヲ守ラシメ、廷臣ト雖トモ召ニ非レハ入ルヲ許サス、前關白近衛忠熙右大臣二條齊敬等ヲ召シ、權中納言三條實美以下廷臣數十名ノ入朝ヲ禁シ、在京ノ諸藩ヲ部署シテ内外ノ諸門ヲ守ラシム、衆皆戎裝シ砲ヲ列ネテ之ニ備フ、物情騷然タリ、毛利元純、吉川經禮共ニ長等變ヲ聞キテ故ヲ知ラス、衆ヲ率井テ馳セ至ル、諸門戒嚴シ、入ルヲ得ス、衆大ニ驚擾シ、馳セテ關白鷹司輔熙ノ第二集リ、冤ヲ訴ヘテ已マヌ、而シテ輔熙亦朝禁ヲ受ク、事ヲ辨スルコト能ハス、是ヨリ先親兵ノ外ニ在ル者、變ヲ聞キテ馳セ入ル、門已ニ閉ツ、乃チ三條實美ノ第二麿集シ、皆曰ク、親兵ハ緩急ニ備フルモノナリ、請フ九門ヲ排シテ入りテ護ラント、實美未タ其故ヲ詳ニセス、衆ヲ率井テ急騎入朝ス、門兵之ヲ拒ム、入ルコトヲ得ス、亦輔熙ノ第二至ル、兵甲闐咽シ、一第益喧擾ス、尊融法親王、近衛二條以下諸公卿及松平容保等ヲ會シ、議シ曰ク、長藩行幸親征ニ托シ、陰ニ不良ヲ圖ル、三條實美

等之ニ黨シ、旨ヲ矯メテ令ヲ布ク、當ニ其罪ヲ正スヘシト、是ニ於テ勅シテ關白鷹司輔熙ヲ召シ、行幸中止ノ命ヲ下シ、更ニ權中納言柳原光愛ヲ輔熙ノ第二遣シ、元純經禮等ノ堺町門ノ戍衛ヲ罷メ、衆ヲ率井テ闕下ヲ退カシム、元純經禮等分疏スレトモ聽カス、三條實美等事ノ破レタルヲ知り、親兵ヲ率井、長兵ト共ニ洛東妙法院ニ屯ス、權中納言三條西季知、少將東久世通禧、侍從四條隆調、右馬頭錦小路賴德、修理大夫壬生基修、主水正澤宣嘉ノ六卿皆會ス、衆茫然出ツル所ヲ知ラス、元純七卿ニ謂フテ曰ク、君側姦人アリ、讒構已ニ深シ、宜シク相共ニ國ニ就キ、以テ後舉ヲ圖ルヘシト、七卿ニ勸メ服ヲ變シ、十九日拂曉、雨ヲ冒シ南走ス、親兵尾シテ之ニ從フ、七卿朝譴ヲ憚リ、衆ヲ論シテ散遣セシメ、獨リ元純等ノ衆ヲ率井、海ニ航シテ長門ニ赴ク、朝廷大ニ怒リ、即日七卿ノ官爵ヲ削リ、尋テ毛利氏父子ノ入京ヲ停メ、長人ノ京師ニ駐ルヲ禁ス、是ニ於テ遂ニ詔ヲ下シテ曰ク、行幸親征、暫ク其期ヲ延フ、且ツ近日勅旨、信偽錯出ス、然レトモ凡ソ十八日以後ノ令ハ、實ニ朕カ意ニ出ツ、諸藩其レ之ヲ審ニセヨト、尋テ前大納言正親町實愛、柳原權中納言光愛、右衛門督廣橋胤保ヲ以テ議奏トナス、關白鷹司輔熙答ヲ引キテ辭職ス、朝議宥メテ問ハス、冬ニ至リ終ニ辭免ス、右大臣二條齊敬之ニ代ル、攘夷ノ旨ハ變更ナシト雖トモ、大和行幸ノ事ハ、是ニ於テ一變セリ、此ヨリ長州

雪冤ノ事起リ、甲子ノ戰トナリ、天下益多事ナリ、尊攘紀略、近事紀略、今日録、嘉永明治年間錄、大政紀要、賀茂石清水行幸、

文久三年將軍家茂ノ上洛スルヤ、朝廷銳意以テ攘夷ヲ決セント欲ス、是歲三月十一日天皇賀茂兩社ニ幸ス、是ヨリ先、毛利慶親前長門藩主奏シテ行幸ノ興ヲ擧ケ、以テ親征ノ端ヲ啓カシテ請フ、朝議之ニ從フ、是ニ至テ之ヲ行フ、是日關白鷹司輔熙以下諸公卿扈從ス、而シテ將軍家茂權中納言一橋慶喜權中納言德川慶篤水戸藩主以下、在京ノ諸侯ヲ率井テ、鳳輦ニ供奉ス、鹵簿極テ盛ナリ、至尊深宮ノ中ニ恭默スルコト、此ニ二百年、四方傳ヘテ盛事トナス、此日遠近ノ士女縱觀スル者、道路ニ充テ墻堵ニ塞リ、或ハ感泣スル者アリ、次日將軍親賀ス、天皇宴ヲ賜ヒテ之ヲ勞フ、慶喜以下亦從フ、皆天顏ヲ拜スルコトヲ得タリ、時ニ朝廷攘夷ヲ議スルコト、倍、急ナリ、浪士等復松平慶永ニ逼リ、其期ヲ決セント欲ス、慶永之ヲ病ム、上表シテ總裁職ヲ辭シ、未タ允許ヲ得ス、夜京師ヲ脱シテ國ニ還ル、幕府命シテ其藩ニ幽閉ス、島津久光久シク輦下ニ在リ、朝廷深ク倚任ス、而シテ或ハ其專ナルヲ議スル者アリ、是ニ至テ乃々上表シテ曰ク、臣曩ニハ内旨ヲ奉シテ闕下ニ留マリ竊ニ天下ノ形勢危急ナルヲ觀テ、叨ニ自ヲ揣ラス、百方策ヲ畫シテ、公武ノ重職ニ獻ス、而シテ愚忠未タ信セラレズ、讒口滋多シ、凡ソ建言スル所、往

々行ハレズ、願フニ其言既ニ用ヰラレズ、而シテ猶ホ徘徊遲疑セハ、讒謗益起リ、以テ闕下ノ紛擾ヲ致サン、且ツ攘夷ノ期蓋シ近ニアリ、弊邑方ニ要衝ニ當ルヲ以テ、防戰ニ備ヘサルヘカラス、彼此方ニ急ナリ、命ヲ待ツコトヲ得ス、將ニ明且ヲ以テ程ヲ發セントス、伏シテ願ハクハ其他賜ナキヲ察セヨト、書纒ニ奏ス、已ニ出テ、途ニ就ケリ、是ヨリ先島津久光ノ從士英人ヲ生麥ニ斬ル、是ニ至テ英人幕府ニ逼リ、償金ヲ要求ス、老中大ニ怖レ病ト稱シテ出テス、殆ト事ヲ視ル者ナキニ至ル、是ニ於テ將軍家茂奏シテ東歸セント請フ允サス、初メ將軍ノ西上スルヤ、限ルニ在京十日ヲ以テス、時ニ前大納言德川慶勝尾州藩主京師ニ在リ、以テ不可トナス、奏シテ之ヲ輦下ニ留メ、以テ君臣一和ノ實ヲ示サント請フ、朝議之ヲ然リトス、乃々家茂ニ詔シ、仍ホ京ニ在リテ諸藩ヲ指揮シ、以テ守禦ノ策ヲ盡サシム、家茂勅ヲ奉ス、因テ更ニ權中納言德川慶篤ニ詔シ、將軍ニ代リテ關東ヲ守衛セシメ、且ツ曰ク、宜シク先世ノ遺志ヲ繼キ、速ニ尊攘ノ効ヲ奏スヘント、家茂乃々慶篤ヲ江戸ニ遣シ、慶勝及老中等ト議シテ事ヲ決セシム、四月十一日天皇男山八幡宮ニ行幸ス、御路ハ油小路、橫大路、源美豆、關白鷹司輔熙、左大臣一條忠香以下諸公卿、及權中納言一橋慶喜、近衛中將松平容保、近衛少將毛利定廣以下在京ノ諸侯皆供奉ス、天皇乃々攘夷ノ節刀ヲ將軍家茂ニ授ケント欲シ、新ニ後鳥羽天皇御

製ノ寶劔ヲ裝ヒ、之ヲ載セテ行ク、將ニ祠前ニ就キ之ヲ家茂ニ賜ハラントス、是日家茂病ト稱シテ出テス、天皇乃々之ヲ慶喜ニ授ケント欲シ、召シテ廟階ニ進マシム、慶喜窮蹙俄ニ疾ト稱シテ祠下ル、浪士等乃々罵リテ曰ク、咄情夫事ヲ共ニスルニ足ラスト、遂ニ迫テ天皇ノ親征ヲ請フ、朝廷之ヲ慰止ス、二十一日將軍家茂入朝シ、遂ニ奏シテ五月十日ヲ以テ攘夷ノ期トナシ、因テ徧ク諸侯ニ告ク、翌日京師ヲ發シ、石清水ノ廟ヲ拜シ、大阪ヨリ船ニ乘リテ、紀伊淡路攝津等ノ海岸ヲ巡視シ、還リテ大阪城ニ留ル、五月十一日俄ニ詔シテ之ヲ召ス、即々京師ニ還ル、而シテ内外支梧スル所アリ、攘夷ノ事遂ニ行ハレス、然レトモ車駕神宮ニ行幸シ、大將軍天下ノ侯伯ヲ率井テ之ニ扈從スルハ、實ニ稀世ノ盛事ニシテ、天下ノ人皆朝廷ノ尊ヲ知リ、尊王ノ義ヲ唱フルコト、此ヨリ益盛ンナリ、紀世史考、近事、紀世大政紀要、

甲子ノ變

癸亥ノ變、毛利氏ノ俄ニ朝譴ヲ受クルヤ、一藩痛憤シ、累リニ上疏シテ其冤ヲ訴フ、池田慶德因幡藩主亦其憤激シテ變ヲ生センコトヲ恐レ、上書シテ寬典以テ毛利氏ヲ處センコトヲ請フ、朝廷皆省ミス、是ニ於テ毛利氏ノ宰福原元佃越後ト稱ス益田親施右衛門介國司朝相備前ト稱ス等策ヲ決シテ京師ニ向フ、蓋シ潛ニ約スル所

アルナリ、元治元年甲子六月福原元佃衆ヲ擁シテ海路大阪ニ抵リ、進ミテ伏見ノ藩邸ニ入り、聲言ス將ニ江戸ニ赴カントス、姑ク邸事ヲ以テ此ニ留ルト、尋テ益田親施亦衆ヲ率井テ淀河ヲ泝ル、曰ク將ニ藩主ノ爲メ男山八幡ノ祠ニ祈請セントスト、遂ニ入りテ山崎ニ屯ス、其徒入江弘致等上疏ヲ具シ、之ヲ老中稻葉正邦ニ付シ從藩主及在京諸藩ニ移シテ、曰ク寡君父子一意攘夷ノ勅旨ヲ奉シ、鞠躬盡瘁力ヲ王事ニ勤ムルコト茲ニ多年、何ソ圖ラン去歲八月忽々天怒ヲ蒙リ、臣屬ノ入京ヲ禁セラル、闔藩驚愕其故ヲ知ラス、爾來惶恐罪ヲ待ツコト已ニ一年未タ天日ヲ仰クコトヲ得ス、哀訴路絶エ、關ヲ望ミテ號泣スルノミ、臣等踟躕自ヲ禁セス、敢テ私ニ願フ所アリ、伏シテ願クハ三條氏以下ノ官爵ヲ復シ、寡君父子ヲ闕下ニ召シ、親シク玉音ヲ賜ラハ、一再問ヲ終ラスシテ、宸疑氷釋シ、以テ其他ナキヲ悉スニ足ラント、書至ル、諸藩所見ヲ附シ、之ヲ傳奏及所司代ニ致ス、而シテ未タ報セス、山崎ノ屯兵來島政久又兵衛稱ス等兵三百ヲ分テ戎裝鼓行、嵯峨天龍寺ニ赴ク、京師爲メニ戒嚴ス、幕府乃々監察永井尙志等ヲ伏見ニ遣シ、福原ニ諭シテ山崎嵯峨ノ黨ヲ國ニ還ラシメントス、福原命ヲ奉セス、既ニシテ國司朝相脫藩ノ徒ヲ鎮撫スト號シ、亦衆ヲ率井テ嵯峨ニ合ス、是ニ於テ福原ハ伏見ニ在リ、國司ハ嵯峨ニ在リ、益田ハ山崎及天王山ニ在リ、三營鼎峙シ、隱然トシテ拮

角ノ勢ヲ爲ス、衆凡ソ三千、糧ヲ儲ヘ仗ヲ列ネ、日夜京師ヲ窺フ、物情駭然、九門ノ衛士甲ヲ解カサルモノ數日、時ニ權中納言一橋慶喜京師ニ在リ、一日便服シテ朝ス、人心稍安シ、守護職松平容保會津藩主方ニ病ニ臥ス、請テ凝華洞俗ニ御花ニ屯シ、以テ禁闕ヲ守衛ス、七月十七日尊融法親王關白二條齊敬以下諸公卿、及守衛總督一橋慶喜、守護職松平容保、老中稻葉正邦、所司代松平定敬桑名藩主等皆入朝シテ、長藩ノ處分ヲ議ス、是ヨリ先、廷臣多ク其訟フル所ヲ允サント請フ、是ニ至テ薩摩土佐久留米三藩ノ重臣連署建議シテ曰ク、長藩名ヲ哀訴ニ托シ、兵ヲ挾ミ衆ヲ擁シテ、京ニ屯集ス、朝旨寛大ガメテ之ヲ撫綏ス、而シテ彼レ悍然トシテ命ニ抗シ、肯テ退默シテ上裁ヲ待タス、假令其言理アルモ、上ヲ要スルコト、此ニ至ル、措テ間ハサレハ、恐クハ朝威地ニ墜テ、今ヨリ以後何ヲ以テ不臣ヲ懲サン、臣等既ニ九門ヲ守衛ス、敢テ死力ヲ効サ、ランヤト、朝議乃チ決ス、令ヲ諸藩ニ傳ヘ追討セシメ、其向フ所ヲ部署ス、十八日傳奏權大納言坊城俊克京師長藩ノ邸監乃美織江ヲ召シ旨ヲ傳フ、一橋慶喜亦之ヲ召シ諭シテ曰ク、今日ヲ限り、兵ヲ收メ國ニ還リ、以テ命ヲ待ツヘシ、然ラサレハ則チ之ヲ討セント、織江命ヲ三營ニ傳フ、衆憤激シテ曰ク、此ニ至ル是レ皆肥後守松平容保ノ讒構ニ由ル、當ニ彼ノ罪ヲ鳴ラシ、一舉シテ之ヲ殪スヘシト、時ニ久坂通武越前藩主獨リ之ヲ止メテ

曰ク、今暴ニ兵ヲ以テ闕ニ迫ラハ、彼レ至尊ヲ挾ミテ我ニ臨マン、我逆名ヲ免レスシテ、彼ノ奸計乃チ中ラン、是レ得計ニ非ス、請フ朝命ヲ奉シ、退テ兵庫ニ屯シ、以テ嗣君毛利定廣ノ至ルヲ待タント、眞木保臣和泉藩主斥ケテ曰ク、少輩何ソ大事ヲ知ラン、一タヒ此機ヲ失ハ、竟ニ再舉ノ期ナカラシ、今日ノ事、但タ尸ヲ闕下ニ横タヘ、以テ君恩ヲ報スルニ在ルノミ、復多言スルコト勿レト、議遂ニ決ス、先ツ凝華洞ヲ襲ハントシ、檄ヲ在京諸藩ニ移シテ、其由ヲ告ケ、即夜三營齊シク兵ヲ發シ路ヲ分ケテ京師ニ向フ、益田親施獨リ其兵一百餘ヲ以テ山崎ニ留ル、斥候急テ京師ニ報ス、是ニ於テ慶喜正邦定敬等皆馳セテ闕ニ赴ク、容保亦病ヲ扶ケテ入朝シ、九門ヲ戒メ、隊ヲ整ヘ、以テ敵ヲ待ツ、京師ノ民變ノ生スルヲ知リ大ニ怖レ負擔シテ四方ニ奔竄ス、長藩ノ將福原元佃兵凡ソ五百ヲ率、夜四更ヲ以テ伏見ヲ發シ、鼓噪シテ深草村ニ至ル、時ニ大垣藩ノ兵官道ヲ守ル、隊長小原仁兵衛越前藩主厚席ヲ積ムコト、丈餘燈ヲ地ニ著ケ、兵ヲ路傍ニ伏シ、以テ之ヲ待ツ、先鋒利アラズ、長兵勢ニ乘シテ進撃ス、彈丸盡ク空ヲ掠ム、俄ニシテ伏兵起リ、左右銃撃ス、福原丸ニ中リ馬ヨリ墜ツ、身ヲ脱シテ遁ル、長兵遂ニ潰ユ、彦根藩ノ兵藤森ヲ守ル、長兵ノ北ルヲ追ヒ伏見ニ至リ、火ヲ縱テ其邸ヲ燒ク、長人盡ク遁走ス、是ニ於テ大垣ノ兵書ヲ飛シテ捷ヲ報ス、時方ニ天明、嗟峨ノ長兵既ニ禁

門ニ迫ル嵯峨ノ長兵凡ソ八百帷子辻ヨリ分テ三隊ト爲ス第一隊來島政久之  
 カ長タリ第二隊兒玉小民部之カ長タリ共ニ蛤門ニ向フ第三隊ハ國司朝相親  
 ラ之ヲ率井中立賣門ニ向フ時ニ會津藩兵蛤門ヲ守ル桑名藩兵之ヲ援ク敵ヲ  
 望テ砲撃ス來島短兵接戰其勢當ルヘカラス官兵退テ門ヲ鎖テ防戰ス長兵巨  
 砲ヲ發シテ之ニ迫ル官兵門ヲ開テ突出ス時ニ兒玉ノ兵下立賣門ノ牆壁ヲ壞  
 テ圯入ス來島之ニ乘シテ急撃ス我兵腹背敵ヲ受ケ苦戰ス久保半次郎等之ニ  
 死ス隊長坂本角兵衛衆ヲ指麾シ連ニ砲撃ス長兵披靡ス來島衆ヲ厲シテ奮進  
 ス巨砲交發ス響宮闕ニ轟キ硝煙天ニ漲ル會長ノ伏兵有富某等凡ソ八十人勸  
 修寺日野等ノ邸ヨリ起リ縱橫奮撃ス會桑ノ兵大ニ潰ユ來島等直ニ凝華洞ニ  
 迫ル容保巳ニ朝スト聞キ轉シテ宜秋門ニ向フ時ニ薩藩ノ兵乾門ヲ衛ル隊長  
 吉利郡吉急ヲ見テ馳セ至リ砲ヲ列ネテ橫ニ長ノ中堅ヲ撃ツ長兵亂ル會桑ノ  
 兵勢ヲ得テ返鬪ス來島咄嗟奮戰敢テ屈セス薩兵之ヲ狙撃ス來島腋ヲ傷キ馬  
 ヨリ墜ツ其姪北村金吾ヲ戒メ首ヲ剄シテ國ニ送ラシム長兵大ニ阻喪ス兒玉  
 衆ヲ厲シテ死戰スレトモ支ヘス遂ニ敗レテ走ル是ヨリ先國司進テ中立賣門  
 ニ至ル一橋ノ兵ニ會フ一撃之ヲ破リ逃ルヲ追テ烏丸ヲ南ス長兵往々伏兵ノ  
 爲ニ狙撃セラル國司其由ル所ヲ知ラス甲ヲ按シテ遲疑ス薩藩ノ隊長仁禮源

之丞兵數百ヲ以テ其背ヲ撃ツ長兵色動ク既ニシテ蛤門ノ敗兵至ル一橋及薩  
 會桑ノ兵勢ヲ合セテ掩撃ス長兵大ニ敗レ國司僅ニ身ヲ以テ免ル山崎ノ長兵  
 ハ眞木保臣久坂通武寺島忠三郎ヲ以テ隊長トナス十九日味爽嵯峨ノ兵ニ後  
 レテ發シ途ヲ久世ニ取リ北上京師ニ入ル時ニ禁門ノ戰方ニ酣ナリ乃チ進テ  
 丸太町ニ至リ將ニ鷹司邸ニ據ラントス第八堺町門内ニ在リ眞木等三人入り  
 テ前關白輔照ニ謁シ狀ヲ述フ言未タ終ラス堺町門ノ守衛越前藩ノ兵桑彦二  
 藩ノ兵ト共ニ邸ノ三面ヲ圍ム是ニ於テ久坂西門ヲ開キ吶喊シテ越兵ヲ撃チ  
 寺島北門ヨリ出テ桑彦ノ隊ヲ衝ク三藩ノ兵交援ケテ之ニ當ル而シテ利ア  
 ラス長兵一蹴シテ將ニ凝華洞ヲ襲ハントス彦根藩ノ兵八百北ヨリ來テ之ヲ  
 遮ル官兵勢ヲ得テ砲戰時ヲ移ス彦兵西郷政之介自ラ一番槍ト稱シ槍ヲ揮テ  
 戰ヲ挑ム長兵中村恒次郎之ニ當ル遂ニ西郷ノ胸ヲ鏃シ將ニ剄ネントス彦兵  
 木津右衛門ハ西郷ノ友ナリ之ヲ視テ大ニ怒リ馳セテ中村ノ腋ヲ鏃ス中村亦  
 斃ル兩軍酣戰殺傷相當ル會蛤門ノ戰巳ニ終リ會薩ノ兵盡ク堺町門ニ聚ル一  
 橋慶喜自ラ兵ヲ率井テ來リ援ク長兵善ク戰フ勝敗未タ決セス官兵火ヲ鷹司  
 ノ邸ニ放チテ之ヲ攻ム長兵大ニ潰ユ久坂等身數劊ヲ被リ眞木ニ謂フテ曰ク  
 公等山崎ニ還リ嵯峨ノ兵ト共ニ再撃ヲ圖レト遂ニ屠腹シテ死ス眞木等乃チ

山崎ニ走り、益田國司ニ説テ國ニ還ラシメ、自ラ松山深藏等十七人ト與ニ、死ヲ  
決シテ留ル、曰ク此役ヤ實ニ吾輩ノ主張スル所タリ、而シテ敗績此ニ及フ、何ノ  
面目アリテ、復タ長人ヲ見シヤト、廿日薩ノ兵嵯峨ヲ追索ス、兵已ニ走ル、乃々長  
營ヲ焚キ、遺糧五百苞ヲ得タリ、後之ヲ都下罹災ノ民ニ支給スト云フ、廿日會桑  
二藩ノ兵千餘人進テ山崎ヲ攻ム、眞木等自ラ營ヲ焚キ、自刃シテ死ス、毛利定廣  
大兵ヲ從ヘテ、多度津ニ在リ、京師ノ敗報ヲ聞キ、驚愕シテ國ニ還ル、是ニ於テ長  
人蹤ヲ京師ニ絶ツ、初メ長軍ノ敗ルヤ、殘兵多ク市中ニ潜匿ス、官兵所々ニ大砲  
ヲ放チ之ヲ逐フ、京民四散、火ヲ救フモノナシ、適風起リ、火勢延蔓、北ハ正親町春  
日街ヨリ、南ハ七條野外ニ至リ、東ハ鴨河ヨリ、西ハ堀川ニ至ル、公卿ノ第宅十八、  
武人ノ邸館五十、名福巨利民舍凡ソ三万八千三百有餘ヲ焚蕩シ、京都ノ中央全  
ク焦土トナレリ、世之ヲ鐵砲火事ト稱ス、元治、近事紀略、今日、開國

平安通志卷之五十三

平安通志卷之五十四

湯本文彦等編

第三編

大政返上

慶應二年八月、將軍家茂大阪城ニ薨シ、征長ノ師亦利アラヌ、幕府終ニ使ヲ長門  
ニ遣シ和議ヲ講シ、兵ヲ戡メントスルニ至ル、是ヨリ大藩復幕府ノ節度ヲ受ケ  
ス、徳川氏ノ威權竟ニ地ニ墜ツ、一橋慶喜入リテ宗家ヲ繼キ、軍職ヲ襲クト雖モ  
時局多難衆論紛々、海内殆ト統一スル所ナシ、時ニ三條實美以下ノ諸卿ハ太宰  
府ニ竄居シ、薩長及自餘各藩ノ有志密ニ意ヲ通シテ討幕ヲ圖リ、密使ヲ岩倉具  
視ニ通ス、具視時ニ譴ヲ蒙リテ京北ニ閉居シ、潜ニ興復ノ策ヲ畫ス、中山忠能中  
御門經之正親町三條實愛等亦其謀ニ預ル、忠能等密奏シ毛利敬親父子ノ譴責  
ヲ解キ、薩長二藩ヲシテ幕府ヲ討セシメンコトヲ請フ、計畫已ニ定マリ、討幕ノ  
密勅下テ薩長人ノ手ニ在リ、此時ニ當リ前土佐藩主山内豐信政令二途ニ出ツ  
ルヲ憂ヘ、幕府ニ建白シテ曰ク、方今朝廷幕府公卿諸侯、執ル所合一セス、互ニ猜  
忌反目ス、禍亂ノ生スル且夕ニアラントス、天下ノ危機此ニ至ル、是誰ノ罪ソヤ、  
既往ヲ問フモ已ニ及ハス、唯願ハクハ活眼ヲ以テ時勢ヲ洞視シ、英斷ヲ施シテ、



萬民ト同心協力シ、萬世ニ慙ナス萬國ニ愧ナサルノ大規模ヲ建テシコトヲ、臣以爲ラク方今ノ計、政體ヲ一變シ、至誠ヲ以テ朝廷ヲ奉シ、信義ヲ以テ萬國ニ接スルニ在リト、因テ旨ヲ授ケ、其臣神山左多衛、福岡藤次、後藤象次郎、寺村左膳ヲ京師ニ遣シ、朝廷幕府ノ間ニ周旋セシメ、別ニ經國ノ大計ヲ條陳セシム。曰ク、政事ノ大權ハ、之ヲ朝廷ニ歸スヘシ、曰ク、京師ニ議政所ヲ置キ、以テ萬機ヲ決スヘシ、曰ク、議政所ハ上下ニ分テ、議官ハ上公卿ヨリ、下士庶ニ至ルマテ、宜シク正明純良ノ士ヲ選舉スヘシ、曰ク、學校ヲ都會ノ地ニ設ケ、人材ヲ教育シテ、國家ノ用ニ供スヘシ、曰ク、海外各國ト規約ヲ確定シ、通商ヲ開キ、誠實ヲ主トシ、信義ヲ守ルヘシ、曰ク、海陸ノ軍局ヲ京攝ノ間ニ置キ、親兵ヲ以テ帝都ヲ衛ラシムヘシ、曰ク、古來ノ弊風ヲ廢シ、枝葉ニ馳セス、根本ヲ立ツルヲ以テ主トスヘシ、曰ク、古來朝廷ノ法制、時勢ニ適セサルモノハ、之ヲ更革シテ、獨立ノ國本ヲ建ツヘシ、曰ク、議事ハ必ス私心ヲ去リ、公平ヲ本トシ、既往ノ是非ヲ問ハス、將來ノ一新ヲ要スヘシ、以上八項ハ、内外ノ要件、今日ノ急務タリ、請フ之ヲ採擇セヨト、尋テ淺野茂長安慶藩主亦幕府ニ建言シ、慶喜ニ説クニ、大義ヲ以テシ、其政柄ヲ解カントナ勸ム、慶喜固ヨリ幕威ノ日ニ微ニシテ、天下ヲ制スヘカヲサルヲ知ル、是ニ於テ意ヲ決シ、大政返上ノ奏案ヲ草シ、以テ列藩ノ意見ヲ諮ハントス、慶應三年十月十

四日、大ニ諸藩主及ヒ國事ニ力ヲ盡セル藩士ヲ二條城ニ會シ、政權ヲ朝廷ニ奉還スルノ意ヲ告ケ、且ツ其奏案ヲ示シ、以テ意見ヲ陳述セシム、譜第將士等、意頗ル狐疑ス、而シテ薩藩小松帶刀土藩後藤象次郎、備前藩牧野權六郎、宇和島藩都筑莊藏等、聲ヲ同クシテ、其盛舉ヲ贊ス、衆既ニ退ク、慶喜特ニ小松帶刀等ヲ留メ、坐ヲ賜フテ之ヲ諮問ス、議遂ニ決シ、即日奏ス、其文ニ曰ク、

臣慶喜謹而皇國時運ノ沿革ヲ考候ニ、昔王綱紐ヲ解キ、相家權ヲ執リ、保平ノ亂、政權武門ニ移リテヨリ、祖宗ニ至リ、更ニ寵眷ヲ蒙リ、二百餘年、子孫相受、臣其職ヲ奉ス、ト雖モ、政刑當ヲ失フコト不少、今日ノ形勢ニ至候モ、畢竟薄徳ノ致ス所、不堪慙懼候、況ヤ當今外國ノ交際日ニ盛ナルヨリ、愈、朝權一途ニ出不申候ヲハ、綱紀難立候間、從來ノ舊習ヲ改メ、政權ヲ朝廷ニ奉還、廣ク天下ノ公議ヲ盡クシ、聖斷ヲ仰キ、同心協力、共ニ皇國ヲ保護仕候得者、必ス海外萬國ト可並立候、臣慶喜國家ニ所盡、是ニ不過ト奉存候、乍去猶見込之儀モ有之候得者、可申聞旨諸候へ相達置候、依之此段謹而奏聞仕候以上、十月十四日慶喜、天皇諸公卿ヲ召シテ廷議ス、此時朝廷實權ナク、幕府衰フト雖トモ、三百年ノ積威猶存ス、處分頗ル苦シム、大久保利通進ミテ曰ク、今機熟シ勢成ル、速ニ決スルニ若カスト、議乃決ス、翌十五日慶喜入朝ス、天皇其請ヲ允シ、優詔シテ曰ク、汝ノ

祖宗以來、委任スルニ大政ヲ以テシ、深ク倚賴スル所アリ、今ヤ汝宇内ノ形勢ヲ察シ、遂ニ奏シテ政權ヲ奉還ス、朕深ク之ヲ嘉ス、汝夫レ尙ホ天下ト同心盡力シ、以テ皇國ヲ維持シ、宸襟ヲ安セヨト、廿四日慶喜再ヒ上表シテ、征夷大將軍ノ職ヲ辭ス、姑ク其舊ニ仍リ、諸侯ノ入朝、公議ノ決裁ヲ待タシム、因テ命シテ列藩ヲ召シ、新政ヲ議セシム、尾張、越前、薩摩、安藝、彦根等ノ諸藩主相踵テ京師ニ入り、皆大政復古ヲ可トシ、各贊成スル所アリ、其事乃定ル、廿九日權大納言日野資宗ヲ宣命使トシテ、泉山、山陵ニ遣シ、大政復古ヲ先帝ノ靈ニ奉告ス、是ニ於テ源賴朝以來七百餘年ニシテ、天下再ヒ朝廷ノ大政ヲ仰クヲ得タリ、大政紀要、明治史要、日誌、

王政復古

慶應三年十月、徳川慶喜政權ヲ奉還シ、尋テ征夷大將軍ノ職ヲ辭ス、朝廷之ヲ許ス、此時ニ當リ、大政ノ權既ニ朝廷ニ歸スト雖モ、未タ政綱ヲ收ムルニ違アラサ、朝野議論紛然タリ、是ニ於テ先ツ十萬石以上ノ諸侯ヲ會シテ、輿論ヲ諮ハントス、時ニ海内ノ諸侯薩長土藝ノ外ハ、藩論一定スル者少ナク、或ハ慶喜ノ政權返上ヲ快シトセサル者アリ、召ニ應スル者甚タ少シ、十一月左大臣近衛忠房等大政一途確立ノ策、及太政官八省再興ノ議ヲ上ツル、朝廷之ヲ納ル、大政ノ方針稍

定マル、十二月中山忠能、正親町三條實愛、徳大寺實則、徳川慶勝、松平慶永、島津茂久、山内豊信、及尾張越前薩摩土佐ノ諸老臣ヲ小御所ニ會シ、内外ニ關スル處分及制度ノ改革ヲ議セシム、乃チ三條實美等曩ニ謫居ヲ命セラレタル公卿ノ官位ヲ復シ、京師ニ還ラシメ、毛利慶親父子ノ罪ヲ赦シ、其官爵ヲ復シ、入京ヲ許ス、又彈正尹尊融親王ヲ黜ケ、久我建通、岩倉具視等幕府ノ爲メニ罪ヲ得タル者ヲ赦ス、尋テ攝政關白、征夷大將軍、議奏、武家傳奏等ノ官職、及幕府ノ守護職、所司代等ヲ廢シ、新ニ總裁、議定、參與ノ三職ヲ置キ、乃チ有栖川宮熾仁親王ヲ以テ總裁ト爲シ、嘉彰親王、晃親王、三條實美、岩倉具視、島津茂久、松平慶永、伊達宗城、山内豊信ヲ議定ニ任シ、大原重徳、橋本實梁等ヲ參與ニ任ス、尋テ薩摩藩士西郷隆盛、大久保利通、長門藩士木戸孝允、土佐藩士後藤象次郎等ヲ以テ參與ト爲シ、假ニ一乘院里坊ニ於テ參與局ヲ設ケ、以テ政事ヲ執ラシム、乃チ詔シテ曰ク、自今以後大小ノ政令朝廷ヨリ出ツ、四方其レ之ヲ體セヨト、是ヨリ先岩倉具視、洛北岩倉ニ屏居シ、勤王ノ土玉松操等ヲ延キ、俱ニ復古ノ業ヲ謀ル、是ニ至リ操等復古ノ目的ハ、中古ノ制度ヲ本トセス、專ラ神武創業ノ古制ヲ本トシ、而シテ進取濶大ノ政務ヲ執ルヘキヲ論ス、具視其言ヲ納レ、以テ國事ヲ贊畫ス、是ニ於テ王政復古ノ大業始テ成ル、時人稱シテ御一新ト曰フ、時ニ徳川慶喜三條城ニ在リ、松平

慶永命ヲ傳フ、城兵此改革ヲ喜ハス、將ニ事ヲ起サントス、慶喜之ヲ制シテ止ム、朝廷乃チ勅シテ親ヲ萬機ヲ裁シ、博ク公議ヲ採リ、舊幕府ノ慣例法制ノ善長ナル者ハ舊ニ仍ラシメ、又才俊ヲ列藩ニ徵シテ、參與ニ列セシム、之ヲ徵士ト曰フ、又貢士ノ制ヲ定メ、大藩ヨリ三名、中藩ヨリ二名、小藩ヨリ一名ヲ撰出セシム、尋テ徵士貢士ノ稱ヲ廢シ、直ニ藩士ヲ徵用ス、藩士ノ外、庶民ト雖モ材器アル者ハ之ヲ擢用シ、以テ官職ニ就カシム、是ニ於テ、門閥政治ノ風習一洗シ、國家ノ綱紀大ニ變更ス、爾後百度日ニ張リ、文物月ニ開ケ、駸々トシテ明治ノ隆運ヲ致セリ、

### 五事誓約

謹テ按スルニ維新ノ大業ハ、歲序ノ新ナルカ如ク、旭日ノ昇ルカ如シ、乾坤其觀ヲ改メ、萬物其生ヲ遂ク、稱シテ之ヲ復古ト謂フト雖トモ、其革新ノ偉蹟ニ至テハ、開國以後第二ノ創業ト謂フヘシ、其淵源ヲ繹ヌルニ深遠ナリト雖モ、其大基ヲ確定シテ以テ今日ノ盛ヲ致セシハ、所謂五事ノ誓約ニ在リ、爰ニ欽テ五事誓約ノ祭文誓文勅諭ヲ記シ、以テ盛徳大業ノ基因スル所ヲ明ニス、

明治元年三月十四日、天皇紫宸殿ニ御レ、公卿諸侯ヲ率テ、天神地祇ヲ祭リ、新政ノ大綱ヲ立テ、誓約ヲ定ム、權大納言三條實美祭文ヲ奏ス、其文ニ曰ク、

大政紀要、玉松操傳、尊攘記事、維新史料、明治史要、國史眼録取、

懸卷 久毛 恐 支 天神地神 乃大前 爾今年三月十四日 平生日乃足日 撰定 天 禰宜申 佐久今 與 利 天津神 乃御言寄 乃隨 仁 天下 乃大政 遂執行 波無止之天 親王卿臣國々諸侯百寮官人 遠引居連 天此神床 乃大前 仁誓 津其久波 近 起頃 保 比 邪者 乃是所彼所 仁荒備武 比天 天下佐夜藝 仁 佐夜藝人 乃心 毛平穩 奈其受 故是 以 天下 乃諸人等 乃力 遠合 世心 遠一 津仁 之天 皇 我 政 遠 輔翼奉 利 令仕奉給 明 止 請祈 申禮代 波 橫山 乃如 久置高成 豆奉 留形 遠 聞食 豆 天下 乃萬民 遠治給 比 谷蟻 乃狹渡 留極白雲 乃墮居 向伏限逆敵對者 波 令在給 波受 遠祖尊 乃恩賴 遠蒙 利 天無窮 仁 仕奉 留 人共 乃今日 乃誓約 爾 違 波無 者 波 天神地祇 乃倏忽 仁刑罰給 波無 物 會 止 皇神等 乃前 爾 誓 乃 吉詞申給 波久 止申 畢 五事ノ誓約ヲ宣ス、其條ニ曰ク、

一 廣ク會議ヲ興シ、萬機公論ニ決スヘシ、  
一 上下心ヲ一ニシテ、盛ニ經綸ヲ行フヘシ、  
一 官武一途、庶民ニ至ルマテ各、其志ヲ遂ケ、人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス、  
一 舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クヘシ、  
一 知識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スヘシ、

因テ詔シテ曰ク、我國未嘗有ノ變革ヲ爲サントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先ダテ、天地神明ニ誓ヒ、大ニ斯國是ヲ改メ、萬民保全ノ道ヲ立テントス、衆亦此旨趣ニ基キ、協心努力セヨト、公卿諸侯等奏對シテ曰ク、勅意宏遠誠ニ感銘ニ堪ヘス、臣等謹テ敍旨ヲ奉載シ、死ヲ誓ヒ、黽勉從事、冀クハ以テ宸襟ヲ安セント、天皇嘉尙ス、尋テ又詔シテ曰ク、朕幼弱ヲ以テ大統ヲ紹ク、何ヲ以テ萬國ニ對立シ、列祖ニ事ヘント、朝夕恐懼ス、窮ニ考フルニ中葉以降武家權ヲ專ニシ、陽ニハ朝廷ヲ推尊シ、陰ニハ之ヲ辨髦ニス、名ハ億兆ノ父母タレトモ、其實ハ赤子ノ情ヲ知ラス、朝威倍衰ヘ、上下隔絶スルコト霄壤ノ如シ、此ノ如クナラハ何ヲ以テ天下ヲ統治セシヤ、今ヤ政體一變シ、億兆ノ責朕カ躬ニ歸ス、朕躬親ヲ勞劬ニ當リ、以テ列祖ノ治績ヲ紹述セント欲ス、熟、宇内ノ形勢ヲ察スルニ、各國四方ニ雄峙シ、競テ開化ニ進メリ、是時ニ當リ、我國獨リ時世ニ背ク、舊習ヲ墨守シ、九重ニ深居シテ、一日ノ安ヲ偷ミ、百年ノ憂ヲ忘ル、トキハ、遂ニハ各國ノ凌侮ヲ受ケ、上ハ列聖ヲ辱メ、下ハ億兆ヲ苦ムルニ至ラン、朕既ニ百官諸侯ト誓ヒ、斯大業ヲ濟サンコトヲ約セリ、爾億兆舊來ノ陋習ニ慣レ、過テ推尊ヲ致シ、朕ヲシテ艱難ヲ親ラスルコト能ハス、民ニ父母タルノ道ヲ失ハシムルコト勿レト、是明治維新ノ國是ニシテ、爾來千緒萬端皆之ニ由ラサルハナク、日ニ進ミ、月ニ將ミ、憲法ヲ定メ、制度ヲ立

テ、文教ヲ興シ、武備ヲ奮ヒ、内ハ萬民ヲ安シ、外ハ邦威ヲ輝シ、以テ古來未嘗有ノ隆運ヲ開ケリ、通觀達視、内外ニ考ヘ古今ニ徵シ、立國ノ大經、爲政ノ方針ヲ立ツルニアラスンハ、豈其此ノ如キヲ得ンヤ、嗟豈盛ナラスヤ、太政官日誌、大政紀要、明治史要編取、

### 六師親征

大將軍德川慶喜ノ政權ヲ奉還スルヤ、譜第ノ將士等意ニ謂ヘラク事必ス允サレスト、而テ廷議勇斷直ニ其奏請ヲ允ス、事意外ニ出テ、衆頗ル疑懼ス、尋テ毛利氏ノ入京ヲ許シ、五卿ノ官爵ヲ復スルニ及ヒ、物情益、恟々タリ、守護職松平容保所司代松平定敬等亦自ヲ安セス、並ニ病ト稱シ、衆ヲ率井テ二條城ニ入ル、是時薩長藝諸藩ニ命シ、兵ヲ以テ九門ヲ守ル、德川氏ノ衆亦戒嚴、二條城ニ據ル、殺氣京師ニ滿テ、闕下騷擾ス、德川慶勝尾張前藩主、松平慶永越前前藩主、之ヲ憂ヒ、數、二條城ニ入テ慶喜ニ說ク所アリ、慶喜之ヲ諾ス、松平容保松平定敬等頗ル激厲スレトモ慶喜動カス、譜第將士等慶喜ニ勸メテ曰ク、事此ニ至ル、宜シク大阪ニ據リ喉襟ヲ扼シ、檄ヲ遠近ニ傳ヘ、以テ後圖ヲ爲スヘシト、容保定敬等亦之ヲ德憑ス、危機益、迫ル、慶喜疑懼ス、乃テ上書シテ曰ク、暫ク大阪ニ退キ以テ麾下ノ動搖ヲ制セント、慶應三年十二月十一日遽ニ容保定敬及ヒ板倉勝靜等譜第ノ將士ヲ率井テ南下ス、獨リ井伊直憲彦根藩主、病ト稱シテ京師ニ留ル、或人云フ慶喜ノ南下スル

ハ計ル所アルナリト、朝廷乃チ會津桑名二藩土ノ入京ヲ禁ス、是ヨリ先キ、朝廷斷然舊制ヲ廢シ新令ヲ布ク、慶喜意大ニ平ナラス、以爲ラク是レ強藩幼帝ヲ挾ミ勅ヲ矯メ事ヲ專ニスルナリト、既ニ大阪ニ赴クヤ、乃チ抗疏シテ之ヲ論ス、省セス、會、江戸ノ浪士薩藩邸ニ潜匿シ抄掠ヲ擅ニス、巡兵乃チ邸ヲ燒キ、其徒ヲ擒ス、事上國ニ聞ユ、徳川島津二家益隙アリ、時ニ政權已ニ朝廷ニ歸スレトモ、政費支ヘス、議定參與等議シテ曰ク、宜シク徳川以下諸藩ニ課シテ之ニ充ツヘシト、乃チ徳川慶勝松平慶永ヲシテ往テ慶喜ニ諭サシム、二人大阪ニ至リ、勅ヲ傳ヘ且ツ曰ク、朝廷卿ヲ以テ議定ニ任ス、宜シク輕裝入朝シ以テ人心ヲ安スヘシ、若シ戒心アラハ、尾越二藩ノ兵ヲ以テ之ヲ扞衛セント、慶喜之ヲ諾ス、容保定敬等慶喜ニ説テ曰ク、尾越二公ノ言輕シク信スヘカラス、此行君側ヲ清ムルニ在リ、内府宜シク兵ヲ以テ北上スヘシ、臣等死ヲ以テ之ニ從ハント、慶喜意乃チ決ス、明治元年正月、徳川慶喜兵凡三萬人ヲ擧ケ、其臣瀧川某ヲシテ薩藩追討ノ表ヲ上ラシメ、繼クニ會津桑名二藩ノ兵ヲ以テシ、自ラ後軍ヲ率ヰテ將ニ京師ニ入ラントス、事京師ニ聞ユ、朝廷乃チ薩長二藩ニ命シテ、伏見鳥羽ノ兩道ヲ拒守セシム、隊長伊知地正治山田顯義等便宜事ニ從フヲ請フ、之ヲ許ス、三日朝幕兵關門ニ至ル、入ルヲ得ス、乃チ砲ヲ發シ戰ヲ開ク、官軍力戰之ヲ退ク、京師戒嚴ス、即

夜議定嘉彰親王仁和寺宮ヲ以テ征討大將軍ト爲シ、錦旗節刀ヲ賜フ、大將軍出テ、東寺ニ陣ス、又參與西園寺公望ヲ以テ山陰道鎮撫總督ト爲シ、兵ヲ率ヰテ山陰ニ入り、參與橋本實梁ヲ東海道鎮撫總督ト爲シ、兵ヲ率ヰテ東海ニ出ツ、四日味爽、兩軍大ニ伏見鳥羽ニ戰フ、賊軍敗績シテ淀ニ退ク、五日官軍淀ヲ攻ム、六日橋本ヲ攻ム、官軍連ニ勝テ、賊兵盡ク潰走ス、是夜徳川慶喜大阪城ヲ棄テ、倉皇海ニ航シテ東ニ走ル、官軍大阪城ヲ收ム、八日大將軍京師ニ凱旋ス、是ニ於テ朝廷徳川慶喜以下二十七人ノ官爵ヲ褫キ、征討ノ令ヲ發ス、總裁熾仁親王有栖川宮ヲ以テ征東大總督ト爲シ、錦旗節刀ヲ賜フ、議定嘉彰親王海軍總督タリ、薩長二藩先鋒トナリ、旌旗堂々東ニ向フ、二月三日、天皇太政官代ニ幸シ、親征ノ詔ヲ下シ、軍備ヲ整ヘシム、二十八日、親ク列侯ヲ召シ、親征ノ旨ヲ告ケ給フ、三月二十一日、車駕京師ヲ發ス、松平慶永、淺野茂長、池田慶徳、加藤泰秋等前驅タリ、鍋島茂實、毛利廣封、織田信英、松浦詮等後從タリ、其他公卿將士前後ニ供奉シ、儀仗甚盛ナリ、遠邇來觀スル者雲ノ如ク、中興ノ盛業ヲ瞻仰セサルハナシ、天皇途ニ石清水神宮ニ謁シ、遂ニ蹕ヲ駐メ、次日再ヒ蹕ヲ守口驛ニ駐メ、二十三日大阪ニ入り、西本願寺ヲ以テ行在所トナス、衆皆萬歳ヲ唱フ、二十六日天保山ニ幸シ、海軍ノ演習ヲ覽、四月六日大阪城ニ、於テ薩長土藝細川柳澤等諸藩ノ練兵ヲ覽、畢テ酒肴ヲ賜フ、

是日天皇歩シテ天主臺ニ登リ、又馬見所ニ臨御シ、俄ニ從軍將士ノ乘馬ヲ觀ル、又親シク外國公使及ヒ將官等ヲ行在所ニ延見シ、國書ノ勅答ヲ爲ス、大阪ノ孝子節婦及ヒ老者ニ賑恤ノ典ヲ行ヒ、軍國ノ暇ヲ以テ、學士ヲ召シ大學孫子三略古事記等ノ書ヲ講セシム、是時ニ當リ、大總督熾仁親王ヲ駿府ニ建テ、以テ東海東山二道ノ軍務ヲ指揮シ、數狀ヲ行在所ニ奏ス、是ヨリ先キ德川慶喜專ラ恭順ヲ表シ、旨ヲ其臣大久保一翁、勝安房ニ授ケ、麾下ヲ戒メ錦旗ニ抗スルコトナカラシメ、終ニ江戸城ヲ出テ、寬永寺ニ屏居ス、衆懾ハス、或ハ私ニ隊位ヲ編シ、或ハ脱シテ常野甲信ノ間ニ走ル、慶喜屢使ヲ遣シテ罪ヲ謝ス、許サス、先鋒進テ品川驛ニ至ル、勝安房、官軍參謀西郷隆盛ト舊アリ、乃々自ラ來リテ隆盛ニ就キ、具ニ慶喜恭順ノ狀ヲ陳ヘ、以テ攻撃ヲ止メ、コトヲ請ヒ、分疏甚力ム、隆盛之ヲ大總督宮ニ啓シ、攻撃停止ノ令ヲ下ス、四月四日勅使橋本實梁、柳原前光江戸城ニ抵ル、海江田武次、西郷隆盛等之ニ從フ、德川慶賴田安門ヲ開テ迎ヘ、謁ス、乃々勅旨ヲ傳ヘ、慶喜ノ死一等ヲ減シ、命スルニ五事ヲ以テス、一ニ曰ク慶喜ヲ水戸城ニ幽ス、二ニ曰ク江戸城ヲ收ム、三ニ曰ク軍艦銃砲ヲ收ム、四ニ曰ク家臣ヲ郭外ニ屏ク、五ニ曰ク家臣ノ與謀者ヲ處分ス、慶賴之ヲ慶喜ニ傳フ、慶喜悉ク命ヲ奉ス、大總督宮之ヲ行在所ニ奏ス、天皇乃々令ヲ從軍將士ニ下シテ曰ク、慶喜既

ニ降服以テ宸斷ヲ仰ク、朕仁ヲ施シ寬典以テ之ヲ處ス、宜シク速ニ師ヲ旋スヘシト、閏四月七日、車駕大阪ヲ發シ、次日京師ニ還幸ス、尋テ東北悉ク平キ、海内決ク王化ニ歸ス、古昔事アルヤ、天皇親征以テ不庭ヲ征伐ス、兵權上ニ在リ、皇威振張ス、齊明帝征西ヨリ一千二百餘年ニシテ、後村上帝親ヲ六軍ヲ督シ、以テ足利氏ヲ征ス、大業成ヲスト雖トモ、以テ古制ヲ舉クルニ足ル、此ヨリ五百餘年ヲ經テ、今上大權ヲ恢復シ、親征ノ廢典ヲ舉ク、六師時ニ動キ、禍亂忽々平ク、嗚呼盛ナル哉、

### 今上登極

今上天皇明治元年八月廿七日、紫宸殿ニ於テ即位ノ大禮ヲ舉ク、初メ孝明帝崩御、今上慶應三年正月九日ヲ以テ踐阼ノ式ヲ行フ、當時幕府ノ末造ニ屬シ、軍國多事、其十月ニ幕府大政ヲ返上シ、大權王室ニ復スト雖トモ、繼テ伏見ノ戰爭トナリ、東北ノ親征トナリ、未タ大禮舉行ニ至ラザリシカ、此秋ニ及ヒ、王師連捷、大勢已ニ定マルヲ以テ、吉日良辰ヲ卜シ、即位ノ大禮舉行ノ令アリ、此時神武天皇ノ創業ニ基キ、古今ヲ通觀シ、以テ大規模ヲ定メラル、因テ即位大禮ノ如キモ、時ニ因リ宜ヲ制スヘキヲ以テ、當時有名ノ有職、學識ノ大家ヲ撰ミ、其事ヲ命シ、福羽美靜谷森種朶等其ノ事ヲ掌トリ、創定更始スル所アリ、其當時ノ七官及ヒ諸

藩主ヲシテ其儀ニ參セシムルカ如キ美靜ノ建議ニ出ツト云フ此ニ於テ其儀式成リ朝儀已ニ定マリ此月廿三日太政官ヨリ其事ヲ公布セリ曰ク、

此度御即位之大禮其式古禮ニ基キ大旌始メ製作被爲改九等官ヲ以テ是迄之三役ニ令並立總テ大政之規模相立候様被仰出中古ヨリ被爲用候唐制之禮服被止候事其他公布之ヲ畧ス

中古以來ノ制トナリシ唐制ノ儀式ヲ廢シ新ニ其禮ヲ定メラル其大要ヲ記ス  
レハ天皇御服ノ袞冕ヲ廢シ立纓ノ御冠鞠塵ノ御袍ヲ御シ銅鳥纛ニ代フルニ  
大幣旗ヲ以テシ竿長二丈七尺眞榦木ヲ附ケ以下幣旗皆同シ青黃赤白紫ノ帛長四丈  
二尺ナルヲ垂レ赤青白ノ玉三綴一級大玉七小玉廿七鏡劔ヲ附ク本日像旗ニ代ルニ日  
幣旗ヲ以テス竿長二丈五尺九寸赤帛二丈八尺五筋ヲ垂レ月像旗ニ代フルニ  
月幣旗ヲ以テシ白帛ヲ垂レ各鏡ヲ懸クル日幣旗ノ如シ四神旗ニ代フル御前  
幣旗ヲ以テス各赤白青ノ帛ヲ垂レ鏡劔ヲ懸ク竿長二丈五尺九寸四龍像纛ニ  
代フルニ左右幣旗ヲ以テス竿長二丈三尺九寸鏡帛ヲ懸クル御前幣ノ如シ本  
萬歲幡ニ代ルニ左右幣旗ヲ以テス青黃赤白紫ノ帛ヲタレ赤白ノ玉三綴ヲ垂  
ル竿長一丈九尺九寸本鷹像幡ニ代ルニ左右旗ヲ以テシテ赤白ノ帛ヲ懸ク竿  
長一丈八尺九寸玉ヲ懸クルモノ二本鏡ヲ懸クルモノ二本劔ヲ懸クルモノ二

本左右小幡ハ青帛ヲ垂ルモノ二本黃帛二本赤帛二本白帛二本紫帛二本各  
鏡ヲ懸ク竿長一丈六寸五分小幡凡十本左右鉾各四本從前階前ノ香爐ヲ廢シ  
代ルニ大地球儀ヲ以テス是皆新制ノ大ナルモノナリ從來香爐ヲ置キレハ、置レ  
テ止メ地球儀ヲ置カレ、香爐ノ意ニ取ルナルヘシ、此地球儀ハ水戸烈公ノ自製獻納ノ品ニテ、徑六尺餘アリシト、其位置ハ式文ニ詳カナリ、  
其職事以下參列ノ皇族大臣以下文武官各當色服ヲ著ケ無位ノ諸員ハ黃袍ヲ  
著ケシム實ニ中古以來ノ盛儀ナリ今太政官日誌ニ據リ當日ノ儀式ヲ撮記シ、  
其宣命文壽詞大歌ハ其全文ヲ錄セリ夫即位ノ禮ハ神武天皇ニ始マリ天智天  
皇ニ至リテ大ニ定マル故ニ歷朝登極ノ詔文ニ大津ノ宮ニ御宇天皇云々ノ文  
アリ此ニ及ヒ更定創設アリテ新儀ヲ立テ永ク制定ノ法トナリ後來皇室典範  
ニヨリ此平安京ニ於テ登極ノ大禮アレハ必ス此式ニ據ラルナルヘシ故ニ  
特ニ其事ヲ記スルト云フ、

即位式

前二日習禮

前一日紫宸殿ヲ修飾ス、

當日早且庭上中階以南正面十有一丈四尺ニシテ中央ニ大幣旗一旒其左右  
日月兩幣旗各一旒其東西ニ御前幣旗各二旒ヲ列植ス中階以南左右二方七

丈八尺ニ左右幣旗各五旒ヲ對立シ、東西相距ル七丈三尺、其次ニ各東西ニ退  
ク、五尺五寸ノ地ヨリ、左右小幡各五旒ヲ對立ス、左右鉾ハ左右幣旗ノ後ニア  
リ、地球儀ヲ階南中央二丈二尺ニ設ケ、此日兩儀ヲ用キテ、故ニ地其南二丈二  
尺ニ奉幣案、此日階上又其南二丈二尺ニ宣命版、其南三丈ニシテ東ニ折ル九  
尺、外辨諸員ノ標ヲ設ク、當朝宣命文天覽已ニ畢リ、ユレテ宣命使ニ下ス、諸衛  
各所部ヲ勒シ前庭ニ立ツ、辨事御幣ヲ南殿ニ設ク、辰刻近衛府列陣鼓、進陣鼓  
行陣鼓ヲ順次擊ツコト法ノ如シ、諸門鼓皆應ス、左右大將、近衛次將、中務省輔  
及内舍人、左右衛門、及門部大舍人、内藏大藏、掃部、主殿等官人、皆其位次ニ就キ、  
諸儀已ニ備ル、此時外辨以下、幄座ニ就キ、典儀版位ニ就キ、九等官承明門外左  
右ニ列ス、外記諸儀備ルヲ内辨ニ告ク、内辨廣幡内大臣源忠禮東階ノ南、幄中  
ニ就キ、神祇知官事鷹司前右大臣藤原輔熙西階西幄中ニ居ル、兵庫頭内辨ノ  
幄南ニ居ル、既ニシテ兵部丞兵庫寮鼓師ニ命シ外辨ノ裝畢鼓ヲ擊タシム、諸  
門鼓ユレニ應ス、東西掖門ヲ開ク、少頃アツテ褰帳命婦二人、一ハ有栖川親宮、  
威儀命婦二人、一ハ下藤伊豫、一ノ采女之ニ屬ス、高御座左右ノ座ニ就キ、左ハ  
中務卿幟仁親王、有栖川右ハ常陸太守晃親王、山陰東西階ヨリ昇テ、高御座ノ兩側  
ニ立ツ、次ニ侍從富小路前中務大輔藤原敬直左ヨリ、長谷美濃權介平信成右

ヨリ進テ、殿上ニ立ツ、高辻少納言菅原修長ハ左、五條少納言菅原爲榮ハ右ニ  
各簀子ニ對立ス、伴佐伯二氏承明門下ニ立ツ、門開ク、兵庫頭鼓師ヲ召シ鼓ヲ  
擊タシム、以下鼓並皆兵諸門鼓皆應ス、七等官以上、承明門ヨリ左右並進位ニ  
就ク、輔相岩倉右兵衛督源具視中階東南隅ノ東二丈五尺ノ地ニアツテ西面  
ス、議定中山儀同藤原忠能、正親町三條前大納言藤原實愛、德大寺大納言藤原  
實則、中御門大納言藤原經之、越前權中納言源慶永、字和鳥宰相藤原宗城、西南  
隅ノ西二丈五尺ニアツテ東面ス、參與知府事辨事判府事其南ニ列シ、知官事  
副知官事議長判官事一等知縣事輔相ノ南ニ列シテ相對ス、三等陸海軍將左  
第一幣旗ノ北一丈五尺東ニ退ク一丈八尺ニシテ西面ス、又東方ハ一等知縣  
事ノ南三丈東ニ退ク一丈ニシテ權辨事權判府事史官一等判縣事、西方ハ判  
府事ノ南三丈六尺西ニ退ク一丈ニシテ權判官事三等知縣事知司事等對立  
ス、夫ヨリ二等判縣事書記判司事等一等判縣事ノ南一丈ヨリ西ニ折ル、三  
尺ノ處ニ列シテ北面シ、二等譯官ハ三等知縣事ノ南一丈東ニ折ル、一丈五  
尺ニ在テ北面ス、八等九等官ハ承明門外ニ在テ、官掌筆生左ニ列シテ西面シ、  
守辰ハ東面ス、此日兩儀ヲ以テ、七等官左右次ニ外辨承明門ヨリ入テ標  
ニ就ク、又親王公卿南殿北廂東三箇間有位ノ諸侯ハ東廂ニ候シ、無位ノ諸侯



狩衣直垂徵士履士ハ日華門南側中下大夫ハ月華門南側ニ候ス是ニ於テ天皇清涼殿ヨリ歩シテ高御座ニ着御内侍二人劍璽ヲ奉シテ前行玉座ノ左ニ置テ退ク辨事御笏ヲ上ル褰帳鉦ヲ拊ツ褰帳命婦二人高御座後階ヨリ昇リ御帳ヲ褰ク諸仗警ヲ稱ス群臣齊ク宸儀ヲ拜ス辨事御幣ヲ御前ニ上ツテ退ク神祇知官事西階ヨリ昇リ御幣ヲ受テユレナ案ニ奉シ再ヒ昇殿復奏ス群臣再拜ス宣命使版ニ就テ制ヲ宣フ群臣再拜ス外辨上首三條西大納言藤原季知進テ壽詞ヲ上ル畢テ伶官樂ヲ奏ス大樂畢テ群臣再拜ス左親王禮畢ルヲ奏ス垂帳鉦ヲ拊ツ褰帳命婦昇テ御帳ヲ垂ル諸仗蹕ヲ稱ス天皇本殿へ還御ス退鼓ヲ撃ツ諸門鼓皆應ス九等官先退ク次ニ外辨侍從褰帳威儀内辨及ヒ參役諸員順次退出伴佐伯承明門ヲ鎖ス諸衛解陣鉦ヲ鳴シ皆退ク諸儀乃テ畢ハル

宣命文

現神止 大八洲國所知 天皇 詔旨 宣布 勅命 親王諸臣百官人等天下 公民衆聞食止 宣布 挂畏 平安官 御宇 倭根子天皇 宣布 此天日嗣高座 乃業 挂畏 近江 乃 大津 乃 官 御宇 天皇 乃 初賜 比 定賜 留 法隨 仕奉止 仰賜 比 授賜 比 恐 受賜 留 御代御代 乃 御定有 可 上 方 今天下 乃 大政古 復

志賜 比 櫃原 乃 官 御宇 志 天皇御創業 乃 古 基 大御世 彌益々 吉 御 代止 固成賜 半 其大御位 即 世 賜 比 進 毛 不知 爾 退 毛 不知 爾 恐 坐 止 久 宣布 大命 乎 衆聞食止 宣布 然 爾 天下治賜 留 君 波 良 賜 乎 得 豆 平 久 安 久 治賜 布 物 爾 在 止 奈 所聞爰朕雖淺劣親王諸臣等 乃 相穴 比 扶奉 半 事 爾 依 豆 仰賜 比 授賜 留 食國 乃 天下 乃 政 波 平 久 安 久 仕奉 止 倍 志 所念行 須 是以彌抱正直 乃 心 豆 天皇 我 朝廷 乎 衆助仕奉 止 宣布 天皇 我 勅命 乎 衆聞食止 宣

慶應四年八月廿七日

壽詞

八十日日 雖有今日 乃 生日 乃 足日 爾 挂卷 毛 畏 仗 明神 止 大八洲所知 食 須 天皇 乃 天津御位 爾 登 里 賜 留 此 乃 御賀 乃 庭上 爾 親王諸臣百官人等 恐 美 恐 毛 言 祝奉 豆 朝日 乃 豐逆登 爾 稱辭竟申賜 久 言卷 波 雖畏未國稚土 維 志 里 時高天原 爾 天神諸伊邪那岐命伊邪那美命二柱 乃 大神 爾 此多陀用幣流國 乎 修理固成 止 詔 知 言依 志 賜 比 次伊邪那岐命天照大 御神 爾 詔 久 汝命 波 高天原 乎 所知 止 事依而賜 比 次天照大御神高木神之命以 豆 皇御孫之命 乎 天津高御座 爾 坐 豆 天津璽 止 爲 豆 八尺勾聽八咫鏡草那藝劍 三種 乃 神寶 乎 捧持賜 天 言壽 波 宣 久 皇 我 宇都御子皇御孫命 此 乃 天津高御座

爾坐<sub>互</sub>天津日嗣<sub>手</sub>天地乃共万千秋乃長五百秋<sub>爾</sub>大八洲豐葦原乃瑞穗之國  
 安國<sub>止</sub>平<sub>久</sub>所知食<sub>止</sub>言寄奉賜<sub>比</sub>國中<sub>爾</sub>荒振神等<sub>波</sub>神間<sub>爾</sub>問<sub>志</sub>賜<sub>比</sub>神掃  
 掃賜<sub>比</sub>語問<sub>志</sub>磐根樹立草乃垣葉<sub>手</sub>語止<sub>互</sub>天之磐坐放天之八重雲<sub>手</sub>伊頭乃  
 千別<sub>爾</sub>千別<sub>互</sub>天降依<sub>志</sub>賜<sub>比</sub>四方之國中<sub>爾</sub>山城乃日高見國<sub>手</sub>安國<sub>止</sub>定奉<sub>互</sub>  
 下津磐根<sub>爾</sub>宮柱太敷立高天原<sub>爾</sub>千木高知<sub>互</sub>天津日嗣所知行<sub>須</sub>皇御孫之命  
 乃美頭<sub>乃</sub>御舍<sub>手</sub>天之御蔭日之御蔭<sub>止</sub>稱辭竟奉<sub>爾</sub>四方國者天之壁立極國之  
 退立限青雲<sub>乃</sub>靄極白雲<sub>乃</sub>墜居向伏限青海原<sub>波</sub>棹柁不于舟艦<sub>乃</sub>至留極滿都  
 々氣<sub>互</sub>自陸往道者荷緒縛堅<sub>互</sub>馬爪至留極立都々氣<sub>互</sub>明神<sub>止</sub>天下國乃八十  
 國島<sub>乃</sub>八十島漏<sub>留</sub>事無<sub>久</sub>墜<sub>留</sub>事無<sub>久</sub>彌高<sub>爾</sub>彌廣<sub>爾</sub>所知食<sub>須</sub>皇御孫命之大  
 御世<sub>手</sub>手長<sub>乃</sub>御代<sub>止</sub>堅磐<sub>爾</sub>常磐<sub>爾</sub>天地<sub>止</sub>共<sub>爾</sub>平<sub>久</sub>安<sub>久</sub>所知食<sub>手</sub>事乃御賀  
 乃吉詞<sub>手</sub>恐<sub>美</sub>恐<sub>美</sub>稱辭竟申賜<sub>止</sub>申<sub>須</sub>

慶應四年八月廿七日

大歌

和太都美乃波末乃末左古遠可楚遍都々伎美賀千登世乃安理可須耳世武  
 車駕東幸

明治元年四月德川氏已ニ降り官軍江戸城ヲ攻メ德川氏ヲ駿遠二州ニ封シ殘

黨ヲ東叡山ニ伐テ江戸始メテ定マル然レトモ覇府已ニ廢シ人民流離一時凋  
 衰ス俗之ヲ江戸瓦解ト云フ且奥羽猖獗猶王師ニ抗シ物情未タ寧カラス此ヨ  
 リ先キ參與大久保一藏建議スル所アリ此ニ於テ詔シテ曰ク朕今萬機ヲ親裁  
 シ億兆ヲ綏撫ス江戸ハ東國第一ノ大鎮四方輻湊ノ地ナリ宜シク親臨シ以テ  
 其政ヲ視ルヘシ因テ自今江戸ヲ稱シテ東京ト爲ス是レ朕ノ海内一家東西同  
 視スル所以ナリ衆庶此意ヲ體セヨト九月二十日車駕京都ヲ發シ路ヲ東海道  
 ニ取ル巡狩ノ典廢スル已ニ數百年九重深遠復々民間ノ狀ヲ知ラス是ニ至テ  
 天皇始テ之ヲ躬ラス人民ヲシテ其業ヲ營スル常ノ如クナラシメ以テ親シク  
 民ノ情狀ヲ觀車駕過クル所孝子義僕ヲ旌表シ高年ニ物ヲ賜フ十月十三日車  
 駕東京ニ着ス乃チ江戸城ヲ以テ皇居ト定メ東京宮城ト稱ス此時東北已ニ平  
 ラキ大總督熾仁親王凱旋錦旗節刀ヲ奉還ス十二月八日車駕東京ヲ發シ廿二  
 日京都ニ還幸ス京都府知事長谷信篤諸官ト俱ニ粟田宮ニ奉迎ス二年正月六  
 日府下ノ市民ヲシテ南門外ニ於テ紫宸殿ヲ拜セシメ醮ヲ賜フ尋テ賜フ所  
 酒杯<sub>御土器</sub>各一個ヲ每町ニ頒ツ三月天皇將ニ伊勢大廟ニ謁シ再ヒ東京ニ幸  
 セントス乃チ供奉ノ諸員ヲ戒メ撫綏ノ朝旨ヲ體シ又沿道ノ府藩縣ニ令シテ  
 供億百般簡易ヲ主トセシム七日車駕皇宮ヲ發ス京都府判事松田道之諸官ト

俱ニ追分驛ニ奉送ス、廿八日車駕東京ニ着ス、十月五日皇后亦與テ發シテ、東京ニ行啓ス、初メ車駕東行セシヨリ、府下頓ニ蕭條、殆ト舊都ノ觀アリ、市民甚タ憂色アリ、皇后行啓ノ事アルニ及ヒ、道路相傳ヘ以テ遷都ノ事アラントスト云フ、人心益、洵々、到所聚談巷議セサルナシ、或ハ貼紙投書以テ教唆スルモノアリ、九月廿四日ニ至リ、遂ニ黨ヲ結ヒ旗ヲ樹テ、石藥師門ニ集ルモノ數千人、將ニ直ニ禁門ニ叩訴シ、行啓ノ中止ヲ哀請セントス、門兵叱シテ之ヲ卻ク、兵部省彈正臺、京都府ニ牒シ、吏員ヲ派シテ、之ヲ處分セシム、留守官京都府ニ移示シ、明年還幸、大嘗會ヲ舉ケラル、ノ事、東京ニ於テ決定シ、遷都ノ事アラサルヲ以テ、衆ヲ鎮撫シ、其心ヲ安ンセシム、京都府乃々其旨ニ從ヒ、連日府廳ニ於テ市民ヲ召集シ、留守長官、府知事、兵部省、彈正臺、相共ニ之ヲ説諭シテ曰ク、天皇輦ヲ東京ニ駐メ、皇后亦行啓セララル、モ、遷都ノ事アルニ非ス、明年還幸シ、將ニ大嘗會ヲ此地ニ行ハレントス、妄ニ流言浮説ニ惑ヒ、騷擾シテ宸襟ヲ勞スルコト勿レト、懇々數百千言ニ及ヒ、又特ニ各町ノ循默令ヲ守ルモノヲ褒シ、又市民ノ名望アル者六人ニ命シ市中ニ曉諭セシム、此ニ於テ人心始メテ帖然タリ、此日遂ニ行啓アリ、其後太政官旨ヲ傳ヘテ、京都府ノ鎮撫、其宜ヲ得タルヲ賞ス、十月京都府更ニ説諭ノ事狀ヲ具シ、市民ヨリ上ツル所ノ還幸ノ願書數十通ヲ添ヘ、明年必ス還幸

アラントトナ請ヒ、且ツ洛中地子錢ヲ免除シ、并ニ産業基立金ノ下賜アラントトナ求ム、三年二月還幸延期ノ令出ツルヤ、京都府更ニ申請スルニ、還幸延期止ヲ得サルモ、若シ民心ヲ慰藉スルナクシハ、變動測ラレス、發令シカダシト、三月特ニ聽許アリ、乃々十九日二十日ヲ以テ、市中ノ町年寄五人組頭以上ヲ府廳ニ召集シ、府官留守官ト共ニ臨ミテ、太政官ノ令ヲ傳フ、曰ク、當年還幸、大嘗會行ハルヘキモ、東北綏撫未タ全カラス、諸國凶荒、國用乏絶、已ヲ得ス還幸延期セラルト、因テ特ニ洛中地子錢ヲ免除シ、又市民産業基本トシテ金十萬圓ヲ下賜セラ、旨ヲ傳ヘ、且ツ世界ノ形勢當今ノ急務ニ及ヒ、説諭スル所アリ、此ヨリ大少參事以上市中小學校ニ於テ、各組ヲ召集シ、懇諭スルコト數日ニ及フ、市民乃々其旨ヲ領シ、皇恩ノ忝ヲ拜シ、四月朔日、市中人民河東練兵場ニ會シ、聖上ヲ遙拜シ奉リ、賀茂神社ニ詣リ、寶祚無窮府中平安ヲ祈レリト云フ、大政紀要、明治史、要、京都府志、參取、

丁丑駐輦

明治十年一月、孝明天皇ノ十年祭期ニ當ル、車駕京都ニ幸シ、其祭典ヲ行ハントス、二十二日、天皇輦ヲ東京ニ發シ、二十八日、京都皇宮ニ着ス、三十日、天皇後月輪東山陵ニ參拜シ、親シク祭典ヲ行フ、親王大臣以下之ニ陪ス、是ヨリ先キ皇后、皇太后相踵テ京都ニ行啓ス、是ニ至リ同シク山陵ニ參拜ス、三十一日、車駕京都府

應ニ臨ム、知事榎村正直祝辭ヲ奉ル、其文ニ曰ク、

京都府知事臣正直謹ミテ祝辭ヲ奉ル、臣聞ク民ハ邦ノ本、本固ケレハ邦寧シト、恭シク惟ミルニ天皇陛下夙ニ淑念ヲ民事ニ垂レ給ヒ、東巡西幸徧ク民ノ疾苦ヲ訪セラレ、尋テ減租ノ詔ヲ下シ、今又鳳輦ヲ京攝泉和ノ地ニ巡ラサセラレ、地方廳ニ臨御シ、親シク庶政ヲ窺覽シ給フ、各地ノ人民豈聖旨ノ辱キヲ感戴セサランヤ、就中當府所管ノ人民ハ、特ニ輦下積年ノ恩澤ニ浴シ、望霓ノ情ニ堪エサルモ、今親シク鳳輦ヲ拜迎シ、欣喜諭フル所ヲ知ラス、夫レ上既ニ愛憐ノ切ナル斯ノ如ク、下亦欽慕ノ深キ此ノ如シ、是レ則テ上下緝和シ、本固ク邦寧ク、寶祚ノ悠久、天壤ト極リ無キ所以ナルカ臣正直方ニ地方ノ任ヲ辱クシ斯盛事ニ遭際シ、感荷ノ至リニ堪エス、謹ミテ聖壽ノ無疆ヲ祝シ、并セテ前年府下人民ニ賜ハル所ノ産業基立金ヲ以テ施設ノ事務、及ヒ其他舉行ノ概略物産便覽等ヲ集録シテ之ヲ奉ル、臣正直頓首敬白、

二月三日、車駕賀茂下上ノ社ニ幸ス、又寒天製造所ニ臨ム、五日、京都兵庫間鐵道開業式ヲ行フ、車駕親臨ス、京都府知事榎村正直僚屬ヲ率テ先驅シ、親王大臣及ヒ外國公使等扈從ス、天皇七條停車場ヨリ汽車ニ駕ス、供奉ノ諸員皆前後ニ分乘ス、大阪ヲ經テ神戸停車場ニ至リ、其日京都ニ還幸ス、七日、車駕京都ヲ發シ、宇

治ヲ經テ大和ノ奈良ニ至リ、十一日、畝傍ノ山陵ニ參拜ス、歸途大阪ニ至リ、十六日、京都ニ還幸ス、時ニ皇太后皇后輿ヲ京都ニ駐メ、女學校女紅場勸業場舍密局等ニ行啓シ、都下ノ學術技藝ヲ勸獎ス、十八日、車駕梅津村製紙場ニ幸ス、天皇將ニ二十一日ヲ期シテ東京ニ還幸セントス、會、西郷隆盛等亂ヲ鹿兒島ニ起シ、九州ノ壯士之ニ應スル者多シ、報聞ス、因テ輦ヲ京都ニ駐ム、内閣顧問木戸孝允、參議大久保利通、伊藤博文等ニ勅シ、軍國ノ事務ヲ處斷ス、十八日、諸門ヲ警戒シ、出入符ヲ以テス、十九日、征討ノ勅ヲ下シ、有栖川宮熾仁親王ヲ拜シ、征討總督トシ、陸軍中將山縣有朋、海軍大輔河村純義ヲ以テ參軍トシ、陸軍少將野津鎮雄、三好重臣、三浦梧樓ヲ旅團司令長官トシテ之ヲ討タシム、二十六日、議官柳原前光、陸軍中將兼參議黑田清隆等ヲ薩摩ニ遣ハシ、島津久光ニ諭シテ、賊ノ糧仗船舶ヲ沒收シ、中原尙雄等ノ囚ヲ解キ、鹿兒島縣令大山綱良ヲ拘ヘ、岩村通俊ヲシテ之ニ代ラシム、時ニ賊軍熊本城ヲ圍ミ、更ニ一隊ヲ山鹿田原坂ニ出シテ官軍ト戰フ、殺傷甚タ多シ、既ニシテ官軍田原坂及ヒ植木ノ險ヲ拔キ、進ミテ賊軍ヲ攀ツ賊軍能ク鬪フ、互ニ勝敗アリ、三月、黑田清隆ヲ征討參軍トナシ、熊本ノ敵背ヲ衝キ、以テ城中ノ應援ヲナサシム、是時ニ當リ西南亂方ニ酣ニ、海内ノ人心恟々タリ、天皇宸念措カス、乃テ侍補高崎正風ヲ慰問使トナシ、福岡ニ至リ、總督熾仁親